

松江市文化財調査報告書 第179集

市道古浦西長江線道路整備事業に伴う発掘調査報告書 2

# 広 垣 遺 跡

平成29(2017)年3月

島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

松江市文化財調査報告書 第179集

市道古浦西長江線道路整備事業に伴う発掘調査報告書 2

# 広 垣 遺 跡

平成29(2017)年3月

島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団



## 例　　言

- 本書は、平成 27 年度に委託を受けた、市道古浦西長江線道路整備事業に伴う広垣遺跡の発掘調査報告書である。
- 本書で報告する発掘調査は、松江市都市整備部土木課から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団（平成 28 年に公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団に改称）が実施した。
- 調査の遺跡名称、所在地、現地調査期間、開発面積、調査面積、調査組織は下記のとおりである。

(1) 遺跡の名称、所在地

名　　称　　広垣遺跡

所　在　地　　島根県松江市西長江町字下屋敷 554 番 1 外

(2) 調査期間

現地調査　　平成 27 年 11 月 20 日～平成 28 年 3 月 18 日

報告書作成　　平成 28 年 11 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

(3) 開発面積及び調査面積

開発面積　　48, 700 m<sup>2</sup>

調査面積　　384 m<sup>2</sup>

(4) 現地調査と報告書作成の組織

【現地調査】 平成 27 年度

依頼者　松江市都市整備部土木課

主　　体　　松江市教育委員会　　教　育　長　　清水　伸夫

事　務　局　松江市歴史まちづくり部　　部　　長　　安田　憲司

まちづくり文化財課　　課　　長　　永島　真吾

　　専門幹（埋蔵文化財調査室長兼務）　　飯塚　康行

　　埋蔵文化財調査室　調査係　　係　　長　　赤澤　秀則

　　〃　　〃　　〃　　専門企画員　　川上　昭一

　　〃　　〃　　〃　　嘱　託　　門脇　誠也

調査指導　島根県教育庁　文化財課　　主　幹　　深田　浩

実　施　者　公益財団法人松江市スポーツ振興財団　　理　事　長　　清水　伸夫

　　公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団（平成 28 年 7 月から）

　　埋蔵文化財課　　課　　長　　曾田　健

　　〃　　調査係　係　　長　　川西　学

　　〃　　〃　　調　查　員　　江川　幸子（担当者）

　　〃　　〃　　調査補助員　　北島　和子

調査に携わった発掘作業員（50 項順）

岩成敏章、岩成博美、加藤恵治、木村司、中村慎市

【報告書作成】平成 28 年度

依頼者 松江市都市整備部土木課

主 体 者 松江市教育委員会 教育長 清水 伸夫

事 務 局 松江市歴史まちづくり部 部長 藤原 亮彦

まちづくり文化財課 課長 永島 真吾

〃 専門幹（埋蔵文化財調査室長兼務） 飯塚 康行

〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係長 赤澤 秀則

〃 〃 〃 主幹 川上 昭一

〃 〃 〃 学芸員 三宅 和子

〃 〃 〃 嘱託 門脇 誠也

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 清水 伸夫

埋蔵文化財課 課長 曽田 健

〃 調査係 係長 川西 学

〃 〃 調査員 江川 幸子（担当者）

〃 〃 調査補助員 北島 和子

4. 本書に記載した遺物の洗浄・復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下のものが行った。

塩田陽子、坂本玲子、木村由希江

5. 現地調査及び報告書作成にあたっては次の方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。  
記して感謝の意を表する（敬称略）。

【現地調査】 加藤正利（古浦西長江線期成同盟会事務局次長）、柳浦龍郎（広垣自治会長、地権者）、

柳浦重明（地権者）、柳浦和治（地権者）、広垣町自治会、カンドーファーム（耕作者）、

柳浦俊一（島根県埋蔵文化財調査センター企画幹）

【報告書作成】 平石充（島根県教育庁島根県古代文化センター専門研究員）、中川寧（島根県埋蔵文化財

調査センター調査第2係長）、内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター嘱託員）、

岡崎雄二郎（松江市史松江城部会専門委員）

6. 本書の執筆及び編集は、松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て江川がおこなった。

7. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

【土師器・須恵器】

・松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』

第8集 1991

・大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994

・稲田陽介 2013 「第10章 出土遺物の様相 第2節 土器 1. 須恵器・土師器 3) 出雲國  
府跡出土土器の型式設定と実年代」『史跡出雲国府跡－9 総括編－』島根県教育委員会

8. 本書における「土層の色・質」は、調査時の記録をそのまま使用している。
9. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。
10. 本書における遺構ほかの記号は以下のとおりである。

SK : 土坑 SD : 溝 SA : 檻列 SX : 性格不明の遺構  
NR : 自然流路 NX : 性格不明の自然地形
11. 本書における遺物実測図の断面は、弥生土器、土師器を白ヌキ、須恵器を黒塗りで示している。また、見通しに入れた矢印は、土師器の場合は調整の方向、須恵器の場合は轆轤の回転方向を表している。
12. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。
13. 島根県・松江市と広垣遺跡の位地を下図に示した。



島根県・松江市と広垣遺跡位置図



# 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過 .....	1
第2章 位置と歴史的環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
(1) 西長江町の遺跡	
(2) 西長江町周辺の遺跡	
第3章 調査の成果 .....	7
第1節 調査の方法と概要 .....	7
第2節 削平された微高地の調査 .....	10
(1) 調査の概要 .....	10
(2) 基本層序 .....	11
(3) 遺物 .....	11
第3節 低地部の調査 .....	16
(1) 調査の概要 .....	16
(2) 基本層序 .....	17
(3) 遺構 .....	18
(4) 遺物 .....	18
第4節 旧河道部の調査 .....	19
(1) 調査の概要 .....	19
(2) 基本層序 .....	20
(3) 遺構 .....	24
(4) 旧河道と遺物 .....	32
(5) その他の遺物 .....	47
第4章 総括 .....	51
遺物観察表 .....	55
写真図版 .....	
抄録 .....	

## 挿 図 目 次

第 1 図	開発範囲及び調査範囲図	2	第 21 図	SX02 出土土器 (1)	29
第 2 図	広垣遺跡と周辺の遺跡	5	第 22 図	SX02 出土土器 (2)	30
第 3 図	広垣遺跡調査区位置図	8	第 23 図	SX02 周辺出土土器	31
第 4 図	調査区配置図及び地山標高図	9	第 24 図	NR02-A 出土遺物	32
第 5 図	削平された微高地の基本層序	10	第 25 図	NR03 出土遺物 (1)	34
第 6 図	1 区Ⅱ層出土遺物	12	第 26 図	NR03 出土遺物 (2)	35
第 7 図	2 区Ⅲ層出土遺物 (1)	13	第 27 図	NR03 出土遺物 (3)	36
第 8 図	2 区Ⅲ層出土遺物 (2)	14	第 28 図	NR03 出土遺物 (4)	37
第 9 図	2 区Ⅲ層出土遺物 (3)	15	第 29 図	NR02-B 出土遺物 (1)	39
第 10 図	低地部の基本層序	16	第 30 図	NR02-B 出土遺物 (2)	40
第 11 図	低地部の平面図と SX01	17	第 31 図	NR02-C の坏出土状況	40
第 12 図	低地部の出土遺物	18	第 32 図	NR02-C 出土遺物 (1)	41
第 13 図	旧河道と遺構配置図	21	第 33 図	NR02-C 出土遺物 (2)	42
第 14 図-1・2	旧河道部の土層図	22・23	第 34 図	NR02-E 出土遺物	43
第 15 図	SK01 と遺物出土状況	24	第 35 図	NX02 遺物出土状況	45
第 16 図	SK01 出土遺物	24	第 36 図	NX02 出土遺物	46
第 17 図	SA01	25	第 37 図	5 区遺物包含層出土遺物	48
第 18 図	SA02	26	第 38 図	6 区遺物包含層出土遺物	49
第 19 図	SA02 の杭 (一部)	26	第 39 図	グリッド配置図	50
第 20 図	SX02	28	第 40 図	遺構・河道変遷図	52
			第 41 図	石屋古墳出土埴輪	53

## 挿 表 目 次

第 1 表	発掘調査年次工程表	1	第 3 表	杭列 SA02 の杭観察表	27
第 2 表	杭列 SA01 の杭観察表	25			

## 本文中写真目次

写真 1	河川改修前の西長江川	3
------	------------	---

## 図 版 目 次

図版 1 (上)	調査前風景、手前の水田が 1 区 (南西から)	
(下)	削平された微高地：1 区完掘状況 (南西から)	
図版 2 (上)	削平された微高地：2 区完掘状況 (南西から)	
(下)	削平された微高地：3 区完掘状況 (北から)	
図版 3 (上)	削平された微高地、低地部：4 区完掘状況 (南西から)	
(下)	SX01 (南から)	
図版 4 (上)	旧河道部の調査：5 区完掘状況 (北西から)	
(下)	SA01 (西から)	
図版 5 (上)	SA02 (東から)	
(下)	SX02 (南から)	
図版 6 (上)	NX02 の堅杵未製品出土状況 (南から)	
(下)	旧河道部の調査：6 区完掘状況 (南西から)	
図版 7 (上)	SK01 遺物出土状況 (北から)	
(下)	NR03 完掘状況 (西から)	
図版 8 ~ 18	遺物写真	

## 第1章 調査に至る経緯と経過

市道古浦西長江線道路整備事業は、島根原子力発電所での災害時に周辺住民が円滑に避難できるようとするための分散誘導路として、また、産業・観光の振興にも資する路線として計画された。島根半島を南北に貫く道路整備であり、日本海側（鹿島町）にあった林道と、宍道湖側（西長江町）にあった農道を1,197mのトンネルで繋ぎ、その総延長は4.7kmに及ぶ。

調査の詳細な経過については、既刊の『市道古浦西長江線道路整備事業に伴う発掘調査報告書1(松江市文化財報告書第172集)』に詳述されているためここでの説明は割愛するが、事業予定地内には白烟遺跡、廻り遺跡、岩屋古墳、広垣遺跡の4つの遺跡が存在し、このうち横穴式石室の玄室部分が残る岩屋古墳については、遺跡の重要性に鑑み、事業範囲から外れるよう設計を変更していただいた。残る3つの遺跡については事前に本発掘調査を実施することとなり、平成28(2016)年1月には白煙遺跡・廻り遺跡の発掘調査報告書を刊行している。

今回報告する広垣遺跡は、須恵器が採取されたことからM10遺跡(散布地)として点的に周知されていた。平成25(2013)年11月に2本のトレンチ(T15・16)を設定して確認調査を実施し、密度の高い遺物包含層の存在を確認した。この後、平成26年12月には4本の追加トレンチ(T21～24)により、事業予定地内における遺跡の範囲を確定した。範囲の拡大に合わせて遺跡の名称を「広垣遺跡」に変更する手続きを平成27(2015)年4月に行った。

本発掘調査は、平成27年11月20日から取り掛かった。取水路や進入路の確保など水田耕作に支障が出ないように調査を実施する必要があり、便宜的に水田ごとの6つの調査区(1～6区)に分けて実施した。調査はまず、トレンチを設定して遺跡の深さを確認する作業から始めた。この結果と試掘調査の成果に基づき、表土層及び搅乱層については重機により剥ぎ取りを行っている。順次調査を実施し、取り扱いが完了した調査区については埋め戻しを行った。

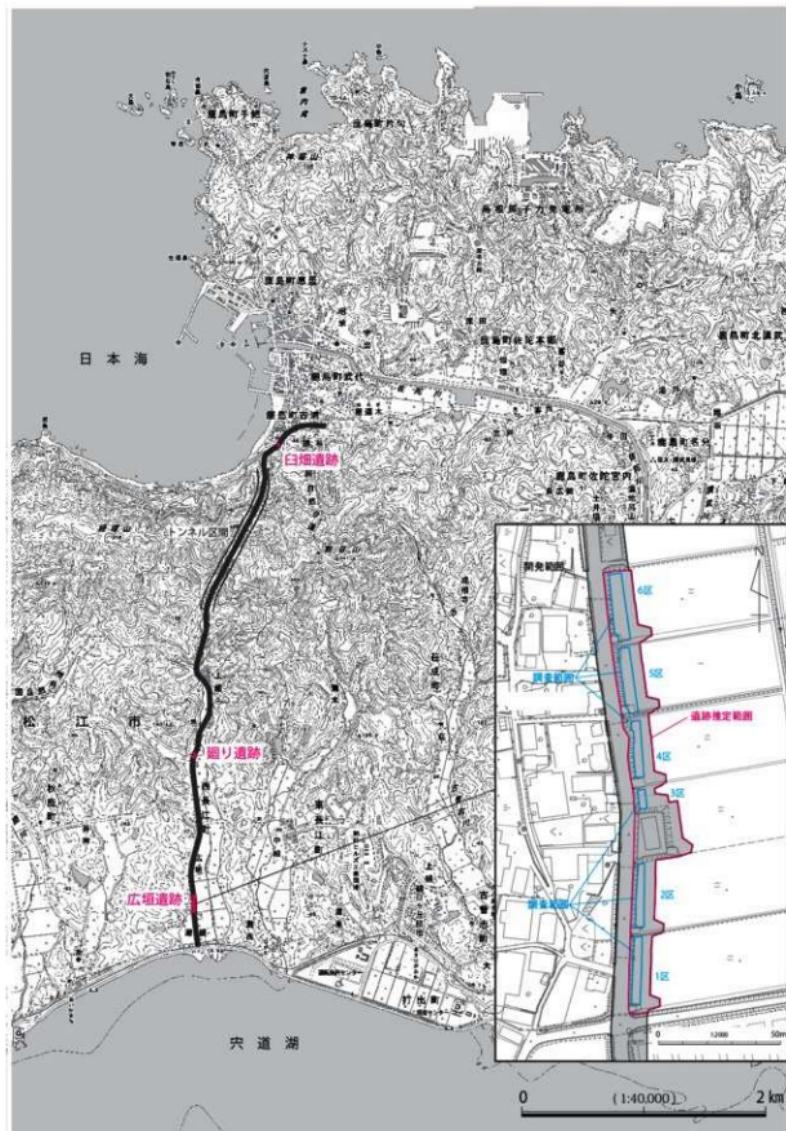
3月2日には地元住民の方々を対象とした遺物見学会を開催し、約30人の参加をいただいた。

上記の経過を経て平成28年3月18日に調査を終了し、その後3月28日迄には周辺整備を終え、現地における発掘調査の全工程を完了した。

なお、余談となるが、平成28年5月16日に既報告の白煙遺跡(近世墓)と同じ字名をもつ土地において工事中に丸釘を伴う近現代の人骨が発見されたほか、同年5月23日には工事用プレハブの撤去時に中世末～江戸時代初頭頃の人骨4体が出土したため緊急調査を実施している。これらは白煙遺跡とは若干距離があるものの、同じ字名をもつことから関連が注目される。

第1表 発掘調査年次工程表

遺跡名	発見の経緯	調査工程(年度)						
		H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
岩屋古墳	周知	分布調査	現状保存					
白煙遺跡	試掘調査	分布調査		試掘調査	本調査		報告書	
廻り遺跡	試掘調査	分布調査			試掘調査	本調査	報告書	
広垣遺跡	周知	分布調査			試掘調査	試掘調査	本調査	報告書



第1図 開発範囲及び調査範囲図

## 第2章 位置と歴史的環境

### 第1節 地理的環境

広垣遺跡（1）は、島根県松江市西長江町 192-2 外に所在する。

島根県北東部には島根半島が突き出しており、その東側約半分を松江市が占める。島根半島には平均標高 350 m の山塊が東西に連なる通称北山山系が走り、そのうちの本宮山山地から南に向けては多くの支脈丘陵が伸びている。

西長江町はこの島根半島に位置し、北は本宮山山地、東と西は本宮山山地から南にのびる低丘陵に囲まれ、谷部分は南北に細長い緩やかな傾斜地であり、南は宍道湖に面している。現在では谷部の緩傾斜地に圃場整備された水田が広がり、その中央を西長江川が南に流れて宍道湖に注いでいるが、西長江川は改修される前には谷部を大きく蛇行して流れている（写真1）。

当遺跡は宍道湖から約 350 m 北に入った、西側の低丘陵に沿う水田に位置している。

なお、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によれば、当遺跡は出雲國秋鹿郡 多太郷にあり、北に聳える標高 341.8 m の朝日山<sup>あさひさん</sup>は神奈備山と記載されている。<sup>おいかのこおり た だのすと</sup>

### 第2節 歴史的環境

#### （1）西長江町の遺跡

西長江町で確認されている最も古い遺跡は廻り遺跡（19）である。縄文時代後期の竪穴建物跡 1 棟のほか、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構が検出されており、このあたりでは縄文時代後期以降連續と人々が居住していたと思われる。しかし、発掘調査がほとんど行われていないため、詳細な歴史は分かっていない。



<http://maps.gsi.go.jp/maplibSearch.do?specificationId=338370>

写真1 河川改修前の西長江川（国土地理院撮影の空中写真 1948年撮影）

フィールド観察によれば、西長江町の西側丘陵には、広垣遺跡のほか M9 遺跡（2）や扇谷池北遺跡（3）、西長江遺跡（5）で土師器や須恵器の散布がみられ、古墳～平安時代の集落遺跡の存在が推定される。これに対し、東側丘陵では前方後円墳の山崎古墳（6）や方墳 4 基からなる東長江古墳群（7）、方墳の M11～M16 古墳（8～13）、方墳 2 基からなる M17 古墳群（14）が造営されているが、これらの古墳の時期は分かっていない。後期に入ると、西長江町北の奥まった丘陵地周辺に岩屋古墳（16）、下垣井戸の上古墳（20）、塚さん古墳（21）、方墳の下垣古墳（22）、円墳の宗垣古墳（24）といった、主体部に横穴式石室を持つ一辺 10～15 m くらいの小型古墳が集中して造られている。ほかに西長江山崎古墳（17）も須恵器の散布から後期古墳と推察されている。また、若干東に外れたところでは、6 基からなる筆ノ尾横穴墓群（18）が発掘調査されており、2 基の横穴墓では奈良時代まで追葬がおこなわれていたことが判明している。

奈良時代に入ると、穴道湖沿岸で常葉寺瓦窯跡（4）の操業がおこなわれている。周辺で産出する良質の粘土を利用して瓦生産をおこない、穴道湖の水運を利用して国分寺などの各消費地へ運んでいたと考えられる。また、西長江町の細長い平地のほぼ中央付近に西長江地区条里制遺跡（15）が存在したとされるが、現在では消滅している。

中世に入ると、東長江町北部の東側丘陵上には雜賀氏が築造したと伝わる二つ山城跡（25）、西側丘陵上には西長江要害山城跡（23）が築かれている。特に後者では堀切や土塁などの遺構の形状が良好な状況で残存している。

## （2）西長江町周辺の遺跡

以下では、西長江町を中心とするより広い地域の遺跡を概観する。

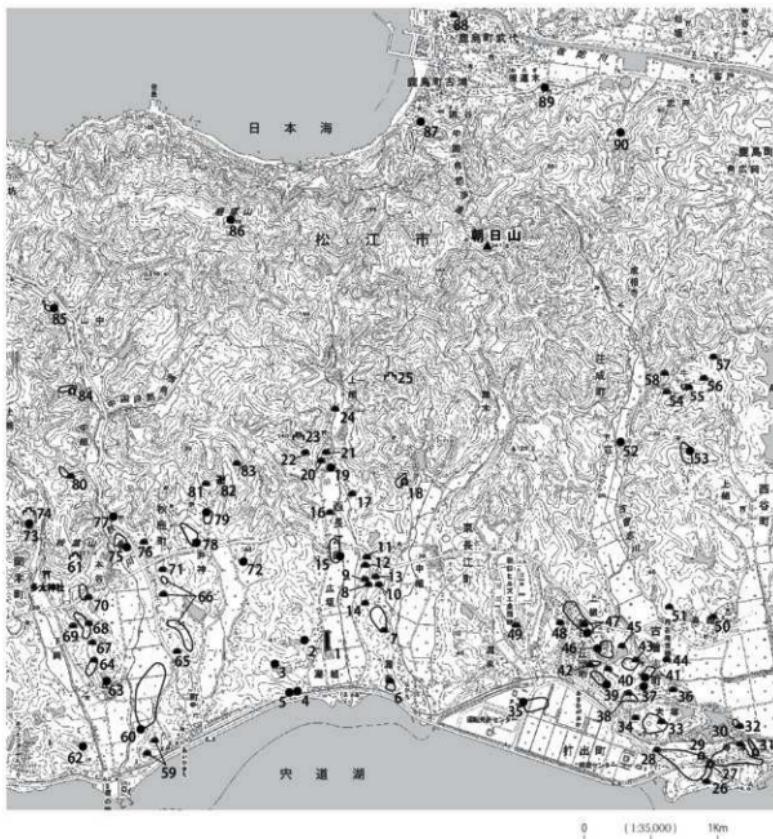
**旧石器時代** 古曾志平廻田遺跡（46）で 2 点のナイフ形石器が出土し、近くの古曾志清水遺跡（39）から 13 点の石器が出土している。

**縄文時代** 朝日山東方の低地に多くの遺跡が分布しているが、当遺跡周辺では遺跡数が少ない。前述した廻り遺跡のほか、後谷遺跡（35）から土器や石器の出土が伝えられている。

**弥生時代** 朝日山の東方低地のほか、日本海沿岸の古浦砂丘遺跡（88）、稗田遺跡（89）など多くの遺跡が分布し、朝日山北麓の志谷古遺跡（90）から銅鐸 2 点と銅劍 6 本が出土したことが注目される。当遺跡周辺では遺跡数が少なく、廻り遺跡で遺構が検出されたほかは、佃遺跡（75）、新宮遺跡（63）、石の堂遺跡（62）で中～後期の土器が少量採集されている。

**古墳時代** 前期は釜代古墳群（28）と北小原古墳群（26）が造営されており、両古墳群は同じ丘陵上にあることから、もともとは 1 つの古墳群と理解される。釜代 1 号墳は 20 × 16 m の楕円形墳で、出雲地方ではめずらしく粘土郭の主体部を持ち、小型仿製鏡 1 面のほか玉多数が副葬されていた。北小原 3 号墳は 9 × 7 m の方墳で、礫敷の箱式石棺内には小型仿製鏡 1 面が副葬されていた。周辺からは土器棺墓 2 基も検出されている。

中期も基本的には前期古墳群と同じ丘陵上に古墳が造営されているが、規模の大きい古墳が目立つようになる。古曾志大塚古墳群（33）の 1 号墳は直径 47 m の円墳で、円墳としては出雲国で 2 番目



1. 広塙遺跡  
2. M 9 遺跡  
3. 犀谷池北遺跡  
4. 常楽寺瓦塚跡  
5. 西長江遺跡  
6. 山崎古墳  
7. 東長江古墳群  
8. M 11 古墳  
9. M 12 古墳  
10. M 13 古墳  
11. M 14 古墳  
12. M 15 古墳  
13. M 16 古墳  
14. M 17 古墳群  
15. 西長江地区条里制遺跡  
16. 岩屋古墳  
17. 西長江山崎古墳  
18. 筆ノ尾横穴墓群  
19. 琉り遺跡  
20. 下垣井戸の上古墳  
21. 塚さん古墳  
22. 下垣古墳  
23. 西長江要害山城跡  
24. 宗坂古墳  
25. 二つ山城跡  
26. 北小原古墳群  
27. 北小原横穴墓群  
28. 父代古墳群  
29. 寺津横穴墓群  
30. 寺津古墳群  
31. 寺津停留所裏横穴墓群  
32. 神主塚古墳  
33. 古曾志大塚古墳群  
34. 古曾志稻田古墳群  
35. 後谷遺跡  
36. 大塚荒神古墳  
37. 古曾志幸神遺跡  
38. 古曾志越ケ谷古墳群  
39. 古曾志清水遺跡  
40. 古曾志寺庭田西古墳群  
41. 道榮寺跡跡  
42. 古曾志大谷古墳群  
43. 古曾志寺庭東古墳群  
44. 丹花庵古墳  
45. 古曾志平塚敷古墳群  
46. 古曾志平畠田遺跡  
47. 古曾志善寺遺跡  
48. 軸原尻古墳  
49. M 4 古墳  
50. M 27 古墳  
51. M 28 古墳群  
52. 畦前遺跡  
53. M 53 遺跡  
54. 長瀬金蔵田中古墳  
55. 牛切会場古墳  
56. 小丸山古墳  
57. 帯差古墳  
58. 牛切古墳  
59. 岡本友田古墳群  
60. 秋鹿川流域条里制遺跡  
61. 鮎尾山城跡  
62. 石の堂遺跡  
63. 新宮遺跡  
64. 峰山古墳群  
65. 亀割坂古墳  
66. 稲田古墳群  
67. 桑地谷古墳  
68. 三栗屋奥古墳群  
69. 石曳古墳  
70. 横木古墳群  
71. 出雲源古墳群  
72. 松ノ前遺跡  
73. 上岡遺跡  
74. 雲州城跡  
75. 佃遺跡  
76. 寺の前古墳群  
77. 宮ノ前遺跡  
78. 井神谷西遺跡  
79. 井神谷東遺跡  
80. 五辻古墳群  
81. 雲州寺古墳  
82. 雲洲寺跡  
83. 雷岸寺東古墳群  
84. 祝谷横穴墓群  
85. 中郷小学校校庭遺跡  
86. 錦織山経塚  
87. 白畠塚  
88. 古浦砂丘遺跡  
89. 轢田遺跡  
90. 志谷奥遺跡

第2図 広塙遺跡と周辺の遺跡

の規模を誇り、円筒埴輪と葺石を持つ。2号墳は一辺 20 m の方墳である。国指定史跡の丹花庵古墳(44)は一辺 49 m の方墳で、葺石と円筒埴輪を持つ。主体部は長持形石棺で、蓋石の表面に鋸歯文の浮彫が施されている。副葬品は甲冑と刀剣 5 本の出土が伝えられている。大塚荒神古墳(36)は一辺 14 m の方墳で円筒埴輪が点在していたとされる。主体部は割竹形石棺で、副葬品は甲冑破片が採取されている。古曾志大谷古墳群(42)の 1 号墳は、中期末～後期初頭頃の全長 45.4 m の前方後方墳で、葺石と埴輪を持つ。後円部の主体は崩落のため失われているが、後方部にも舟形木棺を納めたと思われる主体部があり、大刀や鎌などが出土している。このように、前～中期にかけては同一丘陵とその周辺に、地域の首長クラスの古墳が連綿と造営されてきたと考えられるが、これらの古墳群を造営した人々の集落遺跡については明確になされていない。

後期に入ると様相は一変し、規模の大きい古墳は松江市東部の大庭町や山代町を中心とした地域に造営され、この辺りでは小規模古墳と横穴墓に限定して造営されている。古墳としては横穴式石室を持つ小丸山古墳(56)、牛切会場古墳(55)、長瀬金蔵畠中古墳(54)など、横穴墓としては 5 穴からなる北小原横穴墓群(27)、寺津停留所裏横穴墓群(31)、10 穴以上からなる寺津横穴墓群(29)、25 穴からなる祝谷横穴墓群(84)がみられる。

古代（奈良時代・平安時代）出雲國秋鹿郡多太郷にあたる地域で、郡家は東長江町にあったと推定されている。『出雲國風土記』に「多太社」と記載された神社は、現在も多太神社としてその名を残している。

狹隘な平地には条里制が敷かれており、西長江地区条里制遺跡のほか、秋鹿川流域条里制遺跡(60)が確認されている。新宮遺跡や石の堂遺跡では当該期の須恵器や土師器の散布がみられ、集落遺跡の存在を窺うことができる。また、上岡遺跡(73)では非日常生活的な建物跡から使用痕のある燈明皿や転用硯が出土しており、仏教関連施設との関連が論じられている。生産遺跡としては前述した常楽寺瓦窯跡のほか、古曾志平畠田遺跡で須恵器窯跡 3 基が確認されている。調査された 3 号窯跡は 9 世紀末～10 世紀初頭の操業と考えられ、出雲地域で須恵器生産が終焉する頃の窯跡と考えられている。

中世 上岡城跡(74)、鰐尾山城跡(61)、西長江要害山城跡、二つ山城跡といった山城が築かれている。大廻氏が築城したとされる鰐尾山城跡は、土橋や虎口、連続した郭、堀切、堅堀が良好な状態で残存しており、この城の出城と考えられている西長江要害山城跡も、前述したとおり遺構の残りが非常に良い。雑賀氏が築城したとされる二つ山城も同様である。

ただ、上岡城跡だけは試掘調査の結果から、山城とする根拠に乏しいとも考えられている。

【参考文献】 松江市史編集委員会『松江市史 資料編 2 考古資料』平成 24 (2012) 年

松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団『白畠遺跡・廻り遺跡』平成 28 (2016) 年 ほか

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の方法と概要

今回の調査は道路拡幅に起因するため、道路に沿った調査範囲は狭長である（第3・4図）。

当初は宅地部分を挟んで南北一直線の細長い調査区2本を掘る予定であったが、各水田の北西隅にある取水口を確保する必要があったため、水田1枚ごとに1本のトレンチ状調査区を設定する格好となった。水田は6枚にわたるので、南から北に1～6区と称した。

現地調査は平成27年11月20日から開始し、隣接する水田関係者との協議により1、2、6、5、4、3区の順に調査を実施した。現地は湧水が多い軟弱な地盤で、廃土処理を補助する重機が自在に動けない状態にあったため、2台の重機を縦列に配置して連携させた。このような状況であったため、5～10mスパンで地山または最下層まで掘削を仕上げつつ、調査は一方方向に進めざるを得なかった。また、調査区外に廃土置場が確保できなかったため、1つの調査区を掘削する際には廃土を隣接調査区に仮置きし、調査終了後は速やかに埋め戻して、次の調査区に移動するという作業を繰り返した。掘削深度は基本的に地山までとし、東壁に沿っては排水を兼ねた溝を深めに掘り、地山の最終確認を行っている。

調査の結果、1区～4区中央までは圃場整備のために大半が地山にまでおよぶ削平を受けており、一部で遺物包含層が残る状況を確認した。遺物包含層からは古墳時代中期～平安時代の小さな土器片が多数出土し、割合的には古墳時代中期前半～半ば頃の土師器が多かった。

4区の中央～北端にかけては北に向けて少しづつ地山が低くなっている。時期は不明だが、複数の杭と、複数の小さな丸材を横にした性格不明の遺構（SX01）、地山面の擾乱を検出した。遺物の量は少なかった。

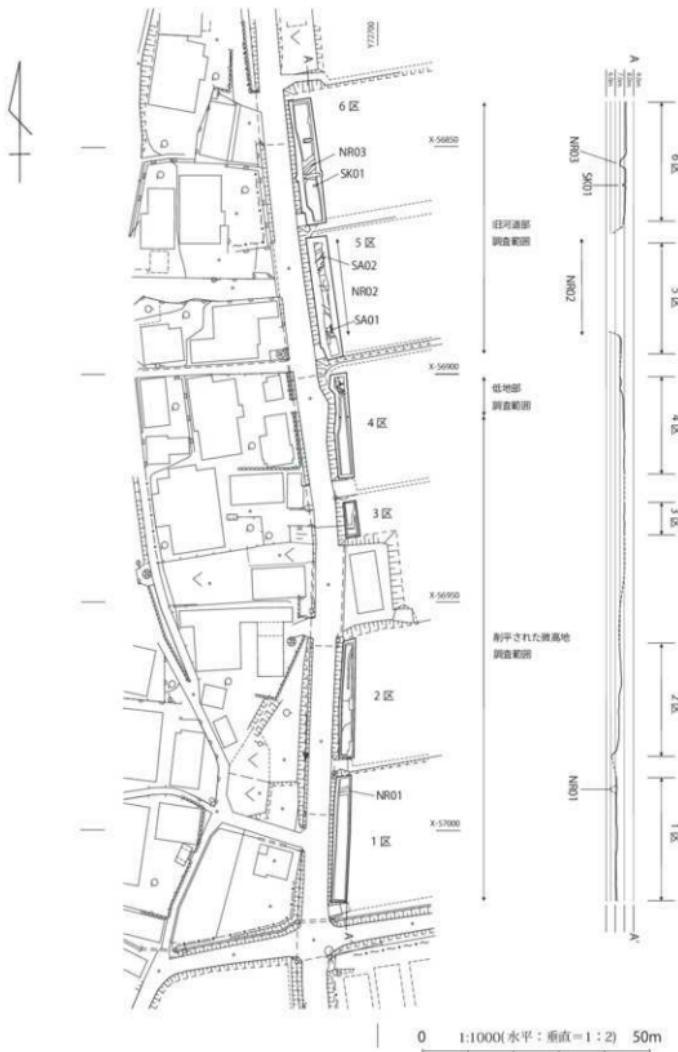
5、6区では旧河道により地山が深く削られた状況を確認した。旧河道は大きく2本に分かれており、5区で検出した旧河道（NR02）は古墳時代中～後期の、時代が異なる複数の河道が重なり合うもので、6区の河道（NR03）は古墳時代中期の河道1本であった。各河道からは土器や石器、木製品が大量に出土した。また、5区の上層では古墳時代後期の湿地層の広がり（NX02）を確認した。遺構としては、2本の旧河道間に残る地山面で土器が埋納された土坑（SK01）1基、旧河道に伴っては杭列2本（SA01、02）と置き甕（SX02）1か所を検出した。

結果として水田ごとの発掘調査となつたが、場所によって遺跡の性格が大きく異なるため、以下では、南から①削平を受けた微高地（1区～4区南半分）、②低地部（4区北半分）、③旧河道部（5、6区）の3項に分けて報告を行い、総括で遺跡のおかれた古環境を復元する。

なお、調査にあたっては座標に沿う5mグリッドを設定して名称を設けており、遺構に伴わない出土遺物はグリッド名と土層名で管理している。<sup>(1)</sup>



第3図 広垣遺跡調査区位置図



第4図 調査区配置図及び地山標高図

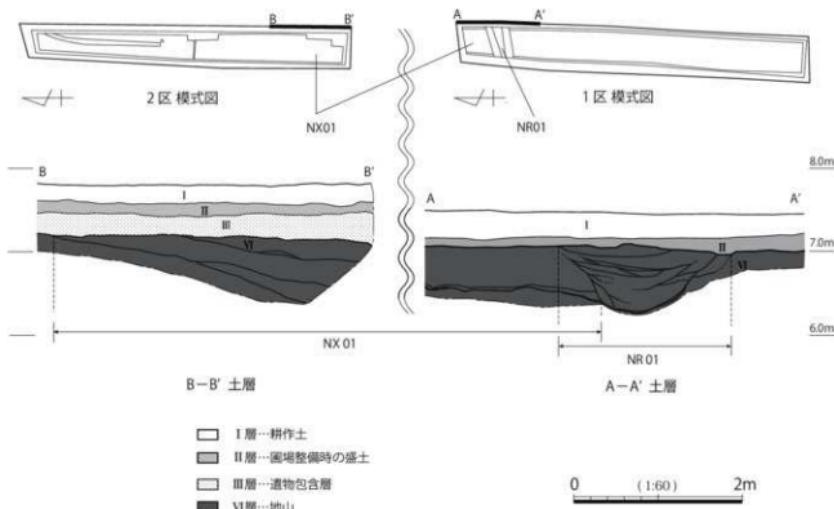
## 第2節 削平された微高地の調査

### (1) 調査の概要

耕地整理や耕作により地山が水平に削平された状態で検出された、1～4区南半分の範囲を便宜的に「削平された微高地の調査」としてここで取り扱う。調査区南端から北へ105mの範囲である。

ここは西長江川の右岸に張り出した微高地の裾にあたる場所が、圃場整備によりすき取られた状態であり、現況地表面から地山面までは非常に浅い。地山面から下がる自然の落ち込み(NX01)1か所と自然流跡(NR01)1本を検出したが、いずれも遺物を伴っておらず、堅くしまった堆積土は基盤層と判断されたことからここでの説明は省略する。

遺構は検出していない。



B-B' 土層断面写真



A-A' 土層断面写真

第5図 削平された微高地の基本層序

遺物は、圃場整備時の盛土や地山直上の遺物包含層から、土師器や須恵器の破片がコンテナ21箱分が出土した。

### (2) 基本層序（第5図）

基本層序は、I層 耕作土

II層 圃場整備時の盛土（白色粘土と旧耕作土の攪乱土）

III層 遺物包含層（濃灰色土）

VI層 地山（白色粘土、緑灰色砂ほか）である。

※IV層：旧河道堆積層、V層：無遺物層はここには見られない。

以下では上から順に各層を詳述する。

I層は現在の耕作土である。

II層は白色粘土（地山）と圃場整備前の耕作土（暗灰褐色土）の攪乱土で、一部に巨大な白色粘土のブロックが混入している様子から重機が関与した層であり、圃場整備時の盛土層と判断された。この盛土の中から土師器の小片と8～9世紀頃の墨書き土器を含む須恵器の破片が出土した。周辺にこれらの遺物を伴う遺跡が存在することを示している。

III層は地山直上に堆積した遺物包含層（濃灰色土）で、2区の南側約半分についてのみ、層厚30cm弱で検出された。第5図を見ると、圃場整備で一段低くされた1区の水田の土層A-A'は、2区の土層B-B'に見られるIII層のちょうど下まで重機で削平されていることから、本来は1区にもIII層の広がりが存在していた可能性が高いと推定される。

遺物は古墳時代中期の土師器が多く、9世紀までの須恵器が出土した。

VI層は地山で、白色粘土のほか緑色砂、緑色礫がみられる。地山の標高は最北端の4区中央で9.8m、1区の最南端で7.5mである。

### (3) 遺物

#### ① 1区II層出土遺物（第6図）

第6図1～7は須恵器である。1は宝珠つまみが付く蓋、2は壺の底部で、底径6.8cm。3は高台付壺で、口径13.0cm、底径8.9cm、器高4.2cm。4は器壁が直線的に立ち上がる壺、5は高台付皿、6と7は無高台の皿である。小さな破片が多いなか、7は比較的残りが良いもので、大きく外反する口縁は国府編年の第5型式で、焼成は軟質である。底部外面の糸切痕には墨書き文字「塗（=「地」）」の下半分が残る。口径13.3cm、底径8.6cm、器高1.5cm。8は石器、スクレイパーである。石材は黒曜石で、片面に細かい連続剥離が施されている。縦2.6cm、横5.5cm、最大厚1.1cm、重量13.3g。

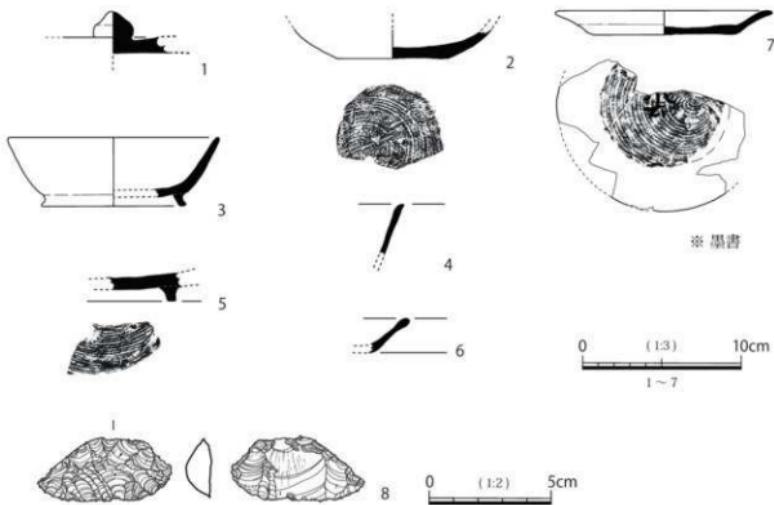
#### ② 2区III層出土遺物（第7～9図）

第7図は土師器で、1～7は高壺である。1、2は壺部で、1の内面には放射状の暗文が施され、内外面に赤色顔料が塗布されている。口径20.3cm。2は内面に赤色顔料が残る破片。3～7は脚部で、3は、筒部内面に粘土が充填されている。底径10.1cm。4、5は低めの脚で筒部内面に粘土が充

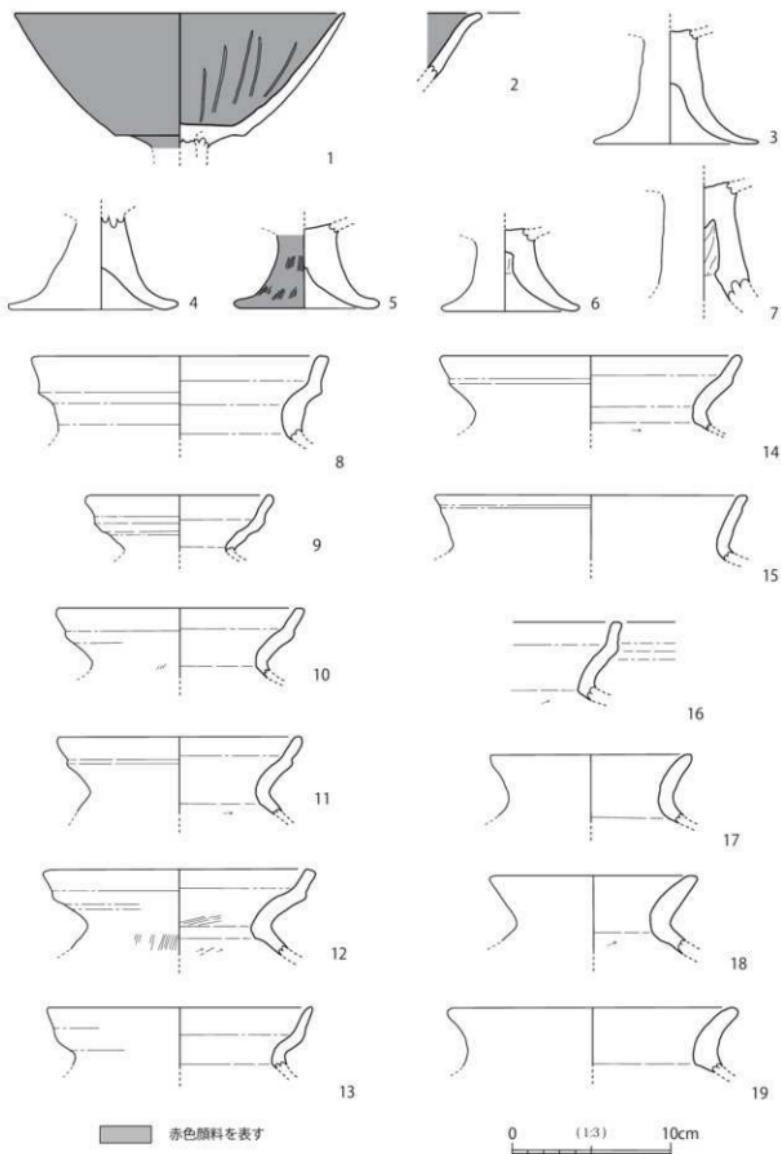
填されている。4は底径10.3cm。5は外面に少量の赤色顔料が残る。底径9.3cm。6は低めの脚で筒部内面にシボリ痕がみられる。底径8.0cm。7は脚の筒部で、内面はシボリ痕がみられ、裾との境付近には継ぎ足した粘土が段になって残っている。8は退化した複合口縁を持つ壺の口縁部である。口径18.2cm。9～19は退化した複合口縁を持つ壺の口縁部である。口径は、9が11.6cm、10が15.2cm、11が15.0cm、12が16.8cm、13が16.3cm、14が18.6cm、15が19.2cmである。これらのうち、11と12の外面には煤が付着している。17～19は単純口縁を持つ壺の口縁部である。17は外面に煤が付着している。口径12.4cm、頸径10.0cm。18は外面に煤が付着している。口径12.8cm、頸径9.6cm。19は、口径17.8cm、頸径15.3cm。

第8図は土製品で、1～10は移動式竈の破片である。1は受け部で、内面は煤の付着が著しい。径27.8cm。2・3は焚口上部の庇で、下面が被熱変色している。3、4は幅3.4cm。5は焚口の左上隅から下にかけて張り付けられた突起で、焚口側が被熱変色している。突起の高さ3.0cm。6、7は焚口右側のに張り付けられた突起で、焚口側が被熱変色している。高さは、6が3.3cm、7が2.4cm。8は把手で、懸の把手の可能性もある。9・10は焚口右側の接地面付近の縁の突起で、焚口側が被熱変色している。突起の高さは、9が4.2cm、10が3.3cm。11は羽口である。先端部にはガラス質が付着している。

第9図1～18は須恵器で、1～5は蓋である。1は肩部の段が退化しているが、上部外面の回転ヘラケズリの範囲が広く、口縁端部内面には緩い段を有する。口径14.4cm、器高3.7cm。2は輪状つ

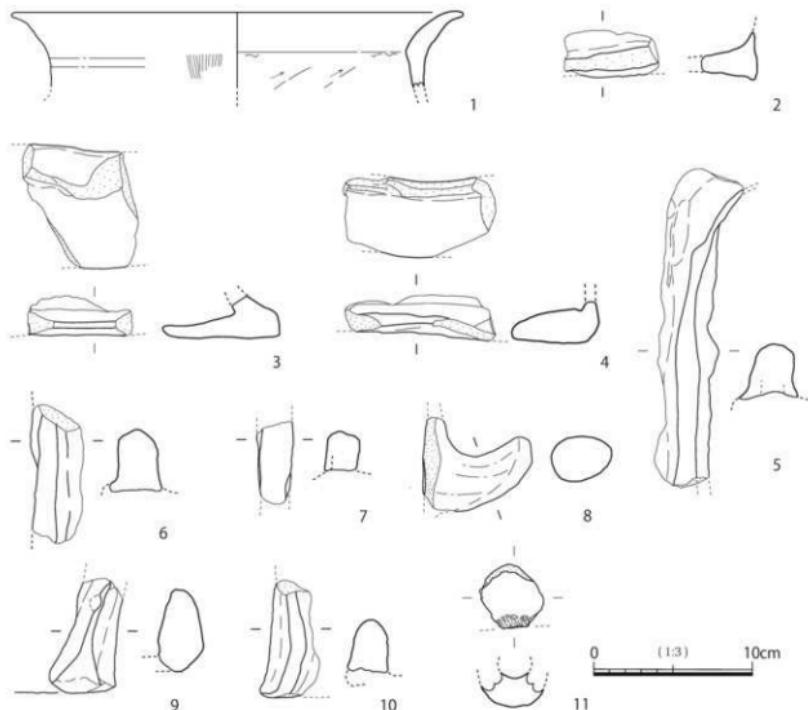


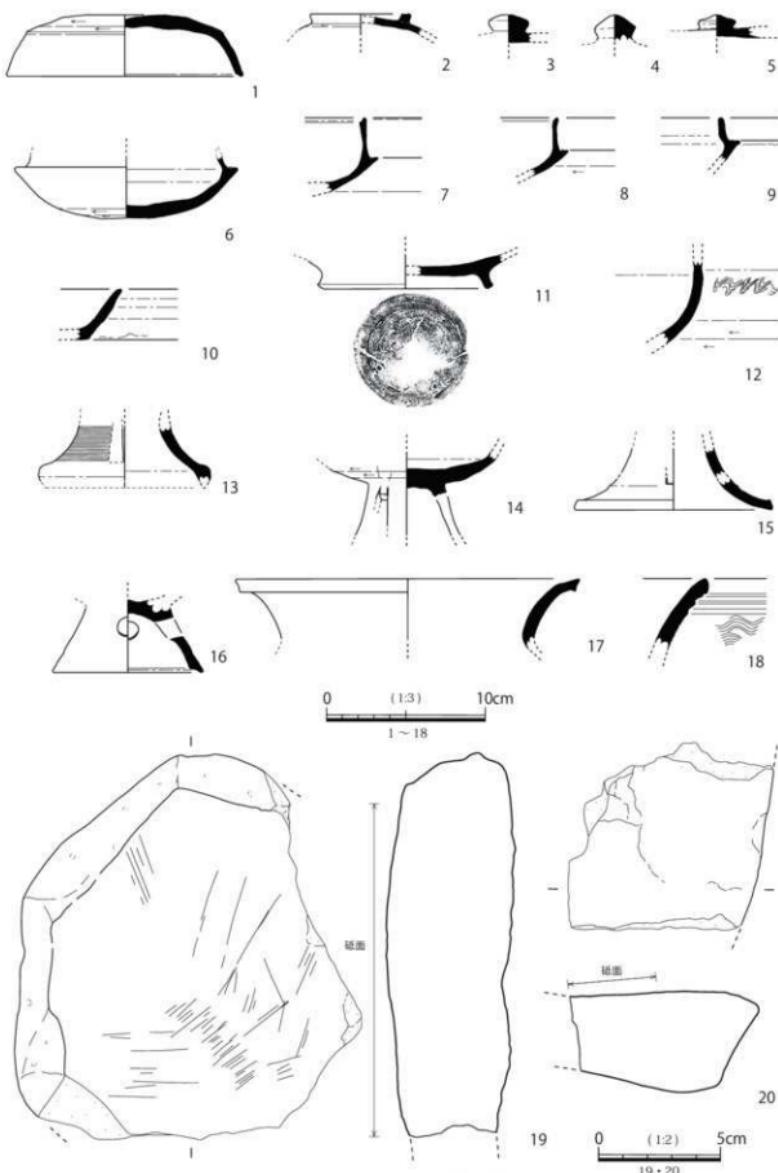
第6図 1区II層出土遺物



第7図 2区Ⅲ層出土遺物(1)

まみの付く蓋、3～5は宝珠状つまみの付く蓋である。6～10は壺で、6は口縁がやや内傾し、底部は丁寧な回転ヘラケズリが施されている。受部径13.7cm。7は口縁が直線的に高く立ち上がり、口縁端部内面にはシャープな段を有する。8は口縁が若干低くなるが直線的に立ち上がり、口縁端部内面には緩い段が付く。9は口縁が低く内傾している。10は口縁が直線的に開き国府第4型式に比定される。11は高台付皿の底部で、底径10.0cm。12～15は高壺である。12は壺部が深いもので、外面に波状文がめぐる。13は脚部で、底端部が内傾する。外面にはカキメが施され、透かしが入る。底径9.7cm。14は壺と脚の接合部付近で、脚には3方向に方形透かしが入る。底径12.0cm。16は器種不明の脚部で、焼成が良く、断面が赤褐色を呈している。4方向に円孔が穿たれ、底部内面にシャープな段が付く。底径9.3cm。17、18は甕の口縁部で、17は口径21.2cm。19、20は砾石で、19は1面に擦痕状の使用痕が残る。厚さ5.5cm。20は1面に平滑な使用痕が残る。厚さ4.1cm。





第9図 2区III層出土遺物(3)

## 第3節 低地部の調査

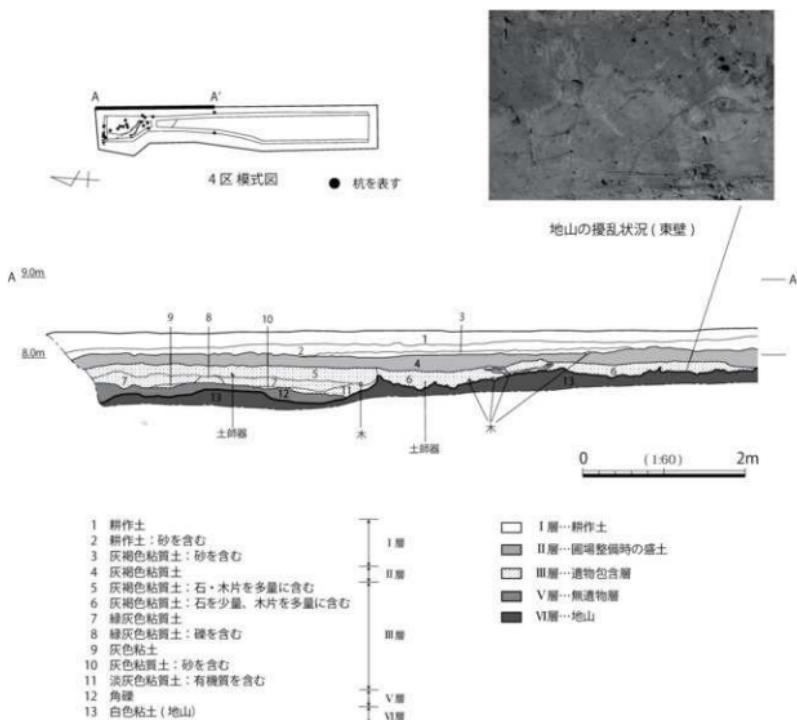
### (1) 調査の概要

低湿地の土層が残る、4区北半分を便宜的に「低地部の調査」としてここで取り扱う。南北の長さは8.7m、東西の下端最大幅は2.1mの狭い範囲である。

基本層序は第2項で詳述するが、第10図のとおりで、現代の耕作土と地山の間に遺構埋土を含む遺物包含層が残存している。南側の地山上面には著しい擾乱がみられたことから、時期は不明だが、水田耕作がおこなわれていた痕跡とも捉えられる。

遺構としては点在する杭や、杭と丸材を組み合わせた性格不明の遺構(SX01)を検出した。水田や湿地管理に関わるもの可能性がある。

遺物は4～9世紀頃の幅広い時期の土器が、コンテナ2箱分出土した。そのほか板材などの木が多く出土したが、顕著な加工が施されたものは少なかった。



第10図 低地部の基本層序

## (2) 基本層序 (第10図)

基本層序は、I層 耕作土

II層 園場整備時の盛土 (灰褐色粘質土)

III層 遺物包含層 (遺構埋土含む)

V層 無遺物層 (角礫層)

VI層 地山 (白色粘土) である。

\*IV層：旧河道堆積層はここでは見られない。

この区画では地山が北に向けて下がり、遺構埋土かつ遺物包含層III層がみられる。以下では上から順に各層を詳述する。

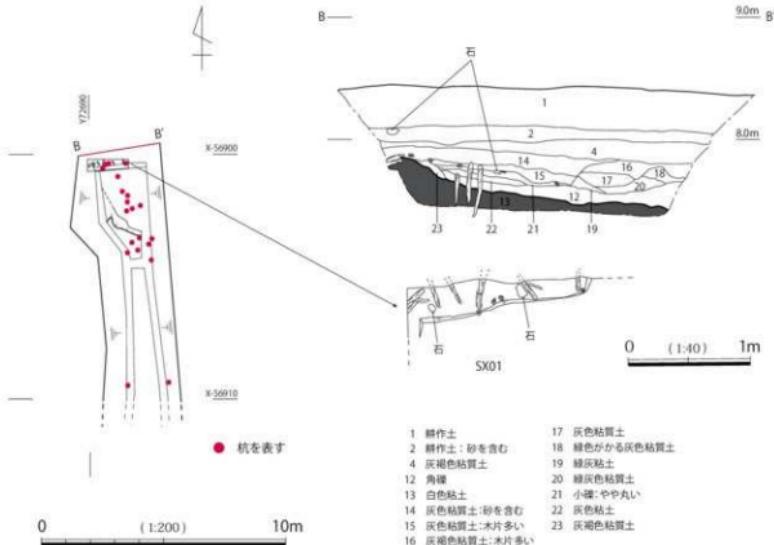
I層は現在の耕作土である。

II層の灰褐色粘質土は4区全面にみられる層で、旧耕作土または園場整備時の盛土と思われる。3区以南でみられた地山(白色粘土)が混じる搅乱土はここでは存在しない。層中からは土師器と須恵器の細片が若干出土したが、圓面化できるものは出土しなかった。

III層は遺構埋土を含む遺物包含層で、石、木片を多量に含む灰褐色粘質土(5)、石を少量、木片を多量に含む灰褐色粘質土(6)以下で、角礫層(12)、白色粘土(13)より上の層である。この層からは少量の土器と多くの木片、木材が出土した。最も新しい土器は第12図5、6の須恵器裏片で、古代末を遡らない時期の層である。

V層は5cm前後を中心とする角礫層(12)で、遺物は出土していない。

VI層は地山の白色粘土で、標高は最北端で7.1m、最南端で7.7mである。



第11図 低地部の平面図とSX01

## (3) 遺構

## ①杭と丸材を組み合わせた遺構 SX01 (第11図)

4区北端に直径5～6cmの丸い杭3本が地山深く打ち込まれており、そこから北の調査区外に向けて、樹皮のある直径4～8cmの丸い木4本がほぼ水平に置かれていた。それらは小礫層(21)の上に置かれ、木片の多い灰色粘質土層(15)にあった。

時期、性格は不明であるが、低湿地に足を踏み入れるときの足場のようにもみえる。

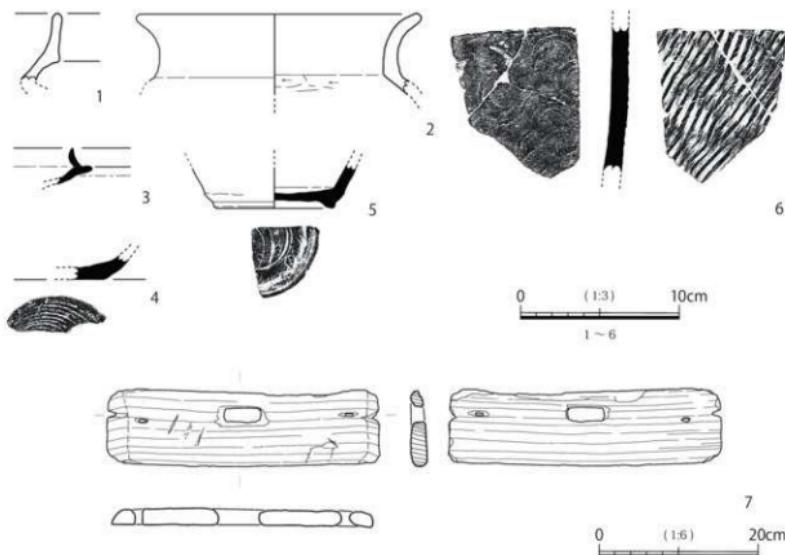
## ②杭 (第11図)

断面円形の杭を16本検出した。狭い調査区であり、明確な杭列は復元できていない。

## (4) 遺物 (第12図)

第12図1、2は上師器である。1は複合口縁の甕口縁部、2は単純口縁の甕の口縁部で、外面には煤が付着している。口径18.0cm。3～5は須恵器である。3は口縁の立ち上がりが低く内傾する杯、4は無高台の杯で、底部外面は糸切りである。5は高台付杯または壺類の底部と思われる。底径7.2cm。6は甕または鉢の体部で、内面の当て具痕がナデで消されている。

7は木製品である。横に長い板の中央上寄りに4.2×1.6cmの方形の孔があり、その左右に1×0.5cm程度の小孔が配され、端部には切り込みが入れられている。用途不明の部材であるが、角柱型田下駄の横木の可能性がある。縦9.2cm、横33.5cm、厚さ2.1cm。



第12図 低地部の出土遺物

## 第4節 旧河道部の調査

### (1) 調査の概要 (第13、14図)

大部分が旧河道の堆積層である5、6区を「旧河道部の調査」としてここで取り扱う。旧河道(以下、河道)のほか、河道の影響を受けていない地山も含めると、南北の長さは78mである。

調査の結果、5区はその大半が河道(NR02)で占められていた。

NR02は5区南端から北4m付近に南側の立ち上がり(岸)があり、北側の立ち上がりは5区と6区の間の未調査地にある。NR02は大小の河道が複雑に切りあって南北幅22mを超えており、流れの方向も一定ではないことから、掘削中に河道の単位を把握することは困難であった。出土遺物は調査区の東西壁の土層などから大まかな河道名と土層に分けて取り上げるように努めたが、仕分けのできなかったものも多く、それらについては河道名は付さずにグリッド名と土層の特徴、出土標高を付して取り上げた。また、河道の掘削深度は地山上面を基本としたが、河道堆積土が厚い場合は無遺物層に到達した時点で止めている。

東壁を観察すると、NR02には河道の小単位5本が確認され、河道間に河道単位として認識できない堆積層(第14図143、144、145)もみられたので、河道は5本以上が存在していたことになる。河道5本のうち4本からは遺物が出土し、河道の堆積時期は古墳時代中期後葉～古墳時代後期前葉頃までと判断された。認識できた河道5本については、切り合いで出土遺物から時期の古い順にアルファベットをふり、NR02-A～Eと称して報告する。概略は以下のとおりである。

**NR02-A** 南から3番目の河道で、NR02-Eに切られている。少数の土師器が出土した。

**NR02-B** 南から4番目の河道で、NR02-Cに切られている。杭列(SA02)や置き甕(SX02)を検出し、多くの土師器と少數の須恵器が出土した。

**NR02-C** 北端の河道で、NR02-Bを切る。土師器、須恵器、木製品が多く出土した。

**NR02-D** 5区南端の河道で、NR02-Aを切り、NR02-Eに切り込まれている。確実な伴出遺物はわからなかった。

**NR02-E** NR02-Dの中央に切り込む河道で、NR02-D(旧)～NR02-E(新)である。杭列(SA01)を検出した。須恵器、土師器、木製品が出土した。

河道のほか、NR02-A、Bが埋没した上に湿地層の平面的な広がり(NX02)が存在し、調査区外の東へ続くことを確認した。NX02からは土師器、須恵器、木製品が出土した。後で詳述するが、出土遺物の時期からNR02-C、Eと並存していたと思われる。

また、NX02のさらに上層には木製品や加工痕のある材木や自然木を多く含む灰色粘質土(10、11層)があり、奈良時代頃の無高台坏が出土した。これは低地部の調査(4区)の石と木片を多量に含む灰色粘質土(第10図5層)と近似した特徴を持つ層で、出土遺物の時期もほぼ同じである。標高は5区の11層下面が7.7m、4区の5層下面が7.6mを測り、極めて近い値であることから4区と5区の間の未調査地を挟んで同一層となる可能性がある。

6区は、中央付近で流路を北東～南西に走る河道1本(NR03)を検出した。河道幅は5m前後で、

古墳時代中期後半の土師器、石器、木製品が大量に出土した。

NR03 の北岸から 6 区北端にかけては、一部に有機質を含む水成堆積の灰色砂質土や緑色砂層が堆積していた。トレンチを設定して深い掘削をおこなったが、遺物は出土せず基盤層と捉えられたので面的な掘削は行っていない。NR03 の南岸から 6 区南端にかけては河川に浸食されていない地山で、古墳時代中期の土器が埋納された土坑 1 基 (SK01) を検出した。

基本層序は 1 ~ 4 区とほぼ同じだが、第 14 図のとおりで、河道堆積層が広範にみられる。

遺構と遺物については調査の経過の中で述べているが、再度まとめておく。

遺構は地山面から土坑 (SK01) 1 基、河道堆積土から杭列 2 か所 (SA01, SA02) を検出した。このほかに 3 点の甕が原位置を保った状況で出土しており、本報告では便宜上、置き甕 (SX02) と称して遺構の項で説明する。<sup>(4)</sup>

遺物は、各河道及び湿地層とその周辺から古墳時代中～後期の大量の土器、石器、木製品が出土した。この区画で出土した遺物は比較的大きな破片が多く、土器はコンテナに 42 箱、石器は 1 箱、木製品は 12 箱分が出土した。3 項で河道別に分けて掲載をおこなう。

## (2) 基本層序 (第 14 図)

基本層序は、I 層 現代の耕作土 (1 ~ 3 層)

II 層 園場整備時の盛土 (4 ~ 5 層)

III 層 遺物包含層 (6 ~ 45 層)

IV 層 旧河道堆積層 (46 ~ 129 層、143 ~ 145 層)

V 層 無遺物層 (130 ~ 132 層)

VI 層 地山 (133 ~ 142 層) である。

I 層は耕作土で、軟弱な耕作土を補強するための客土 (2 層) が広く敷かれている。

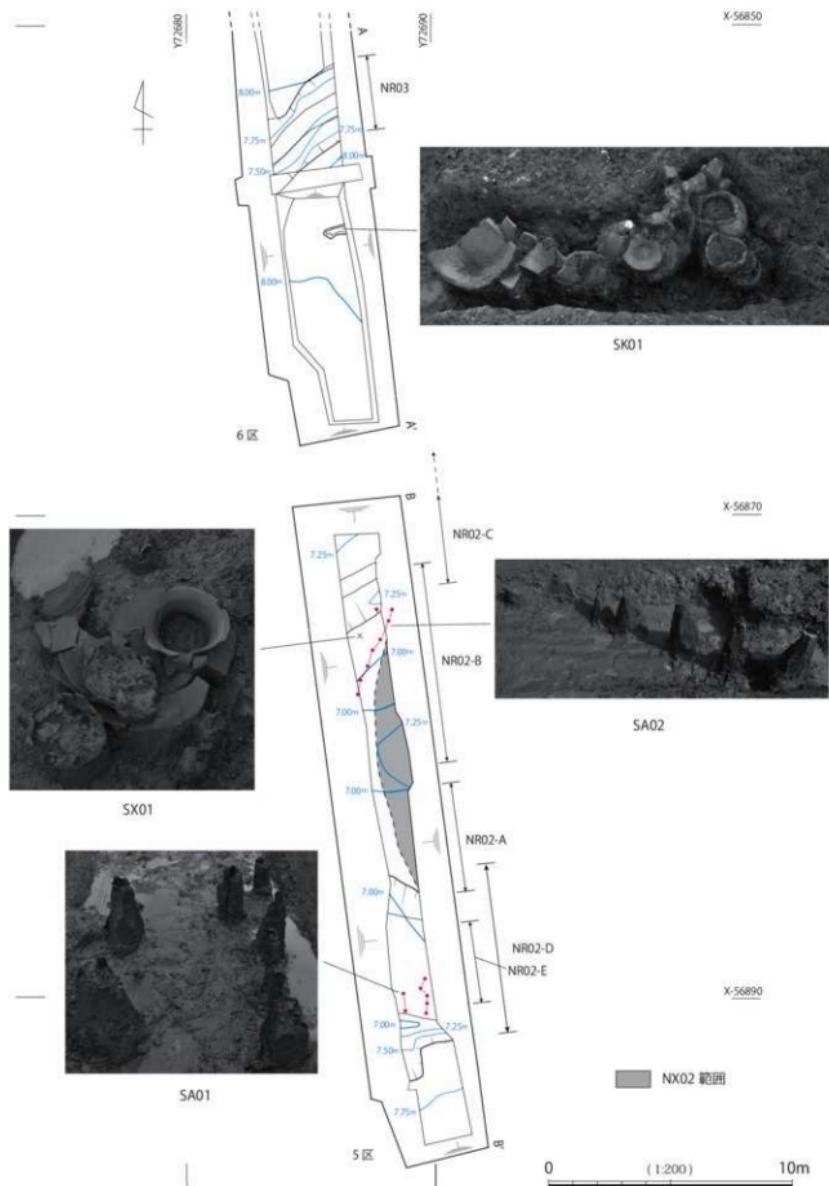
II 層は調査区全面に広がる平坦な層で園場整備時の盛土である。

III 層は遺物包含層である。上層は遺物が希薄な層で、7、10、11、13、39 層からまとまった遺物が出土した。7 層は古墳時代後期を中心とする遺物が出土し、草が混じることから NR02-C に関連する層と考えられる。10、11、13 層からは弥生～平安時代までの幅広い時期の遺物が多く出土し、10、11、27、29 層からは木製品や木材、自然木が特に多く出土した。39 層は古墳時代の湿地層である。NX02 と称して河道の項で詳述する。

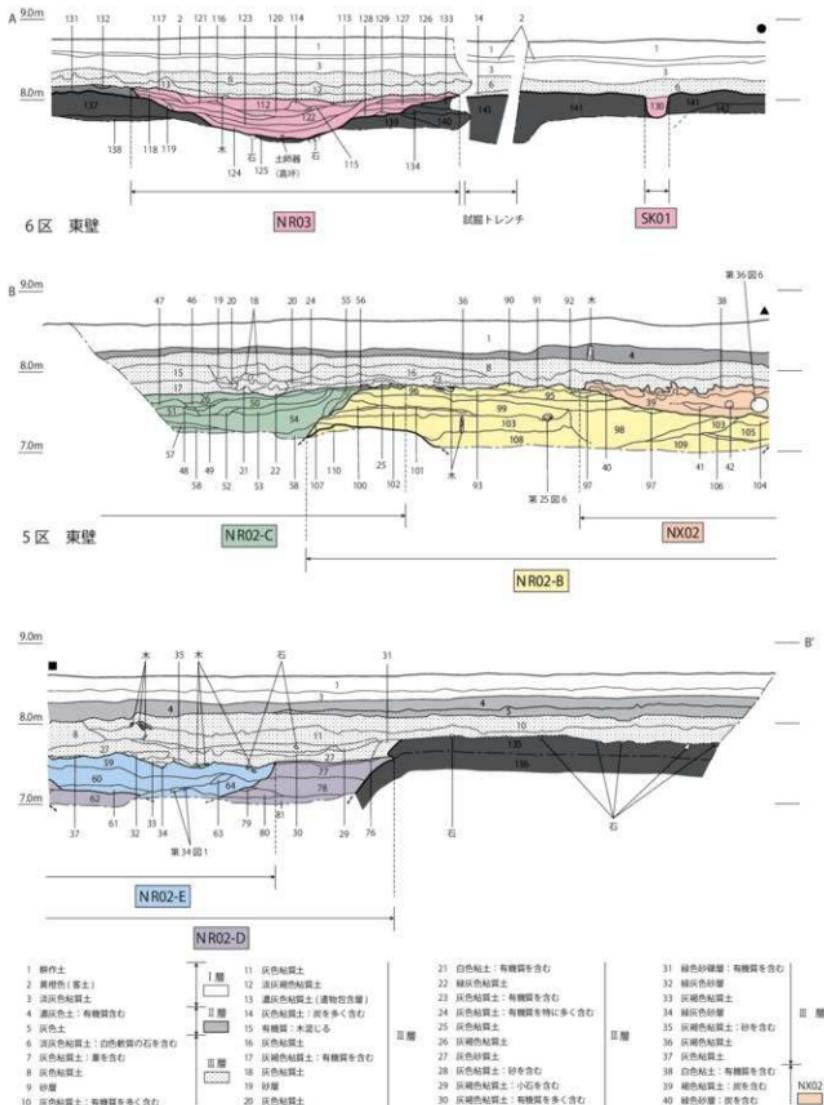
IV 層は旧河道の堆積層である。自然流路跡であるから、斜方堆積と弧状堆積の複雑な切り合いがみられ、NR02 では 5 本以上の河道単位があると認識された。各河道からは多くの土器、石器、木製品が出土しており、遺物の時期から、古墳時代中期後半～古墳時代後期後半前葉の河道堆積層であることがわかった。なお、NR02 の IV 層は深く、基盤層までは掘削していない。

V 層は無遺物層で、132 層は炭を含むほか、6 区の北方では小さな有機質の入った灰色砂層を確認しているが、遺物が出土せず、土層にしまりがあることから基盤層とした。

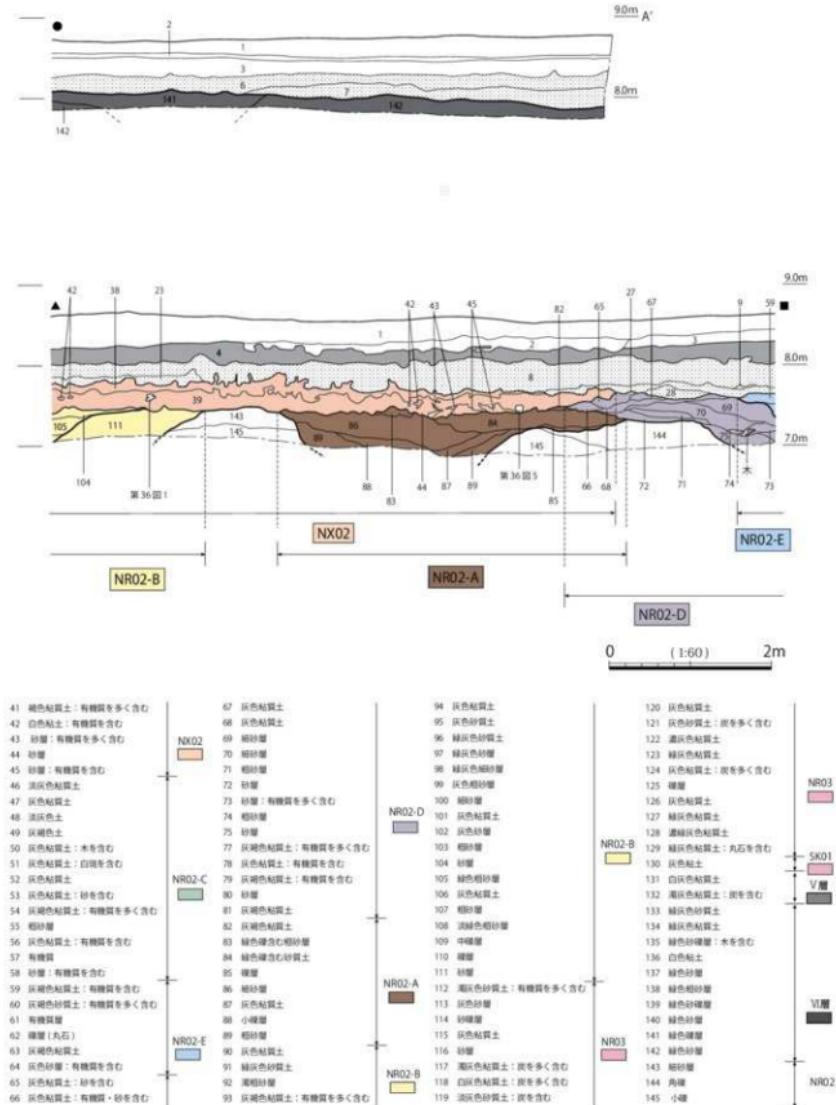
VI 層は地山で、場所により白色粘土、緑色礫層、緑色砂層がみられる。



第13図 旧河道路跡と遺構配置図



第14図-1 旧河道部の土層図 (1)



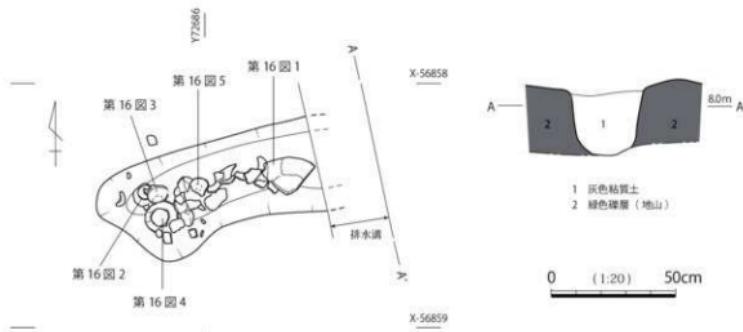
第14図-2 旧河道部の土層図(2)

## (3) 遺構

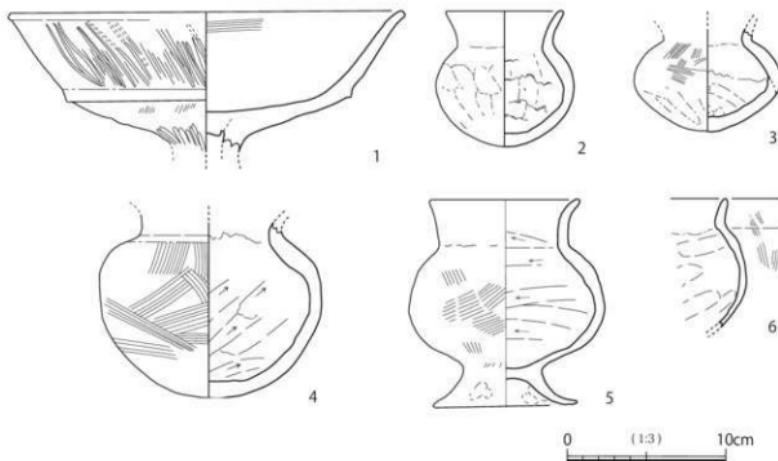
## ①土坑 SK01(第15・16図)

NRO2とNRO3に挟まれた、6区南側の緑色礫層(地山)の上面、標高8.12mで検出した。

東西に細長い土坑で、調査区内では南北幅40cm、東西長118cmを検出したが、さらに東の調査区の外へ続いている。深さは西端では10cm程度で、東ほど深くなりA-A'地点では26cm、埋土は灰色粘質土1層であった。



第15図 SK01と遺物出土状況



第16図 SK01出土遺物

土坑内部では、西側を中心にして古墳時代中期の土器、小型丸底壺5点と高環の环部1点が隙間なく埋納された状況を確認した。詳細を記すと、西端に2点の小型丸底壺(第16図2、4)が正位に据えられており、その上に1点の小型丸底壺(第16図3)が載っていた。その東には脚付小型丸底壺1点(第16図5)が上下逆位に置かれ、さらに東には高環の环部だけが正位で置かれていた。また、上方の方では復元できない小型丸底壺(第16図6)が破片となって出土したことから、本来の土坑の上端はもっと標高の高い位置にあったものが、削平を受けた状態にあるのかもしれない。

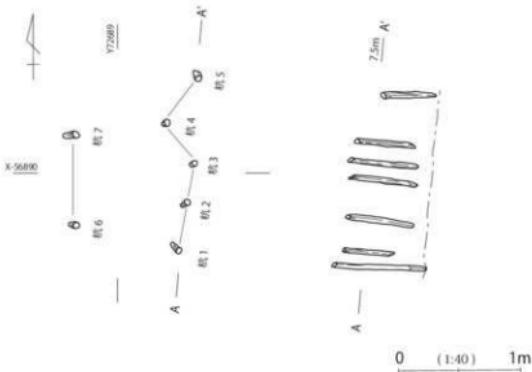
土坑の性格としては祭祀関連の可能性が高い。

土器の器種組成から古墳時代中期の土坑といえるが、時期判別が付きにくい器種のため、詳細な時期は不明である。南北に位置するNRO2-A、B、NRO3との関連性がうかがわれる。

#### 土坑SK01出土遺物(第16図)

1は高環の环部で外面には段を有する。内面は風化、外面はハケメ後に全面に軽いナデ、さらに斜めの暗文が密に施されている。脚部との境には上下方向のミガキがみられる。口径24.4cm。

2~6は基本的には小型丸底壺である。2はあまり体部が張らないもので、ナデと指押さえで丁寧に整形している。口径7.3cm、頸径6.0cm、体部最大径8.5cm、器高8.3cm。3は体部が張るもので、外面は上部がハケメとナデ、底部はナデによる調整である。口径は欠損、頸径5.4cm、体部最大径9.0

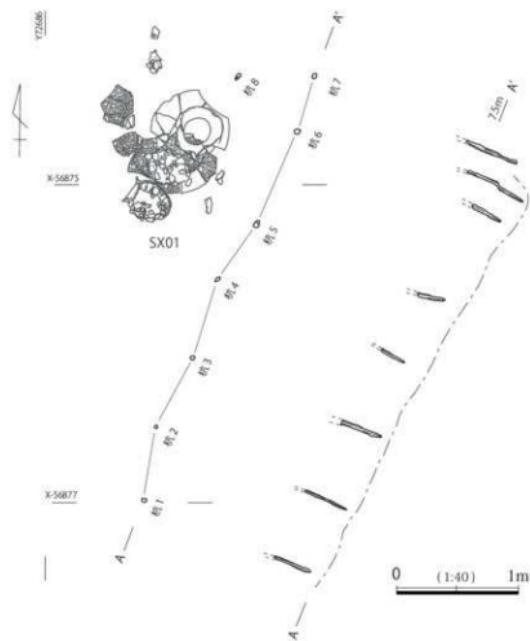


第17図 SA01

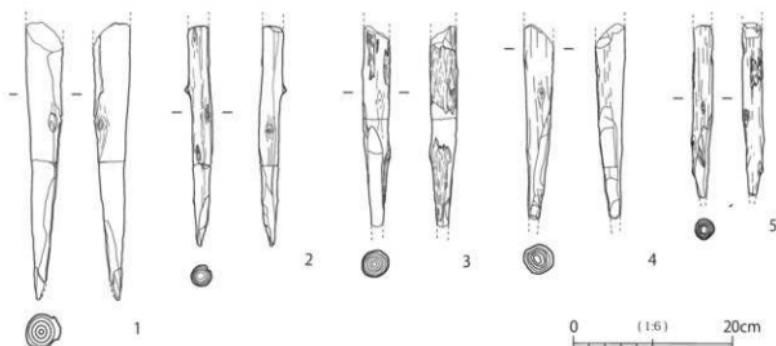
第2表 杭列SA01の杭観察表

杭番号	法寸( cm )		先端部カット面	備考
	残存長	径		
1	75.0	5.1	2	
2	56.0	4.8	不明	糊皮有
3	58.0	4.0	2	糊皮有
4	50.0	5.3	不明	
5	45.0	4.2	不明	糊皮有
6	59.0	5.2	不明	糊皮有
7	43.0	4.5	不明	

cm、器高 6.2cm。4 はやや大きめのものである。外面は全体にハケメを施した後、底部はナデ、内面はケズリが施されている。頸径 8.6cm、体部最大径 13.6cm、器高 11.3cm。5 は口縁がやや直立氣味



第18図 SA02



第19図 SA02 の杭 (一部)

第3表 杭列 SA02 の杭観察表

杭番号	法量(cm)		先端部カット面	備考
	残存長	径		
1	34.0	4.4	3	
2	27.0	2.5	3	
3	23.7	3.6	3	
4	21.2	2.5	2	樹皮有
5	24.6	3.2	2	樹皮有
6	30.5	3.9	4	樹皮有
7	46.0	不明	不明	
8	51.0	3.2	不明	

に立ち上がり、端部がわずかに外反する。体部の重心が下にあり、脚が付く。体部外面にはハケメが残るが、外面、内面とも丁寧なナデで仕上げられている。口径 9.2cm、頸径 8.0cm、体部最大径 12.0cm、底径 8.9cm、器高 12.8cm。6 は破片で出土したもので、外面はハケメ後丁寧なナデ、内面はナデ調整である。破片は多く出土したが、径を復元することはできなかった。

### ②杭列 SA01 (第17図・第2表)

自然河道 NR02-E 埋土に打たれた杭列である。

杭 1 ~ 5 の 5 本の杭が、南北方向に約 33 ~ 40cm 間隔でならび、その西方 80cm のところでは杭 6 と 7 が、南北に 74cm の間隔で位置している。杭が打ち込まれた面は不明で、杭先端の深さは標高 6.98 ~ 7.3 m を測る。杭は直径 4.2 ~ 5.3cm の自然木を利用したもので、4 本には樹皮が残存し、2 本の先端部には 2 つのカット面が観察できる (第2表)。

杭列が確実に NR02-E に伴う遺構とすれば、NR02-E は流路を東西方向にとることから、南北方向に打たれた杭列は流路を阻む施設を構成する、古墳時代中期頃の遺構と考えられよう。性格の詳細はわからない。

### ③杭列 SA02 (第18・19図・第3表)

河道 NR02-B 埋土に打たれた杭列である。

杭 1 ~ 7 の 7 本の杭が約 60cm 間隔で直線状にならび、杭 8 が杭列から北西に 60cm 離れて単独で存在する。SA02 は調査区を北東 - 南西と斜めに貫いており、調査区外にも続く可能性が高い。杭が打ち込まれた面は不明であるが、杭の打ち込まれた深さは、杭 1 の先端が標高 7.46 m、杭 6 が 7.8 m、杭 7 が 7.75 m と北東ほど深くなっている、これは当時の地形が東に低かったことを示すものであろう。

NR02-B について調査区の東壁と西壁の土層を見比べると、その堆積層は北東 - 南西につながることから、SA02 は流路に沿って打たれた杭列であり、その性格は流れを制御するための施設であったと考えられる。

杭は直径 2.5 ~ 4.4cm の自然木を利用したもので、このうち 3 本には樹皮が残存し、先端部は 2 ~ 4 面のカット面が観察できる (第3表)。

また、この杭列のすぐ近くで置き甕 SX02 を検出した。SX02 も NR02-B の埋土から検出したもので、このうち最も大きな甕の下端は標高 7.4 m にあった。これは杭の先端部とほぼ同じ高さであるため、両者の関連性については明確でない。

## ④置き甕 SX02 (第20~23図)

NR02-B 埋土で検出した3点の甕を示す(第20図)。

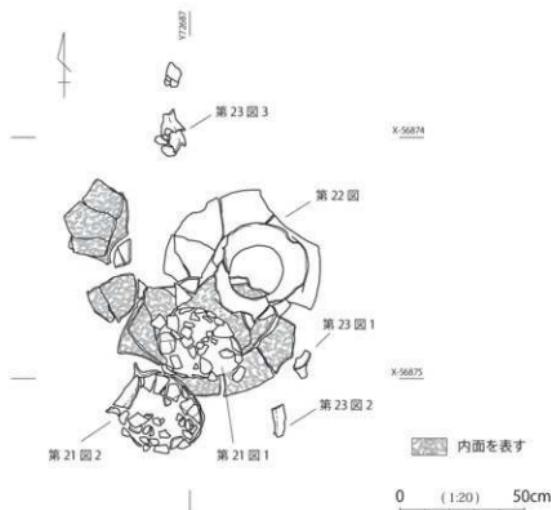
須恵器の甕(第22図)が正位で、若干横にずれて潰れたような状況で出土した。一部で破片が重ねられたような痕跡があることから、埋没する少し前には既に割っていたと思われる。標高は口縁上端7.56m、底部下端7.40mである。この甕口縁部の横では、甕の裏になった破片の直上に、口縁を全周欠損した土師器の甕(第21図1)1点が載った状態で出土し、さらに西に隣接して若干低いレベルで完形の土師器の甕(第21図2)1点が出土した。第21図1、2の甕は、土圧を受けて体部上面が若干潰れてはいたが、口縁の向きを互い違いにして、横向きに並んでいるようであった。

第21図1の甕の下端標高は7.42m、2は7.38mである。

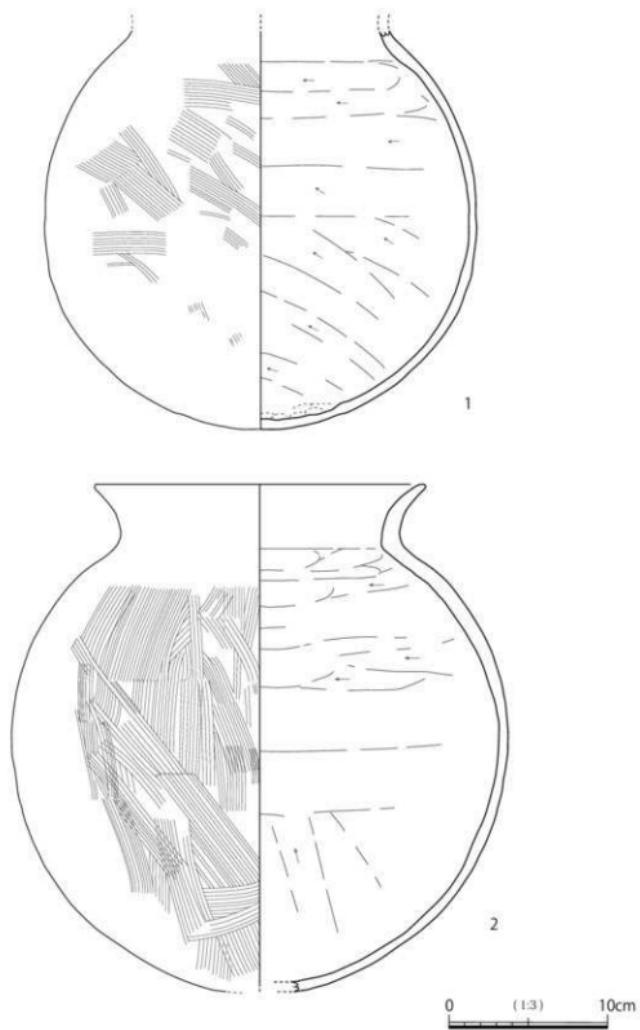
土師器の甕2点と須恵器の甕1点は完形または完形に近い状態であり、それらは何らかの意図のもとに据えられたような様子がうかがえたことから、周囲を精査して土層の変化を探したが、検出するには至らなかった。また、それ以前の掘削時にも土層には顕著な変化が見いだせていない。

これらの甕の性格は、3点とも水汲みなどの実用に耐え得るものであることから、川辺の営みの一端とも捉えられるが、祭祀に関連するものとも考えられよう。

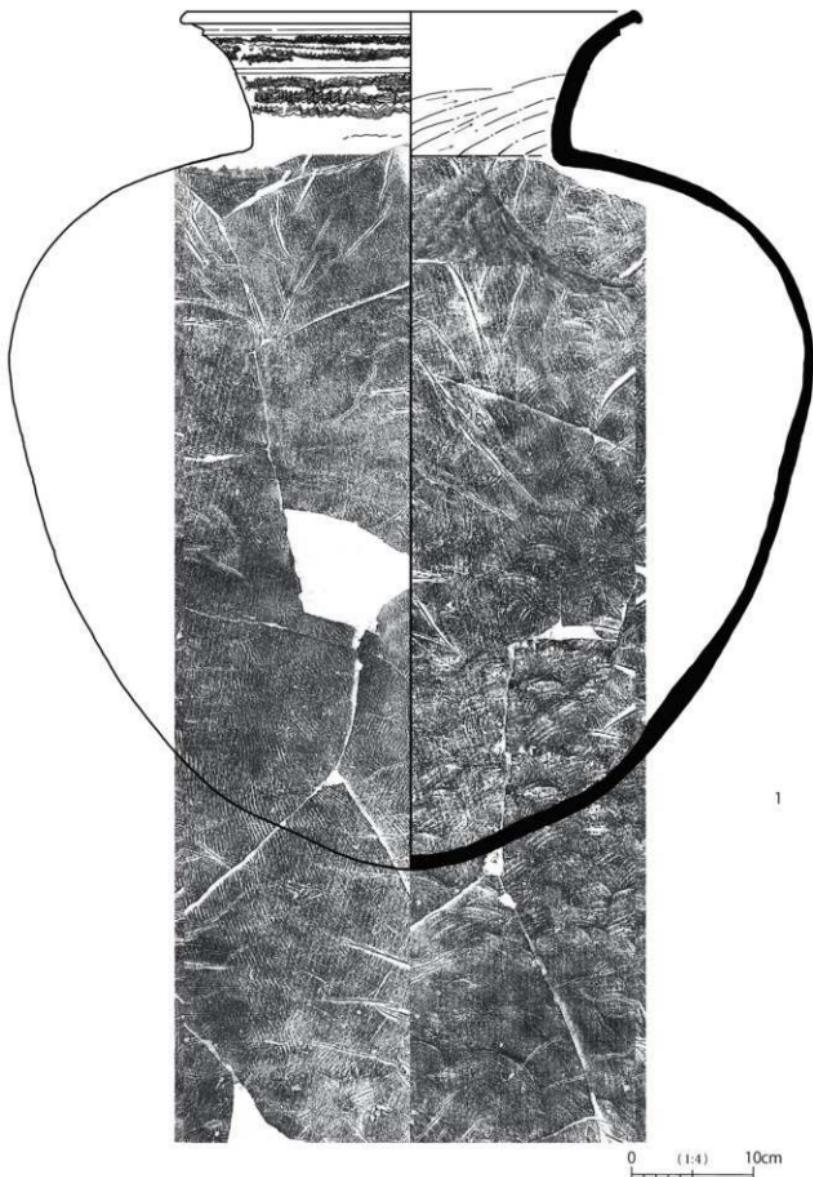
上記の甕3点の周囲から高環の脚1点と土師器の甕3点が出土しているが、これらはすべて破片である。



第20図 SX02



第21図 SX02出土土器 (1)



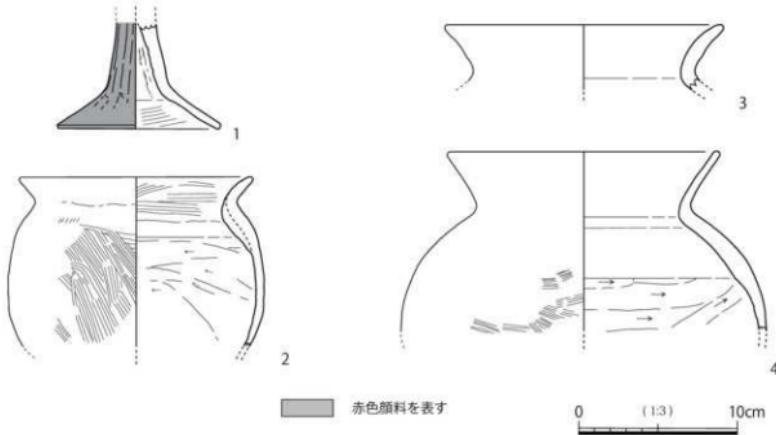
第22図 SX02 出土土器 (2)

## SX02 の土器 (第 21 ~ 23 図)

第 21 図は土師器の表である。1 は口縁を全周欠損したもので、体部は球形を呈する。外面はハケメ後一部ナデ、内面はケズリで、器壁は非常に薄い。外面には煤が付着している。頸径 15.9cm、体部最大径 26.2cm。2 は単純口縁で、体部は球形を呈する。端部が外反する口縁は内外面ともヨコナデで、体部の外面はハケメ、内面はケズリである。外面には広く煤が付着している。口径 20.3cm、頸径 18.2cm、体部最大径 30.9cm、器高 43.5cm。

第 22 図は須恵器の表である。口縁部は外面の中ほどに断面 U 字状の浅い沈線を 1 本めぐらせ、その上下にハケ状工具を利用した波状文を巡らせていている。波状文は上下とも 3 周めぐるが、雰な印象を受ける。内面は下の方に輪轂を使用しないナデ上げがみられる。体部は外面が平行文タタキ後、工具を使用した丁寧なナデが施されており、特に肩部付近ではタタキの痕跡がほとんど消されている。底部には焼成時に使用された支え具の痕が、わずかなくぼみとなって 3 方向に残る。内面は重弧文様の当て具痕の上から軽いナデが施されており、当て具の痕は浅い。口径 37.9cm、頸径 26.2cm、胴部最大径 66.1cm、器高 75.0cm。

第 23 図は土師器である。1 は高环の脚部で、外面は縦方向の丁寧なミガキ、内面は筒部がシボリ、裾部がハケメ調整である。底径 9.8cm。2 ~ 4 は単純口縁の表で、2 は小型で体部が張らないものである。体部外面と口縁内面はハケメ、体部内面はケズリが施されているが、ケズリ残して極端に器壁が厚いところがみられる。外面には口縁から体部にかけて厚く煤が付着している。口径 14.4cm、頸径 12.4cm、体部最大径 15.0cm。3 は口縁部分で、外面には煤が付着している。口径 16.9cm、頸径 13.7cm。4 は口縁が直線的に開くもので、体部外面はハケメ、内面はケズリのほか口縁から肩部付近まで丁寧な横ナデが施されている。外面には若干の煤が付着している。口径 16.7cm、頸径 13.3cm。



第 23 図 SX02 周辺出土土器

## (4) 旧河道と遺物

旧河道は大きく分けると NR02 と NR03 の 2 本があり、NR02 では複数の河道が重なっていたため NR02-A ~ E の 5 河道に細分した。以下では 6 本の河道について、切りあい関係と出土遺物から判断した古い順番に、概略と出土遺物の説明をおこなう。ただし、水の流れていた方向（上下流）は全ての河道で明らかにできなかったので、個別の説明からは省略する。

また、河道のほかに湿地層の平面的な広がり（NX02）を確認しており、旧河道との関連性が考慮されることからここで取り扱う。

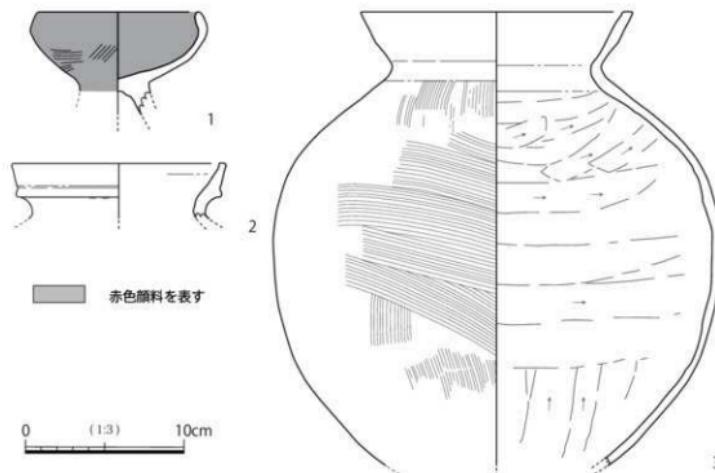
## ① NR02-A

東壁での河道の上端幅は 4.3 m を測り、流路は東一北西にとる。細砂層（第 14 図 86 層）が厚く、主にこの層から土師器が出土した。遺物の出土量は少ない。

時期がわかる遺物の中では第 24 図 3 の甕が新しく、古墳時代中期後半に比定される。遺物の絶対数が少ないが、古墳時代中期後半頃の河道としておく。

## NR02-A 出土遺物（第 24 図）

第 24 図 1 ~ 3 は土師器である。1 は小型高壺の壺部で、口縁端部は内湾している。外面はハケメ後ナデ、内面はナデで、受部の内外面と脚部外面には赤色顔料が塗布されている。口径 10.1cm。2、3 は甕で、2 は複合口縁の口縁部である。外面には煤が付着している。口径 13.2cm、頸径 10.6cm。3 は単純口縁で体部が張る。胸部外面は縱一斜めのハケメ、内面はケズリが施されている。外面には煤が付着し、器壁は被熱で変色している。口径 16.7cm、頸径 12.8cm、体部最大径 27.4cm。



第 24 図 NR02-A 出土遺物

## ② NR03

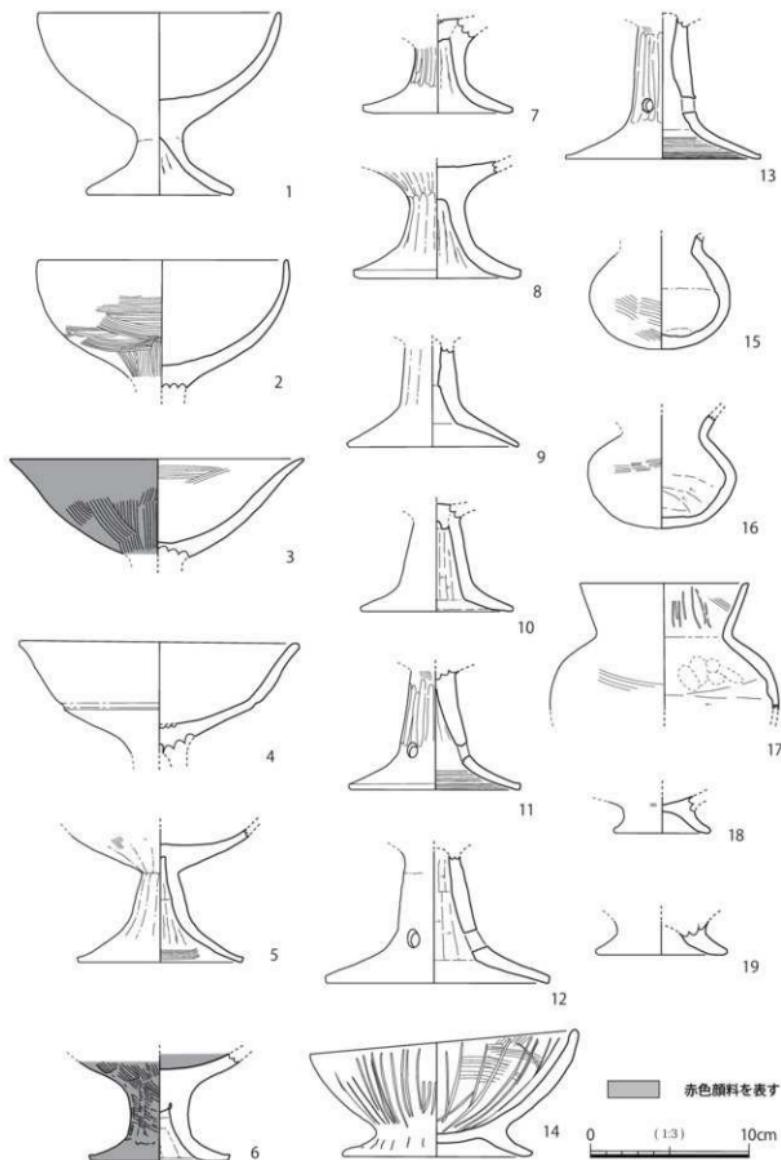
6区中央に位置する1本の河道跡で、流路は北東—南西にとる。河道は上端幅5m前後、残存する深さは0.54mを測る。堆積土は大半が粘質土で、砂層が少ない。

堆積土からは残りの良い土器、石器、木製品が大量に出土し、桃核も出土している。土師器の表には単純口縁と退化した複合口縁がみられ、古墳時代中期後半の河道と捉えられる。

## NR03 出土遺物（第25～28図）

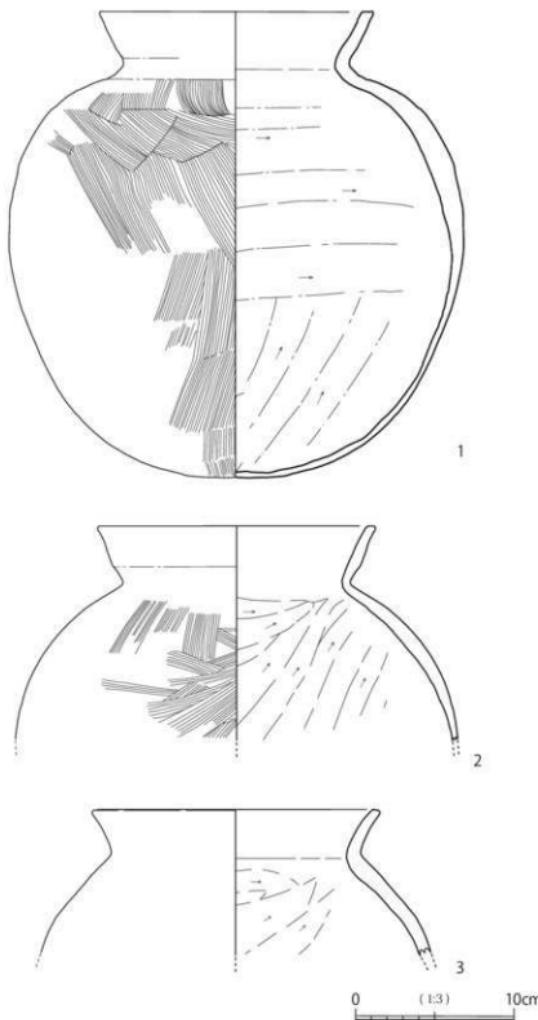
第25図は土師器である。1～13は高環で、1は環部外面が無段で、脚の筒部が短く、脚は低めである。外面ともナデ、脚部は筒部外面がナデ、内面はシボリとナデである。環部外面と脚部外面には橙色の化粧土が施されている。口径14.7cm、底径8.8cm、器高11.2cm。2は外面無段の環部で、外面はハケメ、内面はナデで、外面には橙色の化粧土が施されている。口径15.4cm。3は外面無段の環部で、口縁端部はやや外反する。外面はハケメ、内面はハケメ後ナデ、外面には赤色顔料がわずかに残る。口径18.1cm。4は外面有段の環部で、外面はナデ、内面はナデ後、斜行する暗文が施されている。口径17.2cm。5は外面無段の環部で、口縁部を欠損している。環部外面はハケメ後ナデ、環部内面はナデ、脚部外面はナデ、内面は筒部がシボリ、裾部がハケメである。底径10.0cm。6は脚部で、わずかに残る環部内面はナデ、環部と脚部の外面はハケメ、筒部内面は風化しているがケズリのようである。底径8.5cm。7は脚部で、筒部外面はミガキ、内面はシボリ後軽いケズリである。底径9.2cm。8は脚部で、わずかに残る環部内面は風化、环下方から脚筒部にかけての外面はミガキ、筒部内面はシボリ後ケズリとナデ。底径10.2cm。9は脚部で、外面はナデ、内面は筒部が横ケズリで、裾部との境は屈曲して稜が入る。底径10.4cm。10は脚部で、外面はナデ、内面は筒部が横ケズリで、裾部との境は屈曲して稜が入る。底径9.3cm。11は脚部で、筒部外面はミガキ、裾部はナデ、内面は筒部が横ケズリ、裾部はハケメ。3方向に円形透かしが穿たれている。底径10.4cm。12は脚部で、外面はナデ、筒部内面は横ケズリ、裾部はハケメで、裾部との境は屈曲して稜が入る。3方向に円形透かしが穿たれている。底径13.6cm。13は脚部で、筒部外面はミガキ、内面は筒部がシボリ、裾部はハケメ。3方向に円形透かしが穿たれている。底径12.0cm。14は低い脚が付く環である。环の内面はハケメ後ナデの上に放射状の密な暗文、外面はナデの上に上下方向に密な暗文を施している。脚は別途製作したものではなく、环に直接粘土を張りつけたもので、环の重みで若干変形している。口径16.6cm、底径11.5cm、器高7.0cm。15、16は口縁端部を欠損した小型丸底壺である。15は、外面はハケメとナデ、内面はナデである。外面には煤が付着している。頸径5.2cm、体部最大径8.7cm。16は、外面は風化が著しいハケメとナデ、内面はナデである。頸径5.6cm、体部最大径9.1cm。17は小型の甕である。口縁部内面はハケメ後ナデの上に上下方向の密な暗文を施している。体部外面はハケメ、内面はケズリと指押さえである。外面には煤が付着している。口径10.4cm。18は低い脚で、おそらく脚環小型丸底壺の脚部であろう。外面ともナデである。底径6.0cm。19も低い脚で、上に接着した器物の内面には丁寧なナデが施されている。内外面ともナデである。底径8.1cm。

第26図1～3は土師器の甕で、いずれも単純口縁のものである。1は口縁がやや内湾気味に立ち上がり、体部は球形を呈している。外面はハケメ、内面はケズリで、外面には煤が付着している。口



第25図 NR03出土遺物(1)

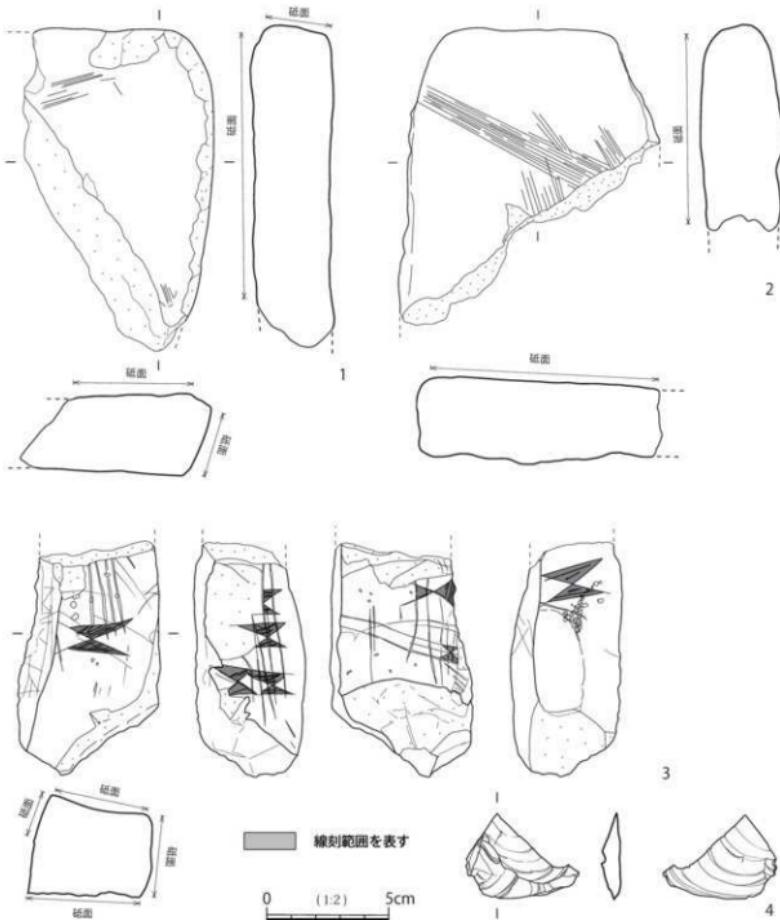
径 16.8cm、頸径 13.9cm、体部最大径 27.9cm、器高 28.6cm。2 は口縁外面がやや膨らんで立ち上がる。外面はハケメ、内面はケズリで、外面には煤が付着している。口径 17.1cm、頸径 14.0cm。3 は口縁が直線的に立ち上がり、口縁端部に浅い凹線状のくぼみがめぐる。外面は風化、内面はケズリである。



第26図 NR03出土遺物(2)

外面には口縁端部まで煤が付着し、器壁は被熱で変色している。口径 17.8cm、頸径 15.4cm。

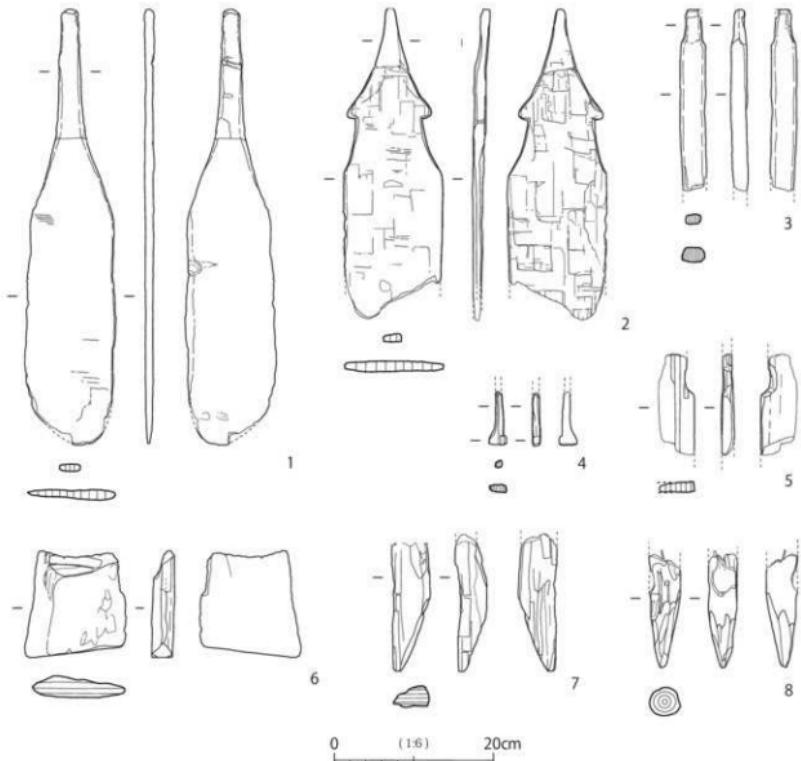
第 27 図は石製品である。1～3 は砥石の欠損品で、1 は、扁平な石の 2 面に平滑な使用痕が残るが、あまり使い込まれていない。厚さ 3.1cm。2 は、扁平な石の 1 面に擦痕状の使用痕が残る。幅 10.9cm、厚さ 3.5cm。3 は断面四角形で、4 面全面に使用痕が残る。キメの細かい石材で、特に 2 面はよく使用されて断面が弓状に擦り減っている。この砥石で注目されることは線刻が施されていることである。三角形を向かい合わせたもので、三角形の中には 2 ～ 7 条の線を入れている（図中アミかけ部



第 27 図 NR03 出土遺物 (3)

分)。その数は多い面で4つを数え、剥離、欠損部分を考慮するともっと多かった可能性がある。線刻は3面で顕著に見られるが、1面は自然面が多く残るため判然としない。幅5.2cm、厚さ3.5cm。4は碧玉の剥片で、濃緑色をしている。縦3.5cm、横3.9cm、厚さ0.7cm、重量8g。

第28図は木製品である。1は曲柄鍬身の平鍬で、両サイドに切れ込みが無いもので、材はアカガシ亞属である。<sup>(5)</sup>全長53.5cm、刃部最大幅10.7cm、厚さ1.1cm。2は曲柄鍬身の平鍬で刃部先端を欠損する。両サイドに切れ込みが入るもので、材はアカガシ亞属である。<sup>(6)</sup>最大幅12.2cm、厚さ1.5cm。3は一端を欠損するが、角棒型田下駄の棧と思われる。幅3.1cm、厚さ2.1cm。4は雛形の武器、刀形である。把頭から把間にかけての部分で、腹側の湾曲が表現されるが、把縁と刀身を欠損している。5、6は明らかに加工痕がみられるものだが、製品にはなっていない。7は再利用品の杭の可能性がある。径3.3~4.5cm。8は杭先で、先端は細かいカットで尖る。径3.5cm。



第28図 NR03出土遺物(4)

### ③ NR02-B

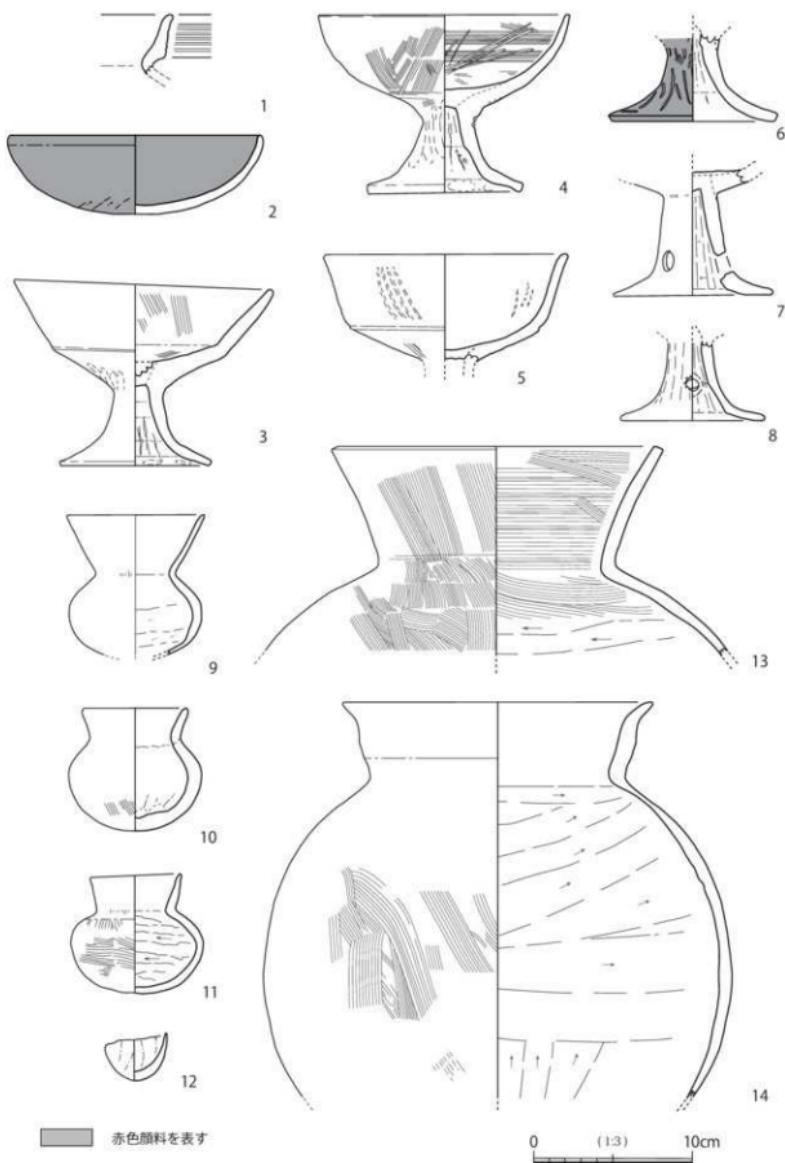
東壁を見ると、河道の上端幅は8m以上となる。だが、砂層を中心とした緩やかな斜方向の堆積層の存在と、流路に沿うSA02が北北東から南南西を指向していることから、東壁は河道に対してかなり斜めの位置関係にあると思われる。河道幅は東壁で見るよりは狭いであろう。

堆積土からはSX02のほか、多量の土師器（第29図）と出雲1期の須恵器破片2点（第30図）が出土した。古墳時代中期末～後期初頭頃の河道と捉えられる。

#### NR02-B 出土遺物（第29、30図）

第29図1は弥生土器の甕口縁部である。複合口縁の外面には擬凹線がめぐらされ、外面に煤が付着している。2～14は土師器である。2は壺で、内面と外面の上半分は丁寧なナデ、底部外面はケズリで、内外面には赤色顔料が塗布されている。口径15.6cm、器高4.9cm。3～8は高壺である。3は壺部外面が有段で、壺部内面はハケメ、外面は丁寧なナデ、脚部外面はナデ、内面はシボリ痕である。口径16.0cm、底径9.1cm、器高11.1cm。4は壺部外面が無段で、壺部は内外面ともハケメ、内面には斜め方向の暗文が施されている。脚部外面は縱方向のミガキ、内面はシボリ痕である。壺部の外面には橙色の化粧土が残る。口径15.5cm、底径9.4cm、器高10.9cm。5は壺部外面が有段だが、口縁はあまり間かず丸みを帯びた器形をしている。風化のためわかりにくいが、外面の稜より上は斜線状の暗文、下はハケメ、内面にも斜線状の暗文が残る。口径15.0cm。6は脚部で、外面はハケメ後丁寧なナデ、その上に上下方向の暗文が施されている。筒部内面はシボリ後に軽い横ケズリで、外面には橙色の化粧土が塗布されている。底径10.0cm。7は脚部で、わずかに残った壺部内面にはハケメが残る。脚部外面は風化、筒部内面は横方向の丁寧なケズリ、裾はナデで、3方向に円形透かしが穿たれている。底径9.7cm。8は脚部で、風化しているが、筒部外面は縦ミガキ、筒部内面は丁寧なケズリが残る。2方向に円形透かしが穿たれている。底径8.8cm。9～11は小型丸底壺である。9は口縁が高く外反するもので、口径が体部径より大きい。体部外面はハケメ後ナデ、内面はケズリである。口径8.7cm、頸径5.0cm、体部最大径8.3cm。10は体部が張らないもので、体部外面はハケメ後ナデ、内面は指押えやナデである。口径6.5cm、頸径5.6cm、体部最大径8.2cm、器高7.6cm。11は体部が張るもので、体部外面はハケメ、底部はナデ、内面は粗いナデである。口径5.6cm、頸径4.9cm、体部最大径8.0cm、器高7.2cm。12は手捏土器で、卵を横半分に切った形をしており、口縁端は薄く波打っている。口径3.9cm、器高2.5cm。13は単純口縁の甕で、口縁は直線的に高く立ち上がる。外面は口縁から胴部まで縱方向の密なハケメ、内面は口縁から肩部にかけて横方向のハケメ、肩部の下方は横方向のナデである。外面には煤が付着している。口径20.4cm、頸径14.6cm。14は単純口縁の甕で、口縁は先端屈曲して外反する。体部外面はハケメとナデで、内面はケズリである。外面には煤が付着し、器面は被熱変色している。口径19.1cm、頸径15.7cm。

第30図は須恵器である。1、2とも蓋で、1は肩部外面にしっかりした段がつき、天井部から肩部にかけては丁寧な回転ヘラケズリである。口縁端部内面には段を有するが、ややシャープさに欠ける。口径13.9cm。2は肩部外面にしっかりした段がつき、天井部は自然軸のため調整不明、口縁端部内面にはシャープな段がある。口径13.6cm。



第29図 NR02-B 出土遺物 (1)



第30図 NR02-B 出土遺物（2）

## ④ NR02-C

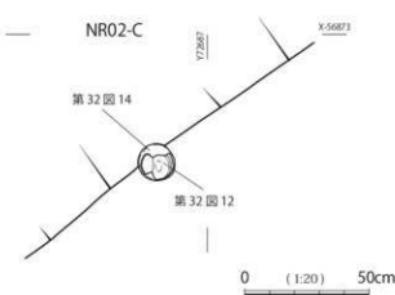
河道は東壁で幅 2.8 m、西壁で 5.6 m を測るが、流路は北東—南西をとるため、両壁とも河道に対して斜めの位置関係にある。さらに北岸は 4 区と 5 区の未調査区にあり、河道幅は不明である。堆積土は大半が粘質土で、砂層が少ない。

堆積層からは土器と木製品が多く出土した。須恵器の蓋環は出雲 2 ~ 3 期に比定されることから、古墳時代後期後半の河道と捉えられる。

## NR02-C 出土遺物（第32、33図）

第32図 1 ~ 5 は土師器である。1 ~ 3 は高杯で、1 は外面無段の杯部で、丸味が少なく、口縁端部に向て逆ハの字状に開く。杯部外面はハケメ、内面はハケメ後ナデ、脚部外面はナデ、筒部は内面シボリで裾との境に粘土を貼り付けた痕が残る。杯部外面と脚部外面に赤色顔料が塗布されている。口径 19.7cm。2 は脚部で、低いわりに裾が開く。外面はハケメ後ナデ、内面は筒部がシボリ後ケズリ、ナデと念入りである。外面に赤色顔料が塗布されている。底径 10.3cm。3 は脚の筒部である。外面は風化しているがハケメ、内面はケズリ、内外面ともに赤色顔料が塗布されている。4、5 は甕である。ともに単純口縁で、端部は外反する。4 の体部外面は細かい継ハケ、内面は横ケズリである。外面には煤が付着し、器壁は被熱で変色している。口径 18.9cm、頸径 14.6cm。5 は口縁部のみの残存である。口径 19.3cm、頸径 16.5cm。

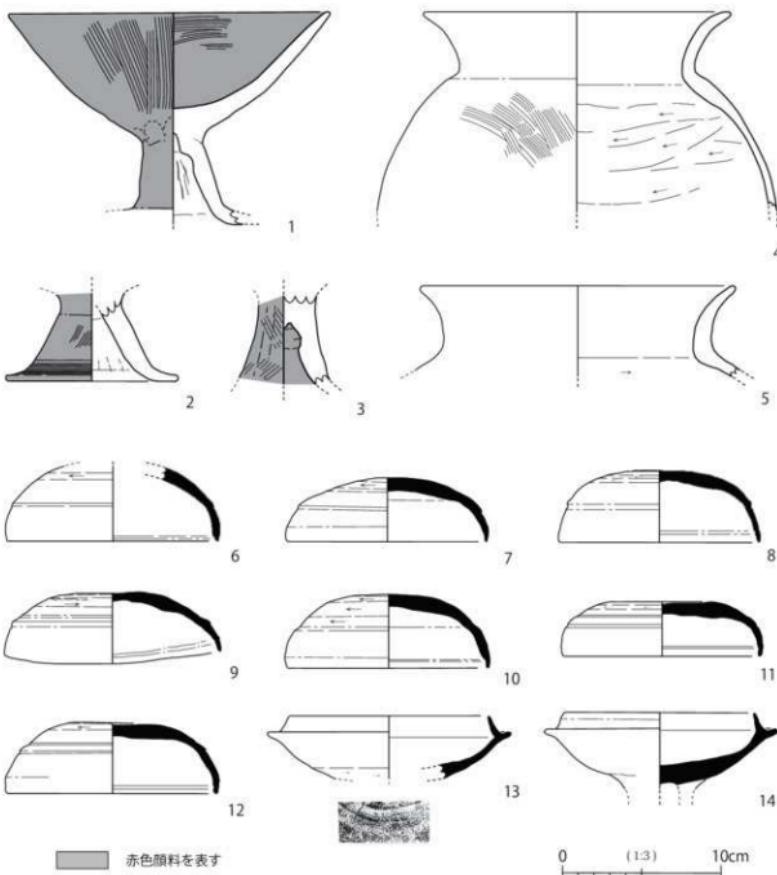
6 ~ 14 は須恵器である。6 ~ 12 は蓋で、6 は肩部外面にシャープで低い段を有し、天井部は大半を欠損するが、丁寧な回転ヘラケズリが施されているようだ。口縁端部内面にはやや丸味を帯びた段を有する。口径 13.0cm。7 は肩部外面に緩い段を有し、天井部は丁寧な回転ヘラケズリ、口縁端部内面に段などはみられない。口径 12.5cm、器高 3.9cm。8 は肩部外面に断面 U 字状の浅い沈線が 2 周めぐり、天井部はヘラ起こしの痕跡がわかる間の空いた回転ヘラケズリ、口縁端部内面には断面 U



第31図 NR02-C の杯出土状況

字状の浅い沈線がめぐらされている。口径 12.4cm、器高 4.4cm。9 は焼き歪みが生じたものである。肩部外面に断面 U 字状の浅い沈線が 2 周めぐり、天井部はヘラ起こしの痕跡がわかるが、丁寧な回転ヘラケズリを施している。口縁端部内面は極めて浅い沈線がめぐるが、口縁端部にかけての緩い段のようにも見える。口径 11.4 ~ 13.3cm、器高 4.3cm。10 は肩部外面に幅 4

mmの断面U字状の沈線が1周めぐり、天井部は回転ヘラケズリ、口縁端部内面には断面U字状の沈線がめぐらされている。口径12.4cm、器高4.5cm。11は肩部外面に断面U字状の浅い沈線が2周めぐらされ、天井部はわずかにヘラ起こしの痕が残るが、丁寧な回転ヘラケズリが施されている。口縁端部内面には断面U字状の沈線がめぐる。口径12.0cm、器高3.2cm。12は肩部外面に断面U字状の沈線が2周めぐらされ、天井部は一部に隙間がみられるが、肩部まで回転ヘラケズリが施されている。口縁端部内面には断面U字状の沈線がめぐる。口径13.0cm、器高4.2cm。13は坏で、口縁は低くて内傾しており、端部内面に段等はみられない。底部外面は自然釉のため明瞭でないが、回転ヘラケズ

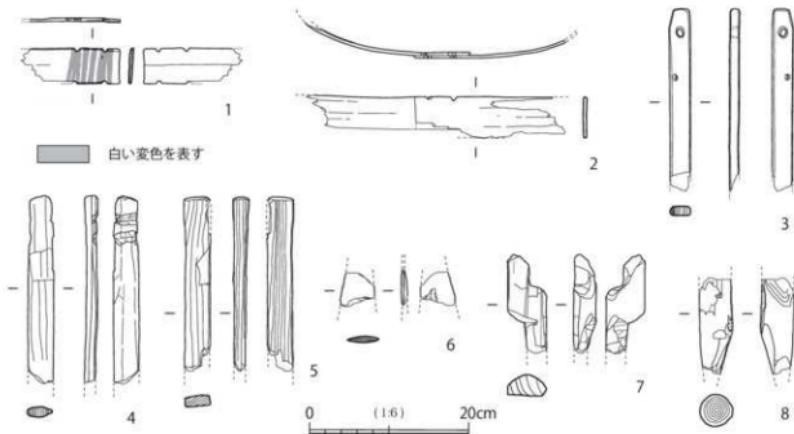


第32図 NR02-C 出土遺物 (1)

りで、ヘラ記号「／」の一端がわずかに残る。口径 11.2cm、受部径 14.0cm。14 は有蓋高杯の杯部である。口縁は低くて内傾しており、端部内面に段等はみられない。脚部上端をみると、脚には方形透かしが 3 方向に穿たれている。口径 11.6cm、受部径 14.4cm。

出土状況について触ると、NR02-C の南岸付近で、上下逆位置の有蓋高杯の杯部（第 32 図 14）の上に、正位の蓋（第 32 図 12）が重なった状態を確認した（第 31 図）。

第 33 図は木製品である。1 と 2 は曲物で、1 は側板の合せ目部分である。上下各 2か所に 3.6cm の間隔をあけて V 字状の切り込みが配されている。切り込みの周辺には縦方向に白い帯状の変色が 8 条は確認されたことから、桜の皮などで幾重にも縛られていたと推測される。側板は上下幅 4.4cm、厚さ 0.4cm。2 は側板が円形の状態で出土したものだが、形状を保ったまま取り上げることはできなかった。本来は直径 30～35cm の曲物である。側板の両端の合せ目は 1 と同じで、2 か所の V 字状切れ込みを確認したが、下方は欠損している。側板は上下幅 5.0cm、厚さ 0.3cm。3 は一端を欠損する用途不明品である。面取りされた棒状品で、上の方は片側だけが斜めに切り落とされ、端から 3cm のところに直径 1cm の円孔が穿たれている。また、円孔の下 6cm には両面に貫通する孔が明けられて桜の皮が巻き付けられている。再利用された木針の可能性がある。幅 2.6cm、厚さ 1.2cm。4 は一端を欠損する用途不明品である。端から 3cm と 5cm の 2 か所に幅 1.5cm の溝が彫られている。幅 3.1cm、厚さ 1.6cm。5 は一端を欠損する細い板状の用途不明品で、断面は方形である。幅 3.1cm、厚さ 1.6cm。6 は両端を欠損する小さなものだが、表裏面とも滑らかに加工されており、断面は稜が不明瞭な菱形に近い。幅 4.0cm、厚さ 0.7cm。7 も両端を欠損するもので、断面の一部は片面が弧状に加工されている。幅 4.7cm、厚さ 2.7cm。8 は両端を欠損する杭先であろう。径 4.0cm。

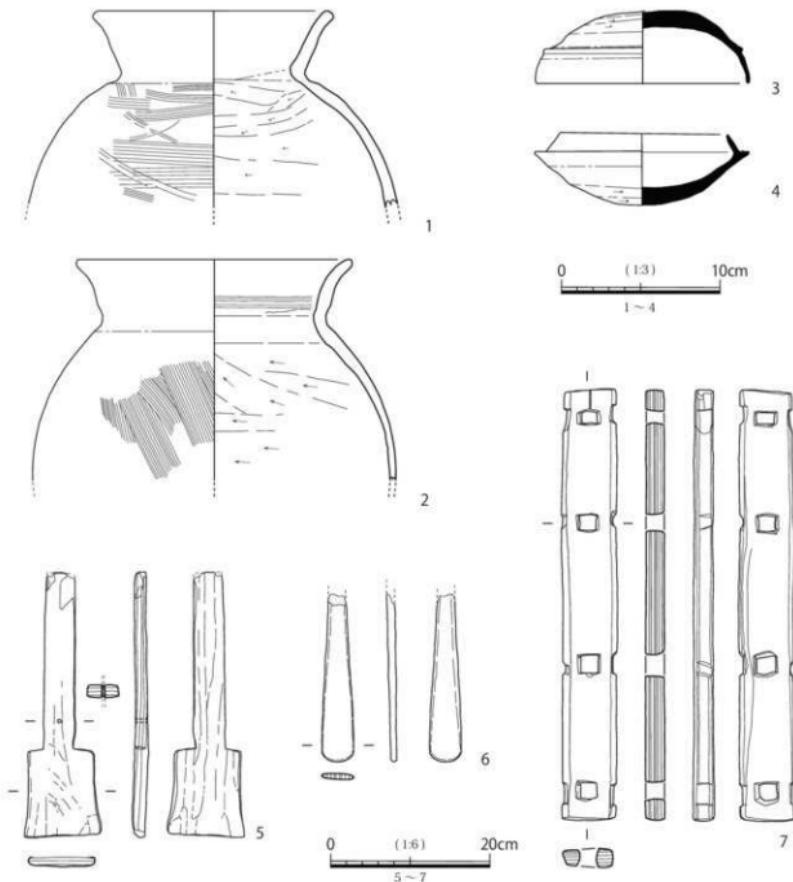


第 33 図 NR02-C 出土遺物 (2)

## ⑤ NR02-D

東壁を見ると、河道の上端幅は 6.6 m を測る。流路は南岸が東一西にあり、北岸は西方で若干北に広がる程度なので、河道幅 6.6 m は本来の数値に近いであろう。この河道は中央に NA02-E を挟み、その北側では堆積土がすべて砂層であるのに対し、南側では有機質を含む粘質土の層が厚いのだが、西壁を見ると NA02-E の下には一連の砂層が存在する。

NR02-D は NR02-A を切り、NA02-E に切られることから、古墳時代中期後半～古墳時代後期後半の河道といえるが、確實にこの河道に伴う遺物が出土していないため、時期は不明である。



第34図 NR02-E 出土遺物

⑥ NR02-E

この河道は、NR02-D の中央に位置する。東壁を見ると、上端幅 3.3 m、深さ 0.5 m(西壁から)を測り、流路は南岸が東一西にあり、北岸は西方で若干北に広がる程度なので、河道幅 3.3 m は本来の数値に近いであろう。堆積層には粘質土と砂質土の両方があり、どの層にも有機質が多く含まれていた。

堆積土からは土器と木製品が出土しており(第34図)、出雲3期の須恵器が出土したことから、古墳時代後期の河道と捉える。

NR02-E 出土遺物(第34図)

第34図1、2は土師器の単純口縁の甕である。1は体部外面はハケメ、内面はケズリである。外面には煤が付着し、器壁は被熱により変色している。口径 14.8cm、頸径 11.3cm。2は肩が張らない器形で、体部外面はハケメ、内面はケズリで、口縁内面の下半部分にもハケメがめぐる。口径 17.0cm、頸径 13.8cm、胴部最大径 20.0cm。3、4は須恵器で、3は蓋である。肩部外面に断面U字状の浅い沈線が2周めぐり、天井部はヘラ起こしの痕跡が残る若干間の空いた回転ヘラケズリで、口縁端部内面に段などはみられない。口径 13.1cm、器高 4.3cm。4は坏で、口縁は低く内傾し、端部内面に段等はみられない。底部外面は丁寧な回転ヘラケズリである。口径 10.3cm、受部径 13.2cm、器高 4.4cm。

5～7は木製品である。5は叩き板状の形をした用途不明品である。中央に木釘が1本打たれてるので、何かの部材である。長さ 32.6cm、幅 9.4cm、厚さ 1.7cm。6は基部を欠損したヘラ状工具で、先端が弧状を呈している。先端ほど幅広で薄く、基部は細くて厚くなり、側面は角が落とされて断面は梢円形に近い。色は濃い褐色をしており、使用時に着色したものと思われ、先端部には擦ったような使用痕がみられる。幅 3.9cm、厚さ 0.9cm。7は細長い板で、一辺 2.4～2.7cm の方形の穴が4か所に穿たれ、穴があるところの両側面にはコの字状の切り込みが入れられている。角枠型田下駄の枠材の可能性がある。長さ 52.8cm、幅 6.8cm、厚さ 2.2cm。

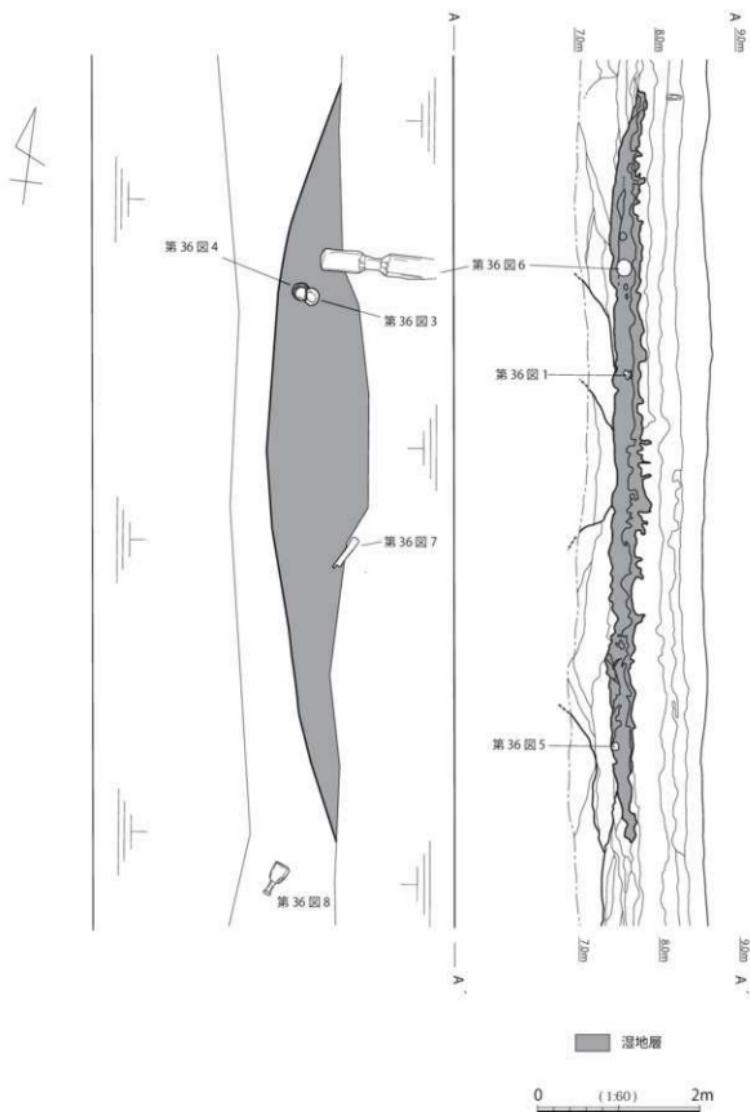
⑦ NX02(第35図)

NR02-C と NR02-D の間で検出した褐色粘質土の広がりを示す。この粘質土の色は微細な有機質、例えば珪藻類などを多量に含んでいたためと考えられ、灌水して水がほとんど動かない湿地であったと想定される。本調査区内では、この層の平面的な広がりを把握することができ、さらに東へ続くことを確認した。

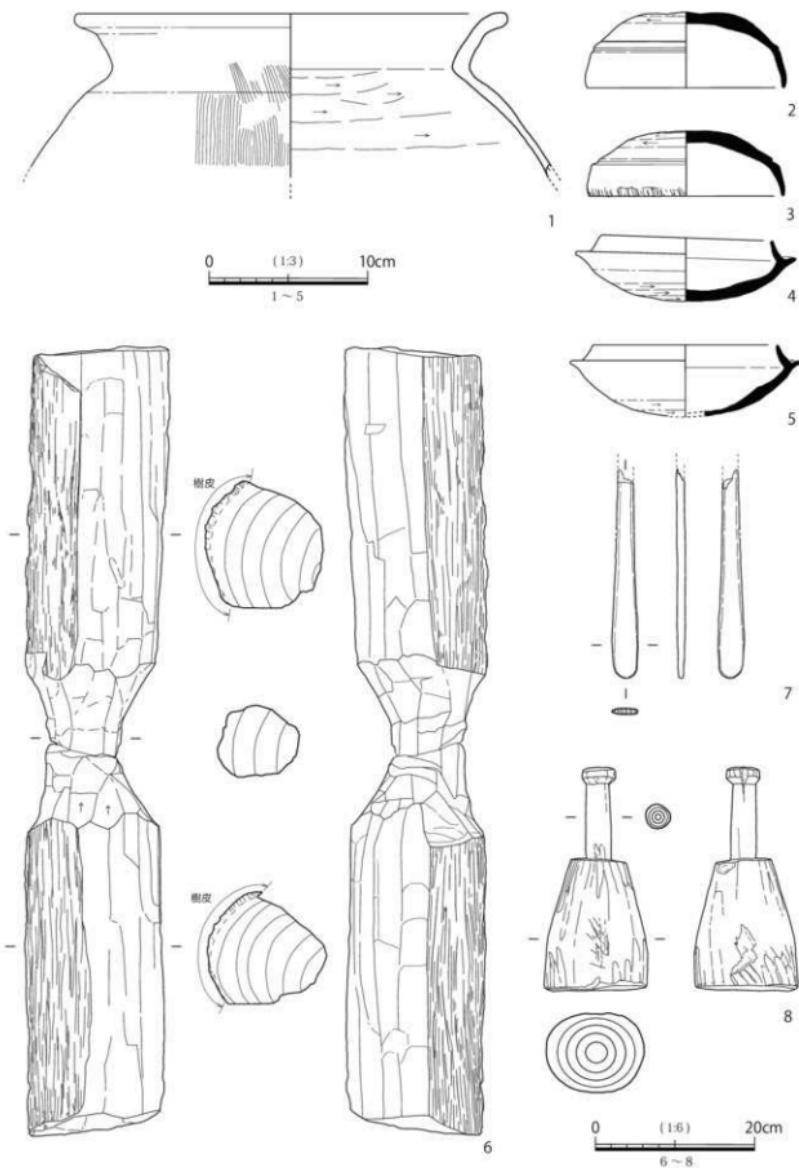
この層の中、および精査面からは土器と木製品が出土しており、出土状況は第35図に示している。NR02-E と同様に、出雲第3期の須恵器が出土しているので古墳時代後半頃の湿地と推定される。木製品には未製品が1点含まれており、この場所の性格を表す遺物として興味深い。

NX02 出土遺物(第36図)

第36図1は土師器の甕である。単純口縁の端部が外反するもので、体部外面はハケメ、内面はケズリ後ナデである。外面には煤が付着している。口径 26.6cm、頸径 21.9cm。2～5は須恵器で、2、3は蓋である。2は、肩部外面に断面U字状の沈線が2周めぐり、天井部は丁寧な回転ヘラケズリで、口縁端部内面に段などはみられない。口径 12.2cm、器高 4.6cm。3は外面肩部に削り出しで稜を形成し、



第35図 NX02遺物出土状況



第36図 NX02出土遺物

天井部は丁寧な回転ヘラケズリで、口縁端部内面に段などはみられない。口径 12.0cm、器高 4.0cm。4、5 は环である。4 は、口縁は低く内傾し、端部内面に段などはみられない。底部外面は丁寧な回転ヘラケズリである。口径 10.5cm、受部径 13.6cm、器高 3.9cm。5 は、口縁は低く内傾し、端部内面に段などはみられない。底部外面は丁寧な回転ヘラケズリである。口径 11.3cm、受部径 14.2cm。

6～8 は木製品である。1 は竖杵の未製品で、握り部が粗い削りで細く加工されているが、両端の掲き部はまだ樹皮が残る段階である。木材はアカガシ亜属で、樹皮のカーブから原本を復元すると直径 40cm 強と推定され、芯を外した分割材、おそらく 4 分割した材が使用されている。掲き部径 16.5～17.2cm、握り部径 8.6cm、全長 96.0cm。7 は、基部を欠損したヘラ状工具である。先端が弧状を呈している。先端ほど幅広で薄く、基部は細くて厚くなり、側面は角が落とされて断面は梢円形に近い。色は濃い褐色をしており、使用時に着色したものと思われ、先端部には擦ったような使用痕がみられる。幅 3.2cm、厚さ 0.8cm。8 は横槌である。芯持材を円形に加工したもので、敲打部は太くて短く、握部に向けて若干径が小さくなり、握部は短く基部に突起がつく。敲打部には 2 か所に使用痕がみられるが、ヤリガンナの加工痕が鮮明に残る部分が多く、あまり使い込まれていない。敲打部径 9.8～12.0cm、握部径 3.0～3.2cm、全長 27.5cm。

## (5) その他の遺物

### ① 5 区出土遺物（第 37 図）

自然流路 NRO2-D の上層から 5 区南端にかけて堆積した、灰色粘質土（10、11 層）を中心として多くの遺物が出土した。掲載した遺物のほかに、製品にはなっていない加工痕のある材木が投げ込まれたように大量に出土している。

第 37 図 1 は土師器の把手で、瓶または移動式竈につくものである。2、3 は須恵器で、2 は蓋である。肩部外面には浅い U 字状沈線がめぐり、天井部は回転ヘラケズリ、口縁端部内面には断面 U 字状の深い沈線がめぐる。口径 12.0cm、器高 3.9cm。2 は無高台环で、体部は直線状に立ち上がり、端部がやや内傾する。底部外面は回転糸切りで、ヘラ記号「×」がみられる。口径 12.4cm、底径 6.8cm、器高 4.2cm。

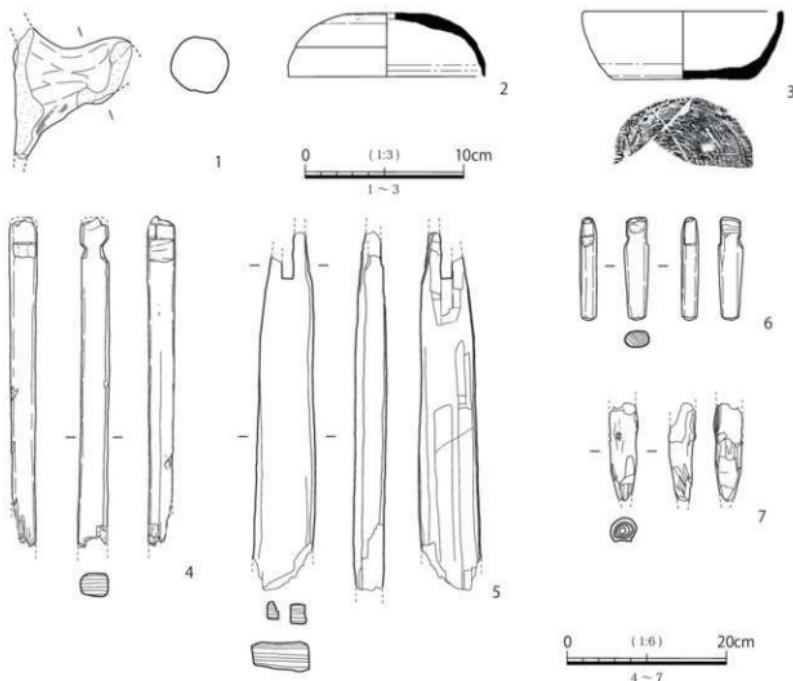
4～7 は木製品である。4 は器具材の不明品で、一端を欠損している。断面方形で、端部の手前 4.2cm の両側面にコの字状の切り込みがみられる。幅 3.5cm、厚さ 2.9cm。5 は器具材または施設材の不明品で、両端を欠損している。一方の幅がすぼまり、長方形の孔があけられている。幅 6.3cm、厚さ 3.8cm。6 は器具材の不明品であるが、木栓の可能性がある。端から 3cm のところまで両側面をカットし、そこから先端に向けて少しずつ細くなり、先端は丸い。断面は梢円形である。長さ 12.6cm、幅 3.0cm、厚さ 2.0cm。7 は杭先で、両端を欠損している。径 2.9～3.5cm。

### ② 6 区出土遺物（第 38 図）

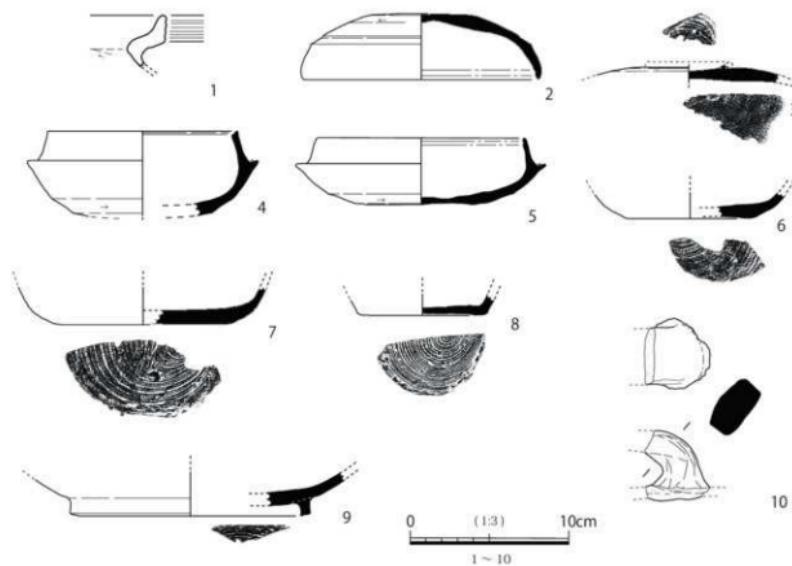
5 区との間の芦類が混じる灰色粘質土（7 層）から出土したもの（第 38 図 4～6）と、自然流路 NRO3 北端付近から北に広がる灰色粘質土（10、11 層）を中心に出土したもの（上記以外）がある。

第 38 図 1 は弥生土器の甕口縁部の小さな破片である。複合口縁には 3 条の凹線がめぐり、頸部に

は煤が残る。2～10は須恵器である。2は蓋で、肩部外面には緩い削り出し状の突出と沈線1条がめぐり、天井部は丁寧な回転ヘラケズリで、口縁端部内面には断面U字状の浅い沈線がめぐる。口縁部の器壁がやや厚い。口径14.6cm、器高4.0cm。3は輪状つまみがつく蓋で、つまみ部はほとんど欠損している。内面にヘラ記号「×」がみられる。4、5是有蓋の壺である。4は、口縁が高く直立気味に立ち上がり、口縁端部内面側は断面U字状の浅い沈線をめぐらせて段状となしている。底部外面は丁寧な回転ヘラケズリである。口径11.7cm、受部径14.2cm。5は口縁がやや低いあまり内傾せず、口縁端部内面には沈線がめぐる。底部外面は丁寧な回転ヘラケズリで、自然軸がかかる。口径12.9cm、受部径15.4cm、器高4.1cm。6～8は無高台の壺である。6、7は、底部外面が糸切で、器壁は丸味を帯びて立ち上がる。6は底径7.9cm。7は底径11.0cm。8は、底部外面が糸切で、器壁が直線的に立ち上がる。底径8.0cm。9は高台付皿である。底は糸切で、その上に高台を振り付けている。底径14.7cm。10は平瓶の把手の付け根部分である。把手断面は長方形で、幅3.6cm、厚さ1.6cm。11は石器、石錘である。やや不整形な丸味を帯びた石の両端に抉りがある。縦横ともに7.2cm、厚さ2.8cm、重量186.4g。



第37図 5区遺物包含層出土遺物



第38図 6区遺物包含層出土遺物

## 第3章 註

(1) 本文中では説明していないが、第49図のとおり、X= -57015.0とY=72700.0を起点として北西へ一辺5mのメッシュを組んでいる。基点をA1として、西へアルファベット(A~D)、北へアラビア数字(1~35)を与えている。

(2) NX01、NR01とも自然地形である。遺物が出土しないこと、埋土が硬く締まっていることから基盤層と捉えた。以下で概略を説明しておく。

**NX01** 2区南端付近で南に向けて緩やかに下がる落ち込みで、東壁では3層に分層できた。1区北端に続いて旧河道路 NR01を南端とするが、1区では2区につながる層が確認できなかった。1区では底の一帯に1cm程度の薄い小石層が見られ、その上に小枝等の有機質の沈殿が3cm前後堆積していた。その上には有機質が粘土に溶け込んだような淡褐色粘土1層堆積するだけで、厚さは50cm程度である。底の直上に小石層がみられたことから当初は自然流路であったものが、有機質の沈殿する沼のような、流れがない灘みに変わったものと思われる。

**NR01** SX01の南端に位置している。南側は白色粘土(地山)上面、北側はSX01埋土上面から下がっているので、NX01埋没後にできた自然流路である。南北幅約2m、深さ75~80cmを測り、東西方向に流れている。

流路断面はU字状を呈し、底部には1cm程度の薄い小石層があり、小枝などの有機質を多量に含んでいた。小石層の上には有機質を多く含む灰褐色粘質土系の土層が弓状に自然堆積しており、大部分の層には有機質が多く混じっていた。有機質はいずれも小枝程度のもので、大きなものは見受けられなかつた。埋土は硬くしまっており、第3節で述べた河道路の堆積土の硬さとは大きく異なる。

(3) 平石充氏(島根県教育庁古代文化センター専門研究員)からご教示を受けた。7~8世紀に使用された則天文字で、漢字の「地」と同義語である。島根県内では、国府跡宮の後地区出土例に統いて2例目となる。

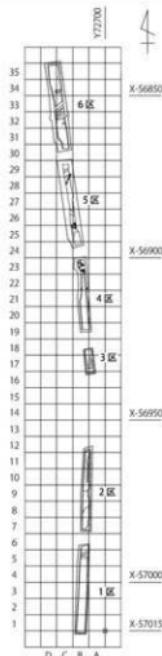
(4) SX02は本来であれば遺物出土状況で取り扱うものであるが、裏3点が川辺で原位置を保つには何らかの施設があった可能性が高く、便宜上、遺構の中で取り扱っている。

(5) 樹種同定は行っていないが、目視で判断した。

(6) (5)と同じ。

(7) 直線距離にして約6km東にある石田遺跡から堅竹の製品が出土している。節帯が付かないタイプで、その法量は全長92.1cm、掲き部径10.5~12.6cmで、本遺跡出土の未成品との法量間に矛盾はない。(松江市教育委員会・財团法人松江市教育文化振興事業団『松江西部2期地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う石田遺跡発掘調査報告書』2004年)

(8) (5)と同じ。



第39図

グリッド配置図

## 第4章 総括

広垣遺跡は島根半島から宍道湖に向け南流する西長江川の右岸水田中に位置している。今回の調査は、丘陵に沿って走る南北道路の拡幅工事に伴うものであり、水田と丘陵の変換点に狭長なトレンチを入れた格好になった。調査区の南側は圃場整備により地山まで削られた状況であったが、北側からは埋没河川を検出し、埋土中から多数の遺物を検出するとともに川辺で営まれた人々の生活の一端を窺い知ることができた。以下では今回の調査成果を要約記述するとともに、地域の歴史の中での位置づけや課題を整理しまとめたい。

今回の調査では、土坑1基（SK01）、杭列2本（SA01、02）、置き甕1か所（SX02）、足場状の遺構1か所（SX01）を検出した。また、自然流路3本（NR01～03）を検出しているが、NR01は遺物を含まず埋土も硬く締まったものであった。基盤層と同程度の時期のものと考えており、説明は割愛する。NR02、03は埋土から古墳時代中～後期の遺物が出土する。NR02はその切り合いから更に5時期に細分をおこなった。新旧関係については⑦ NR02-A → NR02-D → NR02-E、⑧ NR02-B → NR02-Cとなり、⑦と⑧は切り合わない。

以下では出土遺物の時期から遺構と河川の変遷をたどってみたい。最も古い遺構は土坑SK01で、古墳時代中期後半のものであり、土器の形態や組成からNR03、NR02-Aがほぼ同時期の流路と考えられる（第40図）。SK01は土坑内から土師器の高环や小型丸底甕が並べられたような状態で出土しており、祭祀に関連する遺構の可能性を考えている。また、NR03からは完全に近い土師器の高环や小型丸底甕が出土したほか、鍼などの実用的な木製品に混じって刀形（第28図4）や桃核が多数出土した。SK01の存在からも、この流路周辺で祭祀がおこなわれていた可能性が高いと考えられる。本遺跡から約5km東の松江市浜佐田町に所在する石田遺跡では、古墳時代中期に湧水地で水辺の祭祀がおこなわれており、祭祀色の濃い遺物のほかに使い古された木製農具も出土したと報告されており、松江市八雲町に所在する前田遺跡では、和琴などの祭祀遺物に混じって木製品の欠損品や未製品も出土している<sup>(2)</sup>。農具などの実用品が混入することは他の場所でも見られることから、当遺跡の場合もこれと同様の事象と考えることができよう<sup>(3)</sup>。

NR03とNR02-Aの関係について触れると、NR03の堆積土は大半が粘質土であり、常に水が流れている河道ではない。これに対し、NR02-Aの堆積土は大半が砂や砂質土で、ある程度の勢いをもって水が流れているはずである。したがって、この2本は同時期に存在する別々の流路であったと思われる。また、NR02-Bについても堆積土の大半が砂質土であることから、NR03とは別の流路と捉えている。

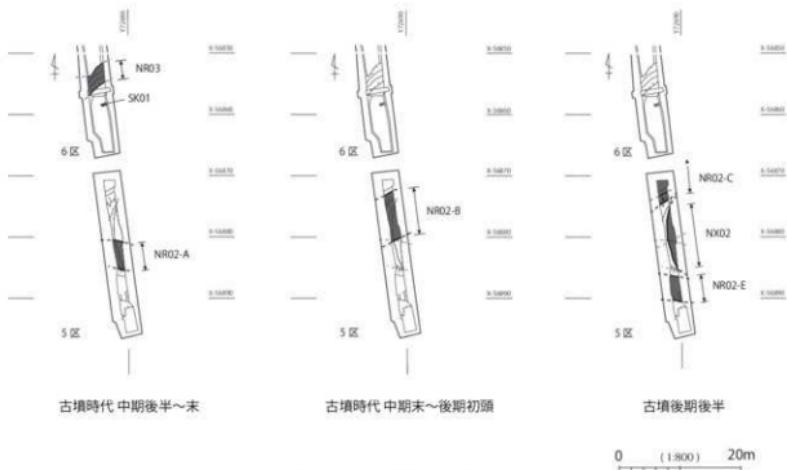
続く段階がNR02-Bが流れる段階である（第40図）。出土遺物から古墳時代中期末～後期初頭に位置付けられる。NR02-Bの北岸にあたる場所では、河道に並行する格好で杭列SA02が打ち込まれており、横板などとともに護岸を補強したものと判断できる。特筆すべき遺構にSX02があり、岸辺と想定される場所から須恵器の大甕1個と土師器の甕2個がまとまって出土した。正位で置かれていたものが土圧で潰れて出土した状況で、水汲み場に置かれた甕といった印象である。便宜的に「置

き張遺構」と呼称しているが、同様の出土状況のものを知らず、使途の結論については類例の増加を待って判断する必要があろう。

次の段階は、NR02-A、B が埋没して NR02-C、E の流れる段階である（第40図）。出土遺物から古墳時代後期後半前葉に位置づけられる。遺物を詳細に観察すると、NR02-C から出土したものに古墳時代後期前半のものがみられるが、流路からの出土であることを考慮すると同時期と考えて問題はない。また、2つの河道の流路方向及び堆積土の面でも矛盾がみられないことから、NR02-C は西で屈曲して NR02-E につながる同一の流路と推察する。NR02-E の下層では、流路と直行する格好で打ち込まれた杭列 SA01 を検出した。水を堰き止めるための施設などの可能性がある。

このほか、興味深い自然地形に NX02 がある。蛇行する河川が河道を変えた際に旧河道が取り残されてできる三日月湖（川跡湖）や、河川が氾濫した後の湿地のようなものと考えている。NR02-E と同じ時期の土器が出土したことから、NR02-C、E と同時に存在し、屈曲する川の内側に湿地が広がる光景があったようだ。

広垣遺跡の北側においては 5世紀後半から 6世紀後半の約 1世紀にわたって河川が流れ込んでいたが、奈良時代には河川は完全に埋没した状況にあり、おそらくは水田として活用されていたと思われる。今回の調査では水田畦畔など直接水田の存在を示す遺構は検出しておらず、自然科学的な分析を行っていないためプランツオパール等の存在もわからない。ただし、第3章第3節で記したように、4区の地山上面では擾乱を確認しており、水田耕作に伴う土層の乱れの可能性も考えている。NR02-D、E から南にかけての上層では、自然木や破損した木製品が投げ込まれたような状況で大量に出土した。また、SX01 は打設した杭の周辺に丸太材が並べられた遺構である。これらは軟弱な地盤の上の歩行を助けるための足場のように見える。広垣地区の西長江川流域で水田遺構が検出さ



第40図 遺構・河道変遷図

れる時は近いかもしれない。

このように、自然流路と湿地を通して水辺で営まれた人々の生活の一端を概観した。ここで、当遺跡に遺構や遺物を残した人々の集落の場所について触れておく。この辺りでは西側の丘陵に散布地M9遺跡が周知されていることや、地形から推察しても西側丘陵の東向き緩斜面に集落が位置していたと考えられる。本遺跡で出土した土器には型式が途切れないことから、集落は古墳時代中期後半から後期後半前葉まで連続と続いている。ところが、本遺跡では後期末葉の遺物がほとんど出土しておらず、集落全体が移転した可能性を指摘できよう。再び遺物が出土するのは奈良時代以降であり、平安時代の遺物も出土している。

次に遺物について詳しくみていきたい。

まず、SK01 から土師器の高环（环部）と小型丸底壺 5 点が出土しており、古墳時代中期の一括出土遺物として貴重である（第 15、16 図）。

旧河道部の NR03 からは古墳時代中期後半の土器、石器、木製品が大量に出土している（第 25～28 図）。土器は全て土師器で、器種には高环や小型丸底壺、甕があり、甕には痕跡的にまで退化した複合口縁と単純口縁の両方が存在し、土器は完形に近い大きめの破片が多いことに特徴がみられた。石器は欠損した砥石 2 点があり、うち 1 点に線刻が認められた（第 27 図 3）。線刻で表現された三角形が向かい合う文様は、松江市東津田町と矢田町の町境に所在する石屋古墳から出土した、人物埴輪の手の甲 2 点に描かれた文様に類例が見られる（第 41 図）。当時の一般的なモチーフの 1 つであったのかもしれない。木製品は鍛や田下駄のほか刀形が出土しており、祭祀的な要素がうかがえる。

NR02-A からは、NR03 と同時期の土師器が少量出土した（第 24 図）。

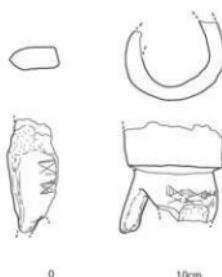
NR02-B からは古墳時代中期～後期初頭の土器と木製品が出土し、土器は大量の土師器と少數の須恵器があり、土師器の器種には壺、高环、小型丸底壺、甕、須恵器の器種には蓋と甕がみられた（第 29、30 図）。SX01 の甕 3 点は当該期の一括出土遺物として貴重である（第 20～22 図）。

NR02-C、E からは古墳時代後期後半前葉の土器と木製品が出土した（第 32～34 図）。土器は土師器と須恵器があり、土師器の器種には高环と甕、須恵器の器種には蓋環と有蓋高环（环部）がみられた。木製品は田下駄の横板のほか、曲物やヘラ状工具が出土した。

ヘラ状工具は形状や使用に伴う変色の状況、先端部の擦痕から調理用の道具と推定される。

NX02 からは古墳時代後期後半前葉の土器と木製品が出土した（第 36 図）。土器には土師器の甕と須恵器の蓋環があり、木製品はヘラ状工具と横柾のほか、竖杵の未製品が出土した。竖杵の未製品は丸太材を 4 分割して成形をおこなっているもので、製作過程がわかる好資料である。

遺物包含層から出土した遺物には、縄文～平安時代の幅広い時期の遺物がみられる（第 37、38 図）が、大半は古墳時代中期以降のものである。6 世紀末～7 世紀代の遺物は出土していないが、



(松江市教育委員会「史跡石屋古墳」1985 年の測量図を一部改変、再トレスして転載)

第 41 図 岩屋古墳出土埴輪

奈良時代以降の土器は少量ながらも出土している。注目すべき遺物に墨書き土器があり、それは9世紀の須恵器の皿の底部外面に「牢」と書かれたものである（第6図7）。圃場整備時の盛土から出土したもので、周囲に平安時代の遺跡が存在することを示している。

以上、今回の調査では、土坑SK01と河道NRO3で古墳時代中期後半の祭祀の可能性を検出した。立地状況から、水辺の祭祀跡と考えていいだろう。また、河道NRO2、湿地NX02では古墳時代中期～後期後半前葉における、人々と流路の関わり、水辺での生活を窺い知ることができた。流路埋没後の奈良時代以降には、湿地に歩きやすい工夫が施されており、水田造構そのものは検出できなかつたが、水田耕作をおこなっていた可能性が考えられた。狹長な調査区ではあったが、西長江町広垣地区において新たな歴史を掘り起こすことができた。特に、西長江町において古墳時代中期の遺跡が明らかにできたことは今回が初めてであり、大きな成果であった。古墳時代中期は穴道湖を取り囲むように首長が削拠し、規模の大きい古墳が点々と造られた時代であり、当遺跡の東には第1章で述べたとおり古曾志大塚古墳群や丹花庵古墳、古曾志大谷古墳群などが築かれている。当然、古墳の規模や数に見合った集落や水田跡も数多く存在していたはずなのだが、それについては未だ明らかにはなされていない。当該期の首長が基盤とした、地域と社会のあり方を解明することが出雲国の古墳時代中期の大きな課題の1つである。今後さらに資料が増加することを期待したい。

## 第4章 註

- (1) 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団『松江西部2期地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う石田遺跡発掘調査報告書』2004年
- (2) 島根県八雲村教育委員会『前田遺跡（第II調査区）』2001年
- (3) 中川寧「出雲の首長と祭祀－島根県前田遺跡の木製品の検討－」（立命館大学考古学論集刊行会『立命館大学考古学論集V』2010年）の中で、（前田遺跡出土の木製品を分類して）木製品には、「祭祀具」として扱うことのできる刀形や琴だけではなく、土木掘削具や紡織具など多様な種類の木製品があるとし、穂積裕昌氏が提唱する祭祀に供された遺物の分類に前田遺跡出土の木製品をあてはめ、A「奉仕品」に曲柄平鍬を分類している。
- (4) 松江市教育委員会『史跡石屋古墳』1985年

## 土器

標識番号	種類	器種	法量㎤	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	残存	備考
6-1	須恵器	盃	つまみ径 2.3	微砂粒含む	良	外:灰褐色 内:灰白色	外:回転ナデ 内:ナデ	つまみ部 100%	宝珠状つまみ
6-2	須恵器	坪	底径 6.86	1-2mm前後の砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰白色	外:回転ナデ、回転系痕 内:回転ナデ後不定方向のナデ	底部 50%	
6-3	須恵器	高台付坪	口径(13.0) 底径(8.9) 高さ(4.2)	1mm前後の長石・石英含む	軟質	外:灰褐色 内:灰白色	外:回転ナデ 内:風化著しく不明	20%	
6-4	須恵器	坪	—	微砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰白色	外:ナデ 内:ナデ	口縁部 5%	
6-5	須恵器	高台付皿	—	微砂粒若干含む	軟質	外:灰白色 内:灰白色	外:回転ナデ、回転系痕 内:回転ナデ	底部 25%	
6-6	須恵器	皿	—	微砂粒若干含む	軟質	外:灰褐色 内:灰白色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	口縁部 5%	
6-7	須恵器	皿	口径(13.3) 底径(8.6) 高さ(1.5)	微砂粒含む	軟質	外:灰白色 内:灰白色	外:回転ナデ、回転系痕 内:回転ナデ後一定方向のナデ	50%	底部に墨書き「室」
7-1	土師器	高环	口径(20.3)	微砂粒含む	良	外:灰黄色 内:灰黄色	外:ハケメ 内:ナデ	環部 80%	内面に放射状暗文 内面に赤色顔料
7-2	土師器	高环	—	微砂粒含む	良	外:灰黄褐色 内:灰黄褐色	外:横ナデ 内:横ナデ	口縁部 5%	内面に赤色顔料
7-3	土師器	高环	底径(10.1)	1-2mmの砂粒含む	良	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	脚部 70%	
7-4	土師器	高环	底径(10.3)	1-2mmの砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	脚部 70%	
7-5	土師器	高环	底径(9.3)	細かい石英と1mm前後の長石含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ハケメ後ナデ 内:風化著しく不明	脚部 70%	外面に赤色顔料
7-6	土師器	高环	底径(8.0)	1mm前後の砂粒含む	良	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	外:横ナデ 内:ナデ、筒部に絞り痕	脚部 60%	
7-7	土師器	高环	—	1-2mmの砂粒含む	良	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	外:風化著しく不明 内:ナデ、筒部に絞り痕	脚部 100%	
7-8	土師器	甕	口径(18.2)	1mm前後の砂粒含む	良	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	外:横ナデ 内:横ナデ	口縁部 25%	複合口縁
7-9	土師器	甕	口径(11.6)	1-2mmの砂粒含む	良	外:灰褐色 内:灰褐色	外:横ナデ 内:横ナデ	口縁部 10%	複合口縁
7-10	土師器	甕	口径(15.2)	1-2mmの砂粒含む	良	外:灰褐色 内:灰褐色	外:横ナデ、ハケメ 内:横ナデ、ケズリ	口縁部 10%	複合口縁
7-11	土師器	甕	口径(15.0)	1mm前後の砂粒含む	良	外:浅褐色 内:浅褐色	外:横ナデ 内:横ナデ	口縁部 10%	複合口縁 外面上に擦付着
7-12	土師器	甕	口径(16.8)	1mm前後の砂粒含む	良	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	外:ハケメ後ナデ 内:横ナデ、ケズリ、ハケメ	口縁部 10%	複合口縁 外面上に擦付着
7-13	土師器	甕	口径(16.3)	1-2mmの砂粒含む	良	外:灰褐色 内:灰褐色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明 ケズリ	口縁部 5%	複合口縁 外面上に擦付着
7-14	土師器	甕	口径(18.6)	微砂粒含む	良	外:灰褐色 内:灰褐色	外:横ナデ 内:横ナデ、ケズリ	口縁部 10%	複合口縁
7-15	土師器	甕	口径(19.2)	1-2mmの砂粒多く含む	良	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	口縁部 5%	複合口縁
7-16	土師器	甕	—	1-2mmの砂粒含む	良	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	外:横ナデ 内:横ナデ、ケズリ	口縁部 5%	複合口縁
7-17	土師器	甕	口径(12.4) 底径(10.0)	1mm前後の砂粒多く含む	良	外:にない黄褐色 内:にない黄褐色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明 ケズリ	口縁部 10%	外面上に擦付着 複合口縁
7-18	土師器	甕	口径(12.8) 底径(9.9)	1mm前後の砂粒含む	良	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	外:横ナデ 内:ケズリ	口縁部 10%	複合口縁 外面上に擦付着
7-19	土師器	甕	口径(17.8) 底径(15.3)	1-2mmの砂粒含む	良	外:にない黄褐色 内:にない黄褐色	外:横ナデ 内:横ナデ、ケズリ	口縁部 10%	複合口縁
8-1	土製品	電	受部径(27.8)	1mm前後の砂粒含む	良	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	外:横ナデ 内:ナデ、ケズリ	受部 25%	内面上に擦付着
8-2	土製品	電	—	1mm前後の砂粒含む	良	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	外:ナデ 内:ナデ	—	内面上に被熱変色
8-3	土製品	電	幅(3.4)	1-2mmの砂粒含む	良	外:黄色 内:灰黄色	外:ナデ 内:ナデ、ケズリ	—	内面上に被熱変色
8-4	土製品	電	幅(3.4)	1mm前後の砂粒含む	良	外:灰黄色 内:灰黄色	外:ナデ 内:ナデ、ケズリ	—	内面上に被熱変色
8-5	土製品	電	高さ(3.0)	1-2mmの砂粒含む	良	外:灰黄色 内:灰黄色	外:ナデ 内:ナデ	—	内面上に被熱変色
8-6	土製品	電	高さ(3.3)	微砂粒含む	良	外:灰黄色 内:灰黄色	外:ナデ 内:ナデ	—	内面上に被熱変色

遺物観察表

採集番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	残存	備考
8-7	土製品	竈	高さ(2.4)	1mm前後の砂粒含む	良	外:浅黄色 内:浅黄色	外:ナデ 内:ナデ	—	
8-8	土製品	竈	—	微砂粒含む	良	外:淡黄色 内:浅黄色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	—	内面に被熱変色 脚の把手か
8-9	土製品	竈	高さ(4.2)	1-2mmの砂粒含む	良	外:浅黄色 内:浅黄色	外:ナデ 内:ナデ	—	内面に被熱変色
8-10	土製品	竈	高さ(3.3)	微砂粒含む	良	外:浅黄色 内:浅黄色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	—	内面に被熱変色
8-11	土製品	引口	—	1mm前後の砂粒含む	良	外:灰色 内:灰色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	—	外面上にガラス質の付着物
9-1	須恵器	蓋	口径(14.4) 底径 3.7	微砂粒含む	良	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	30%	
9-2	須恵器	蓋	つまみ径 6.0	微砂粒含む	■■■	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	つまみ部 50%	輪状つまみ
9-3	須恵器	蓋	つまみ部 2.5	微砂粒含む	良	外:灰色 内:灰色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	つまみ部 100%	宝珠状つまみ
9-4	須恵器	蓋	つまみ径 2.5	微砂粒含む	秋葉質	外:灰白色 内:灰色	外:ナデ 内:ナデ	つまみ部 100%	宝珠状つまみ
9-5	須恵器	蓋	つまみ径 2.3	微砂粒含む	■■■	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ 内:回転ナデ後不定方向ナデ	つまみ部 80%	宝珠状つまみ
9-6	須恵器	片	受部径 13.7	微砂粒含む	良	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、ナデ	40%	
9-7	須恵器	片	—	微砂粒含む	■■■	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	口縁部 25%	
9-8	須恵器	片	—	1mm前後の砂粒含む	■■■	外:灰色 内:明灰色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	口縁部 20%	
9-9	須恵器	片	—	微砂粒を少量含む	■■■	外:明灰色 内:明灰色	外:回転ナデ 内:回転ナデ	口縁部 5%	
9-10	須恵器	片	口径(14.5) 底径(10.0) 高さ 3.1	微砂粒含む	良	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ 内:回転ナデ	5%	
9-11	須恵器	高台付皿	底径(10.0)	1-2mmの砂粒含む	良	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ 内:回転ナデ後不定方向ナデ	底部 90%	
9-12	須恵器	高环	—	微砂粒含む	■■■	外:灰色 内:灰色	外:ナデ、ケズリ 内:ナデ	脚部 5%	外面に波状文
9-13	須恵器	高环	底径(9.7)	微砂粒含む	■■■	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ、カキメ 内:回転ナデ	脚部 5%	
9-14	須恵器	高环	—	1mm前後の砂粒含む	■■■	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ、ケズリ 内:回転ナデ	30%	方形透かし 3 方向
9-15	須恵器	高环	底径(12.0)	泄	■■■	外:黄褐色 内:黄褐色	外:回転ナデ 内:ナデ	脚部 20%	方形透かし
9-16	須恵器	不明	底径(9.3) 孔径 1.2	微砂粒含む	■■■	外:オーリーブ黒色 内:灰色	外:回転ナデ 内:回転ナデ	脚部 50%	円形透かし 4 方向
9-17	須恵器	甕	口径(21.2)	微砂粒若干含む	■■■	外:灰色 内:灰色	外:タタキ後回転ナデ 内:回転ナデ	口縁部 15%	内面に灰被り
9-18	須恵器	甕	—	1mm前後の砂粒含む	■■■	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ 内:回転ナデ	口縁部 5%	外面に波状文、沈痕
12-1	土師器	甕	—	1mm前後の砂粒多く含む	良	外:浅黄色 内:浅黄色	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	口縁 5%	複合口縁
12-2	土師器	甕	口径(18.0)	1-2mmの砂粒多く含む	良	外:浅黄色 内:浅黄色	外:横ナデ 内:横ナデ、ケズリ	口縁 5%	單純口縁 外面に保付着
12-3	須恵器	片	—	微砂粒含む	■■■	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ 内:回転ナデ	口縁 5%	
12-4	須恵器	片	—	微砂粒含む	良	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ、回転熱切削 内:回転ナデ後不定方向ナデ	底部 20%	
12-5	須恵器	高台付片	底径(7.2)	微砂粒含む	■■■	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ、回転熱切削 内:回転ナデ 内:回転ナデ後不定方向ナデ	底部 30%	
12-6	須恵器	甕	—	微砂粒含む	秋葉質	外:灰色 内:灰白色	外:タタキ 内:タタキ	脚部 5%	
16-1	土師器	高环	口径 24.4	1-2mm程度の砂粒含む	良	外:黄褐色 内:黄褐色	外:ナデ、ハケメ、ヘラミガキ 内:陶化著しく不明	底部 90%	外面に斜めの暗文
16-2	土師器	小甕 丸底甕	口径 7.3 底径 6.0 体部径 8.5	1-2mm程度の長石・石英 含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ、横ナデ、指捺痕	95%	

標識番号	種類	基準	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	現存	備考
16-3	土師器	小型 丸底壺	径径 5.4 体部径 9.0 高さ 6.2	1~2mmの長石・石英含む	良	外:灰黄色 内:灰白色	外:褐色ナデ、ナデ、ハケメ 内:ナデ	脚部 60%	
16-4	土師器	小型 丸底壺	径径 8.6 体部径 13.6 高さ 11.3	1mm程度の砂粒含む	良	外:淡黄色 内:淡黄色	外:ハケメ 内:ケズリ後ナデ	90%	
16-5	土師器	脚付小型 丸底壺	口径 9.2 脚径 8.0 体部径 12.0 高さ 8.9 器高 12.8	1mm程度の砂粒含む	良	外:灰白色 内:灰白色	外:ナデ、ハケメ、指添正直 内:ナデ、工具ナデ、ケズリ	80%	
16-6	土師器	小壺	—	微砂粒含む	良	外:浅黄色 内:浅黄色	外:ナデ、ハケメ 内:指添正直	口縁~脚部 10%	
21-1	土師器	甕	径径 15.8 体部径 26.2	1~2mmの砂粒含む	良	外:灰黄色 内:灰黄色	外:ハケメ後ナデ、ハケメ 内:ナデ、ケズリ、指添正直	70%	外面に煤付着
21-2	土師器	甕	口径 20.3 脚径 18.2 体部径 30.9	微砂粒含む	良	外:浅黄色 内:浅黄色	外:ナデ、ハケメ 内:ナデ、ケズリ	90%	外面に煤付着
22	遺物器	甕	口径 37.9 脚径 26.2 体部径 66.1 器高 75.0	1mm前後の砂粒含む	堅強	外:灰色 内:灰色	外:回転ナデ、タタキ後ナデ、 ハケメ 内:静止ナデ、タタキ後ナデ	80%	外面に波状文、沈線
23-1	土師器	高杯	底径 9.8	微砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ、ミガキ、ハケメ 内:シボリ後横ナデ、ハケメ	脚部 5%	外面に赤色顔料
23-2	土師器	甕	口径 (14.4) 脚径 (12.4) 体部径 (15.0)	微砂粒含む	良	外:黑色 内:灰黑色	外:ナデ、ハケメ 内:ハケメ後ナデ、ケズリ、 ハケメ	口縁~脚部 40%	外面に煤付着
23-3	土師器	甕	口径 (16.9)	1~2mm前後の砂粒含む	良	外:灰黄色 内:灰黄色	外:褐色ナデ 内:褐色ナデ	口縁部 25%	外面に煤付着
23-4	土師器	甕	口径 (16.7) 脚径 (13.3)	1mm前後の砂粒含む	良	外:浅黄色 内:浅黄色	外:褐色ナデ、ハケメ 内:褐色ナデ、ケズリ	口縁~肩部 25%	
24-1	土師器	高杯	口径 (10.1)	1mm前後の砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:回転ナデ、ハケ先の押し 当て 内:回転ナデ	環部 70%	内外面に赤色顔料
24-2	土師器	甕	口径 (13.2) 脚径 (10.2)	微砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:回転ナデ、ハケ先の押し 当て 内:回転ナデ	口縁部 20%	外面に煤付着
24-3	土師器	甕	口径 (16.7) 脚径 (12.8) 体部径 (27.4)	2mm以下の砂粒含む	良	外:灰白色 内:暗赤褐色	外:ナデ、ハケメ後ナデ 内:ナデ、ケズリ	40%	外面に煤付着
25-1	土師器	底脚付	口径 (14.7) 底径 (11.2) 器高 11.2	微砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ、燒ナデ、粘土膜目 内:表面の荒れが美しい、 シボリ後ナデ	40%	
25-2	土師器	高杯	口径 (15.4)	1~2mmの長石と細かい 石英含む	良	外:赤褐色 内:赤褐色	外:褐色ナデ、ハケメ 内:褐色ナデ、不定方向のナデ	40%	
25-3	土師器	高杯	口径 18.1	細かい長石・石英含む	良	外:灰白色 内:灰白色	外:褐色ナデ、ハケメ 内:褐色ナデ	50%	外面に赤色顔料
25-4	土師器	高杯	口径 17.2	微砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ 内:ナデ	环部 80%	
25-5	土師器	高杯	底径 10.0	細かい石英と 1~2mm 程度の砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:褐色ナデ、ハケメ後端ナデ 内:ナデ、シボリ後ケズリ、 ハケメ	30%	
25-6	土師器	高杯	底径 8.5	細かい長石・石英含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ一部ハケメ、ハケメ 内:ナデ	30%	内外面に赤色顔料
25-7	土師器	高杯	底径 9.2	1mm前後の砂粒含む	良	外:赤褐色 内:赤褐色	外:ミガキ、楢化著しい 内:シボリ、楢化著しい	脚部 80%	
25-8	土師器	高杯	底径 10.2	微砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ一部にミガキ 内:シボリ、楢化著しい	30%	
25-9	土師器	高杯	底径 10.4	細かい長石・石英含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ、ケズリ	脚部 90%	
25-10	土師器	高杯	底径 (9.3)	微砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ、ケズリ	脚部 80%	
25-11	土師器	高杯	底径 10.4 孔径 0.9	微砂粒含む	良	外:浅粉色 内:浅粉色	外:褐色ナデ、ハケメ後ミガキ 内:シボリ、ハケメ	脚部 70%	円形透かし 3 方向
25-12	土師器	高杯	底径 13.6 孔径 1.2	1~3mmの砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ、ケズリ	脚部 40%	円形透かし 3 方向
25-13	土師器	高杯	底径 12.0 孔径 0.8	1mm前後の砂粒含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ、ハケメ後ミガキ 内:シボリ後ケズリ、ハケメ	脚部 60%	円形透かし 3 方向
25-14	土師器	底脚付	口径 16.6 底径 11.5 器高 7.0	細かい長石・石英含む	良	外:褐色 内:褐色	外:ナデ 内:ナデ、ハケメ	90%	内外面に放射状暗文

遺物観察表

採取番号	種類	器種	法量 (cm)	断土	構成	色調	調整・手法の特徴	残存	備考
25-15	土師器	丸底壺	口径 5.2 底径 8.7	細かい石片・2mm前後の長石含む	良 外 内	褐色 褐色	外 内 ハケメが一部残る ナデ、ケズリ	90%	全面に保付着
25-16	土師器	小型丸底壺	口径 (5.6) 底径 (9.1)	1~2mm程度の砂粒含む	良 外 内	褐色 にぶい黄褐色	外 内 ハケメが一部残る ナデ、ケズリ	80%	
25-17	土師器	甕	口径 (10.4) 底径 (8.4)	1mm前後の砂粒含む	良 外 内	浅黄色 浅黄色	外 内 構ナデ、ハケメ 構ナデ、ハケメ、指酒注瓶	口縁～肩 30%	外面に保付着
25-18	土師器	甕	口径 (6.0)	1~2mmの砂粒含む	良 外 内	灰黄～灰色 灰黄～灰色	外 内 ナデ、ハケメ ナデ	高台部 70%	
25-19	土師器	甕	口径 (8.1)	1~2mmの砂粒含む	良 外 内	にぶい褐色 にぶい褐色	外 内 ナデ ナデ	高台部 30%	
26-1	土師器	甕	口径 16.8 底径 13.9 体部径 27.9 基高 28.6	2mm前後長石・石英含む	良 外 内	浅黄色 浅黄色	外 内 構ナデ、ハケメ後ナデ ナデ、構ナデ	80%	外面側面に保付着 前面口縁に保付着
26-2	土師器	甕	口径 (17.1) 底径 (14.0)	1~2mmの砂粒含む	良 外 内	灰黄色 灰黄色	外 内 ナデ、ハケメ ナデ、ケズリ	20%	
26-3	土師器	甕	口径 (17.8) 底径 (15.4)	1~3mm程度の砂粒含む	良 外 内	にぶい褐色 にぶい褐色	外 内 構ナデ、ケズリ	口縁～肩 40%	外面に保付着
29-1	骨生入器	甕	—	1~2mmの砂粒含む	良 外 内	灰黄色 灰黄色	外 内 風化著しく不明 風化著しく不明	口縁部 5%	複合口縁 外面に複数個、保付着
29-2	土師器	甕	口径 (15.6) 底径 4.9	1mm前後の砂粒含む	良 外 内	明赤褐色 明赤褐色	外 内 ナデ、ケズリ ナデ	50%	内外面に赤色顔料
29-3	土師器	高杯	口径 16.0 底径 9.1 基高 11.1	1mm前後の砂粒含む	良 外 内	褐色 褐色	外 内 ナデ、構ナデ、ケズリ ナデ、シボリ	80%	
29-4	土師器	高杯	口径 (15.5) 底径 9.4 基高 10.9	微砂粒含む	良 外 内	褐色 褐色	外 内 ナデ、構ナデ、ケズリ、 ハケメ ハケメ	70%	外面に放射状皱纹、 化粧土残る 布目有
29-5	土師器	高杯	口径 (15.0)	1mm前後の砂粒含む	良 外 内	褐色 褐色	外 内 ハケメ 風化著しく不明	縁部 50%	外面に斜線状暗文
29-6	土師器	高杯	口径 (10.0)	微砂粒含む	良 外 内	褐色 褐色	外 内 ハケメ後ナデ ナデ、シボリ後ケズリ	縁部 70%	外面に赤色顔料、暗文
29-7	土師器	高杯	底径 9.7 底径 1.2	微砂粒含む	良 外 内	褐色 褐色	外 内 一部ハケメ残る ナデ、シボリ後ケズリ	縁部 100%	円形透かし 3 方向
29-8	土師器	高杯	底径 (8.8) 底径 0.7	1mm前後の砂粒含む	良 外 内	浅黄色 浅黄色	外 内 風化著しく不明 シボリ後ナデ	縁部 80%	円形透かし 2 方向
29-9	土師器	小型丸底壺	口径 (8.7) 底径 (5.0) 体部径 (8.3)	微砂粒含む	良 外 内	褐色 褐色	外 内 一部ハケメ残る ナデ、ケズリ	30%	
29-10	土師器	小型丸底壺	口径 (5.5) 底径 (5.0) 体部径 (8.2) 基高 7.6	微砂粒含む	良 外 内	浅黄色 浅黄色	外 内 ハケメ後ナデ 構ナデ、シボリ後ナデ、 指酒注瓶、粘土貼り付け痕	45%	
29-11	土師器	小型丸底壺	口径 5.6 底径 4.9 体部径 8.0 基高 7.2	微砂粒含む	良 外 内	褐色 褐色	外 内 ハケメ後ナデ ナデ	90%	
29-12	土師器	手型	口径 3.9 基高 2.5	微砂粒含む	良 外 内	灰褐色 灰褐色	外 内 ナデ、布目残る	100%	
29-13	土師器	甕	口径 (20.4) 底径 (14.6)	1mm前後の砂粒含む	良 外 内	浅黄色 浅黄色	外 内 ナデ、ハケメ後ナデ、 ナデ、ケズリ、ハケメ	口縁～肩 80%	單純口縁 外面に保付着
29-14	土師器	甕	口径 (19.1) 底径 (15.7) 体部径 (27.4)	1mm前後の砂粒含む	良 外 内	にぶい黄色 浅黄色	外 内 ナデ、ハケメ後ナデ、 ナデ、ケズリ	70%	單純口縁 外面に保付着 器皿は被熱変色
30-1	須恵器	蓋	口径 (13.9)	1~2mmの砂粒含む	堅緻	外 内 灰色 灰色	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ	15%	
30-2	須恵器	蓋	口径 (13.6)	—	堅緻	外 内 灰色 灰白色	外 内 風化が著しく不明 回転ナデ	15%	外面に自然歯
32-1	土師器	高杯	口径 (19.7)	1mm前後の砂粒含む	良 外 内	赤褐色 赤褐色	外 内 ナデ、ハケメ ハケメ後ナデ、シボリ	20%	外面に赤色顔料
32-2	土師器	高杯	底径 10.3	微砂粒含む	良 外 内	赤褐色 褐色	外 内 ナデ、ハケメ後ナデ シボリ後ケズリ、ナデ	80%	外面に赤色顔料
32-3	土師器	高杯	—	1mm前後の砂粒含む	良 外 内	赤褐色 褐色	外 内 ナデ、ケズリ	70%	外面に赤色顔料
32-4	土師器	甕	口径 (18.9) 底径 (14.6) 体部径 (20.9)	1~2mm程度の砂粒含む	良 外 内	黄褐色 黄褐色	外 内 ナデ、ハケメ ハケメ後ナデ、ケズリ	口縁～肩 30%	單純口縁 外面に保付着 器皿は被熱変色
32-5	土師器	甕	口径 (19.3) 底径 (16.5)	長石・石英含む	良 外 内	淡黄色 淡黄色	外 内 構ナデ、ケズリ	口縁部 15%	單純口縁
32-6	須恵器	蓋	口径 (13.0)	1mm前後の砂粒含む	軟質	外 内 灰白色 灰白色	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ	15%	

排列番号	種類	器種	法面(cm)	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	残存	備考
32-7	調色器	釜	口径 12.5 器高 3.9	1mm前後の砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	80%	
32-8	調色器	釜	口径 (12.4) 器高 4.4	微砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	55%	肩部外面、口縁内部にU字状の沈線
32-9	調色器	釜	口径 11.4 × 13.3 器高 4.3	1mm前後の砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	90%	側面の凹み有 肩部外面、口縁内部にU字状の沈線
32-10	調色器	釜	口径 12.4 器高 4.5	微砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	98%	肩部外面、口縁内部にU字状の沈線
32-11	調色器	釜	口径 (12.0) 器高 3.2	微砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、 ヘラコロナデ 内:回転ナデ、 回転ナデ後不定方向のナデ	25%	器形の凹み有 肩部外面、口縁内部にU字状の沈線 天井部にヘラ起し痕
32-12	調色器	釜	口径 13.0 器高 4.2	1mm前後の砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	90%	肩部外面、口縁内部にU字状の沈線
32-13	調色器	环	口径 (12.1) 受部径 (14.0)	微砂粒含む	堅緻	外:暗灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、ナデ	40%	外縁にヘラ記号「/」 底部表面に自然跡
32-14	調色器	环	口径 11.6 受部径 14.4	微砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ヘラケズリ後回転ナデ 内:回転ナデ	50%	外縁に反旋り 方形孔から3方向
34-1	土師器	腹	口径 (14.8) 径 (11.3) 体部径 (21.8)	1~2mmの砂粒含む	良	外:淡黄色 内:灰白色	外:構ナデ、ハケメ 内:構ナデ、ケズリ	40%	単純口縁 外縁に擦付着 部位は熟変色
34-2	土師器	腹	口径 (17.0) 径 (15.8) 体部径 (20.0)	後砂粒、2mm程度の砂粒 含む	良	外:褐色 内:ぶい褐色	外:構ナデ、ハケメ 内:構ナデ、ケズリ、 ハケを一巡りさせる	30%	単純口縁 外縁に擦付着
34-3	調色器	釜	口径 13.1 器高 4.3	微砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:暗灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ、 回転ヘラケズリ、 内:回転ナデ 回転ナデ後不定方向ナデ	80%	肩部外面にU字状沈線 天井部にヘラ起し痕
34-4	調色器	环	口径 13.0 受部径 13.2 器高 4.4	1mm前後の砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:暗灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	95%	
36-1	土師器	腹	口径 (26.6) 径 (21.9)	2mm程度の砂粒含む	良	外:淡黄色 内:淡黄色	外:ナデ、ハケメ後ナデ、ハケメ 内:ケズリナデ	30%	単純口縁 外縁に擦付着
36-2	土師器	釜	口径 12.2 器高 4.6	1mm以下の砂粒含む	堅緻	外:青灰色 内:青灰色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、ナデ	90%	肩部外面にU字状の沈線
36-3	調色器	釜	口径 12.0 器高 4.0	微砂粒含む	良	外:灰白色 内:灰白色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、不定方向ナデ	90%	外縁に工具押しだて痕
36-4	調色器	环	口径 13.0 受部径 13.6 器高 3.9	微砂粒含む	良	外:淡黄色 内:白	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	95%	外縁に繩タキ痕 (工具痕)
36-5	調色器	环	口径 (11.3) 受部径 14.2	微砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰白色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	90%	
37-1	土師器	把手	—	1~2mm程度の砂粒多く 含む	良	外:灰白色 内:灰白色	外:ケズリ、ハケメ 内:ケズリ	把手のみ	
37-2	調色器	釜	口径 (12.0) 器高 3.9	1~2mmの砂粒多く含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、不定方向ナデ	30%	肩部外面、口縁内部にU字状の沈線
37-3	調色器	环	口径 (12.4) 底径 6.8 器高 4.2	細かい砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ	40%	外縁にヘラ記号「×」
38-1	骨灰土器	腹	—	微砂粒多く含む	良	外:灰褐色 内:灰褐色	外:ナデ、 内:ナデ、ケズリ	10%	複合口縁、3条糸切 頭部に擦付着
38-2	調色器	釜	口径 (14.6) 底径 6.8 器高 4.0	術	良	外:灰褐色 内:暗灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	40%	外縁に沈線1条 口縁内部に沈線1条
38-3	調色器	釜	—	微砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:ナデ、回転ナデ、 内:ナデ、回転系切痕	15%	輪状つまみ 内縁ヘラ記号「×」
38-4	調色器	环	口径 (11.7) 受部径 (14.2)	1mm前後の長石多く含む	良	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	30%	口縁内部にU字状の沈線
38-5	調色器	环	口径 (12.9) 砂粒含む	砂粒含む	堅緻	外:青灰色 内:青灰色	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	40%	外縁に自然釉 口縁内部に沈線
38-6	調色器	环	底径 (7.9)	1mm前後の砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ、ナデ	25%	底部
38-7	調色器	环	底径 (11.0)	1mm前後の砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:回転ナデ後不定方向ナデ	40%	底部
38-8	調色器	环	底径 (8.0)	微砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:ナデ、回転糸切痕 内:ナデ	50%	底部
38-9	調色器	高台付皿	底径 (14.7)	1mm前後の砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:回転ナデ、回転糸切痕 内:ナデ	10%	底部
38-10	調色器	把手 (平瓶)	幅 3.6 厚 1.6	1~2mmの砂粒含む	堅緻	外:灰褐色 内:灰褐色	外:ケズリ 内:ナデ	30%	把手断面は長方形

## 遺物観察表

## 木 製 品

発掘番号	分類群	器種名	器種細分名 1	器種細分名 2	法 量 (cm)	備 考
12-7	農耕土木具	田下駄	角桙型田下駄	横木	全長 33.5 幅 9.2 厚 2.1	4 × 1.8cm の方形の孔 1 × 0.5cm の小孔
19-1	施設材	溝岸材	杭	—	残存長 34.0 径 4.4	先端部カット面 3 面
19-2	施設材	溝岸材	杭	—	残存長 27.0 径 2.5	先端部カット面 3 面
19-3	施設材	溝岸材	杭	—	残存長 24.6 径 3.2	先端部カット面 2 面
19-4	施設材	溝岸材	杭	—	残存長 23.7 径 3.6	先端部カット面 3 面
19-5	施設材	溝岸材	杭	—	残存長 21.2 径 2.5	先端部カット面 2 面
28-1	農耕土木具	鍬	曲柄鍬身	平鍬	全長 53.5 刃部幅 10.7 厚 1.1	アカガシ垂編
28-2	農耕土木具	鍬	曲柄鍬身	平鍬	残存長 38.2 幅 12.2 厚 1.5	アカガシ垂編
28-3	農耕土木具	田下駄	角桙型田下駄	桟	残存長 22.3 幅 3.1 厚 2.1	
28-4	鍬形	武器	—	—	残存長 6.5 幅 2.1 厚 0.9	
28-5	その他	殘材	—	—	残存長 12.4 幅 4.4 厚 1.6	
28-6	その他	殘材	—	—	残存長 13.1 幅 12.1 厚 2.7	
28-7	施設材	粗野材	杭	—	残存長 16.9 径 3.3-4.5	
28-8	施設材	粗野材	杭	—	残存長 14.4 径 3.5	
33-1	容器	側板	曲物	側板	残存長 12.1 幅 4.4 厚 0.4	上下 2か所に V 字状切り込み有り
33-2	容器	側板	曲物	側板	残存長 9.0 幅 5.0 厚 0.3	上 2か所に V 字状切り込み有り
33-3	器具材	錘	孔有り	—	残存長 22.4 幅 2.6 厚 1.2	端部に直径 1cm の円孔有り 円孔下部に板の痕跡有り
33-4	器具材	不明	段有り	—	残存長 23.0 幅 3.1 厚 1.6	端部 2か所に溝状加工痕有り
33-5	器具材	不明	孔段無し	—	残存長 20.4 幅 3.1 厚 1.6	断面は方形
33-6	鍬形	武器	—	—	幅 4.0 厚 0.7	表面は滑らかに加工
33-7	その他	殘材	—	—	残存長 12.2 幅 4.7 厚 2.7	断面はカマボコ状
33-8	施設材	粗野材	杭	—	残存長 11.8 径 4.0	杭先か
34-5	器具材	不明	—	—	全長 32.6 幅 9.4 厚 1.7	中央部に木釘 1 本
34-6	調理加工具	その他	—	—	残存長 20.6 幅 3.9 厚 0.9	先端部使用痕
34-7	農耕土木具	田下駄	角桙型田下駄	枠	全長 52.8 幅 6.8 厚 2.2	方形の穴 4か所 両側面にコの字状切り込み有り
36-5	農耕土木具	杵	堅杵	杵柄	全長 96.0 磨き部径 16.5-17.2 孔径 2.4-2.7	木製品、磨き部に樹皮残る アカガシ垂編
36-6	調理加工具	その他	—	—	残存長 25.7 幅 3.2 厚 0.8	先端部に使用痕
36-7	工具	鉤	横鉤	—	全長 27.5 錆打身径 9.8-12.0 握り部径 3.0-3.2	鉤打身材、ヤリガシ加工 鉤打部に 2か所使用痕
37-4	器具材	不明	段有り	—	幅 3.5 厚 2.9	断面は方形、端部両側面にコの字 状切り込み有り
37-5	施設材	不明	孔有り	—	残存長 43.9 幅 6.3 厚 3.8	
37-6	日用品	穂	—	—	全長 12.6 径 3.0 厚 2.0	
37-7	施設材・器具材	粗野材	杭	—	残存長 12.0 径 2.9-3.5	

## 石 製 品

発掘番号	種 類	法 量 (cm・g)	石 材	色 調	備 考
6-8	スクレーパー	縦 2.6 横 5.5 厚 1.1 重 13.3	黒曜石	黒	
9-19	砥石	縦 15.6 幅 14.2 厚 5.5 重 700	—	灰白色	使用痕 1 面
9-20	砥石	縦 7.7 幅 7.7 厚 4.1 重 360	—	灰白色	使用痕 1 面
27-1	砥石	縦 13.2 幅 7.7 厚 3.1 重 432.1	—	灰白色	平滑状使用面 2 面
27-2	砥石	縦 12.3 幅 10.9 厚 3.5 重 630	—	明瞭灰色	擦痕状使用痕 1 面
27-3	砥石	縦 9.5 幅 5.2 厚 3.5 重 260	—	灰白色	使用痕 4 面・綴割有り
27-4	剥片	縦 3.5 幅 3.9 厚 0.7 重 8	碧玉	濃緑色	剥片
38-11	石錐	縦 7.2 幅 7.2 厚 2.8 重 186.4	—	明瞭灰色	両端に抉り

# 写 真 図 版

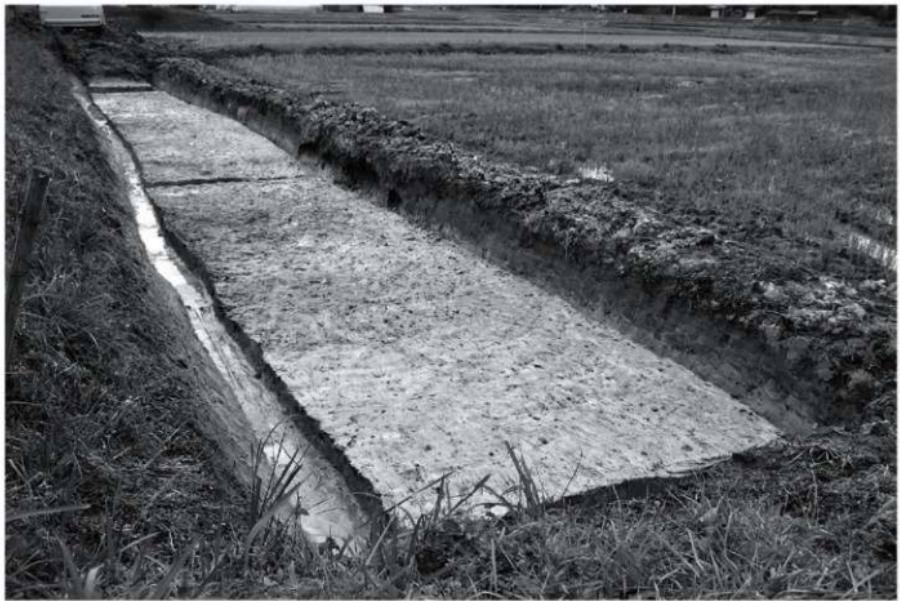


(旧河道部 NR02 作業風景)





調査前風景、手前の水田が 1 区（南西から）



削平された微高地：1 区完掘状況（南西から）

図版 2



削平された微高地：2区完掘状況（南西から）



削平された微高地：3区完掘状況（北から）



削平された微高地、低地部：4 区完掘状況（南西から）



SX01（南から）

図版 4



旧河道部の調査：5 区完掘状況（北西から）



SA01（西から）



SA02 (東から)



SX02 (南から)

図版 6



NX02 の豎柱未製品出土状況（南から）



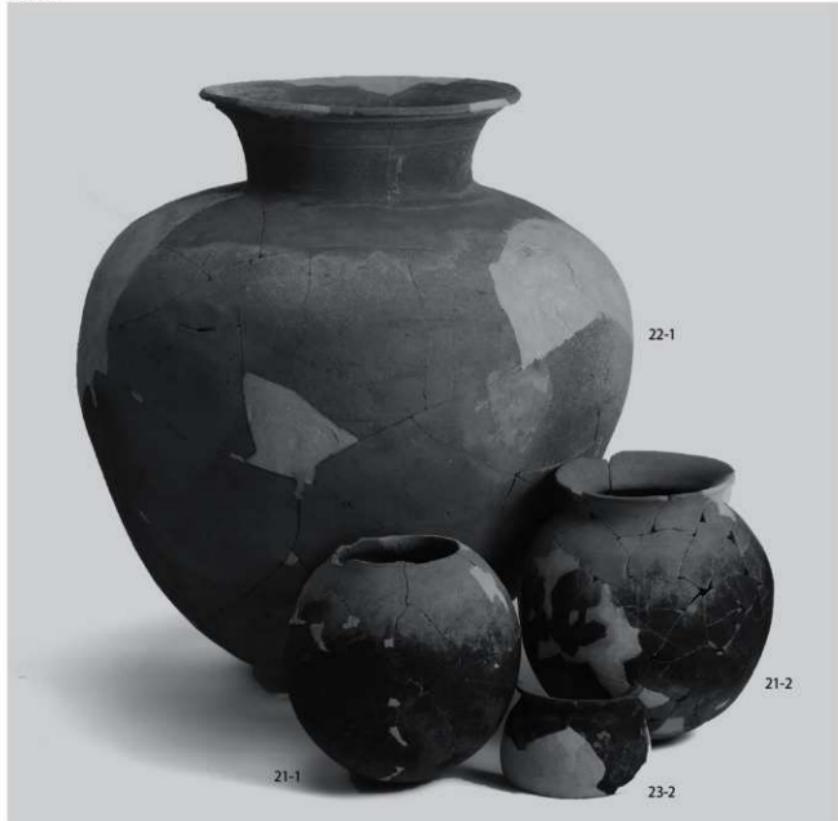
旧河道部の調査：6 区完掘状況（南西から）



SK01 遺物出土状況（北から）



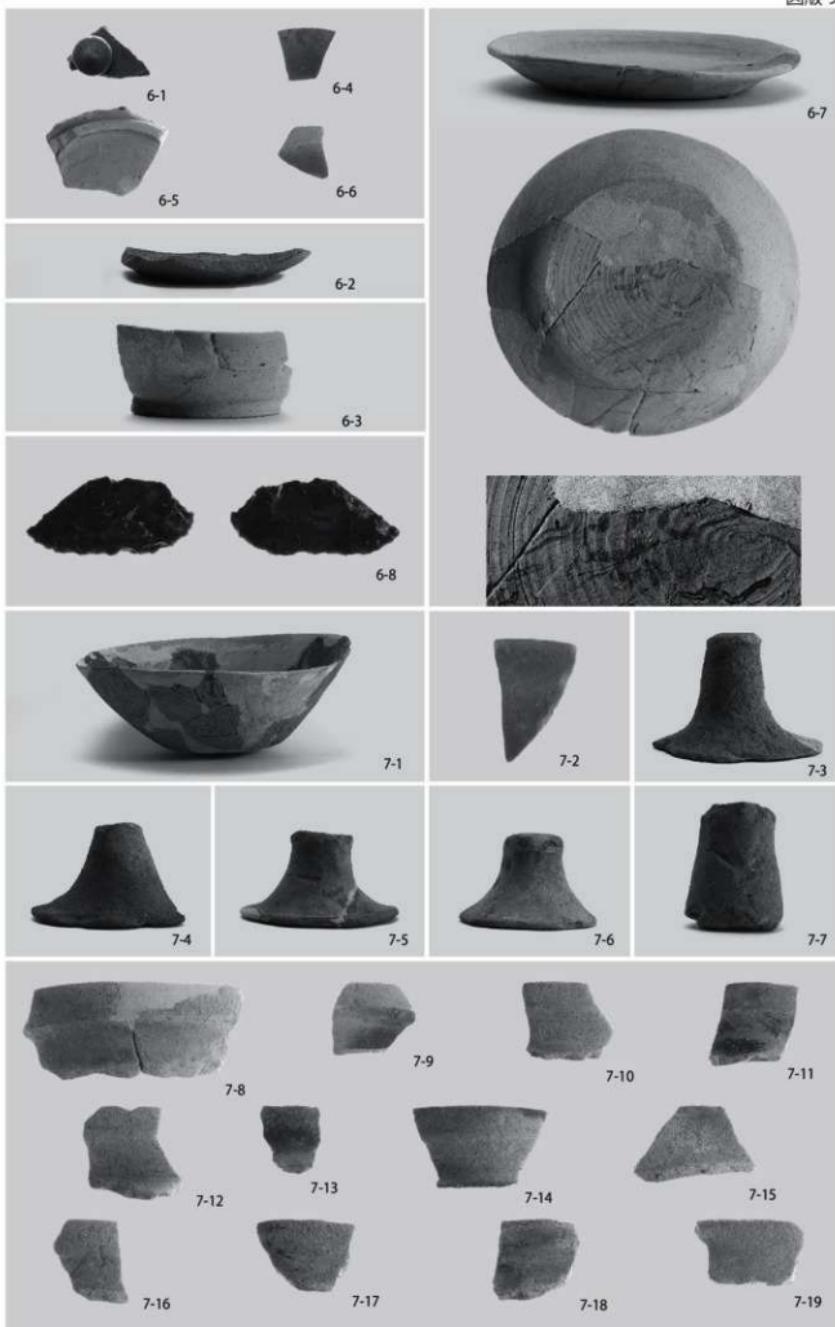
NR03 完掘状況（西から）



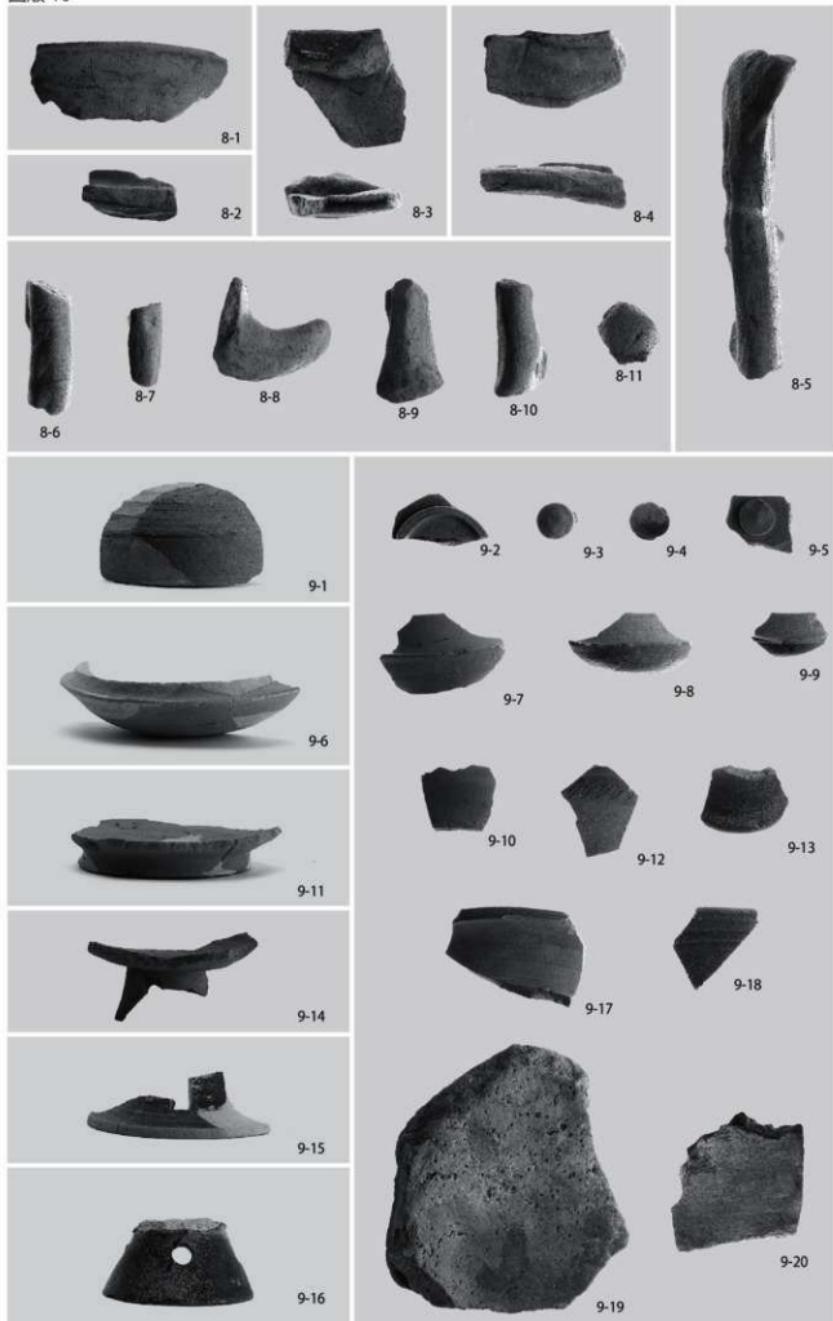
SX02 出土土器



SK01 出土土器

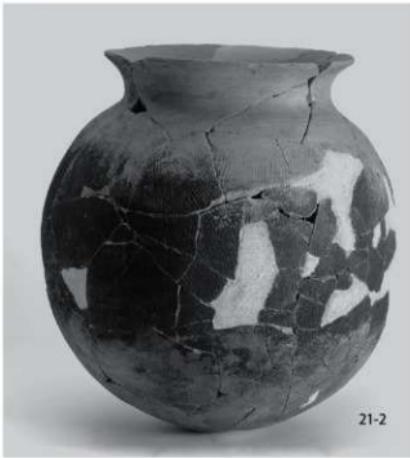


図版 10





図版 12





図版 14



25-11

25-12

25-13



25-14

25-15

25-16

25-19

25-18

25-17



26-1

26-2



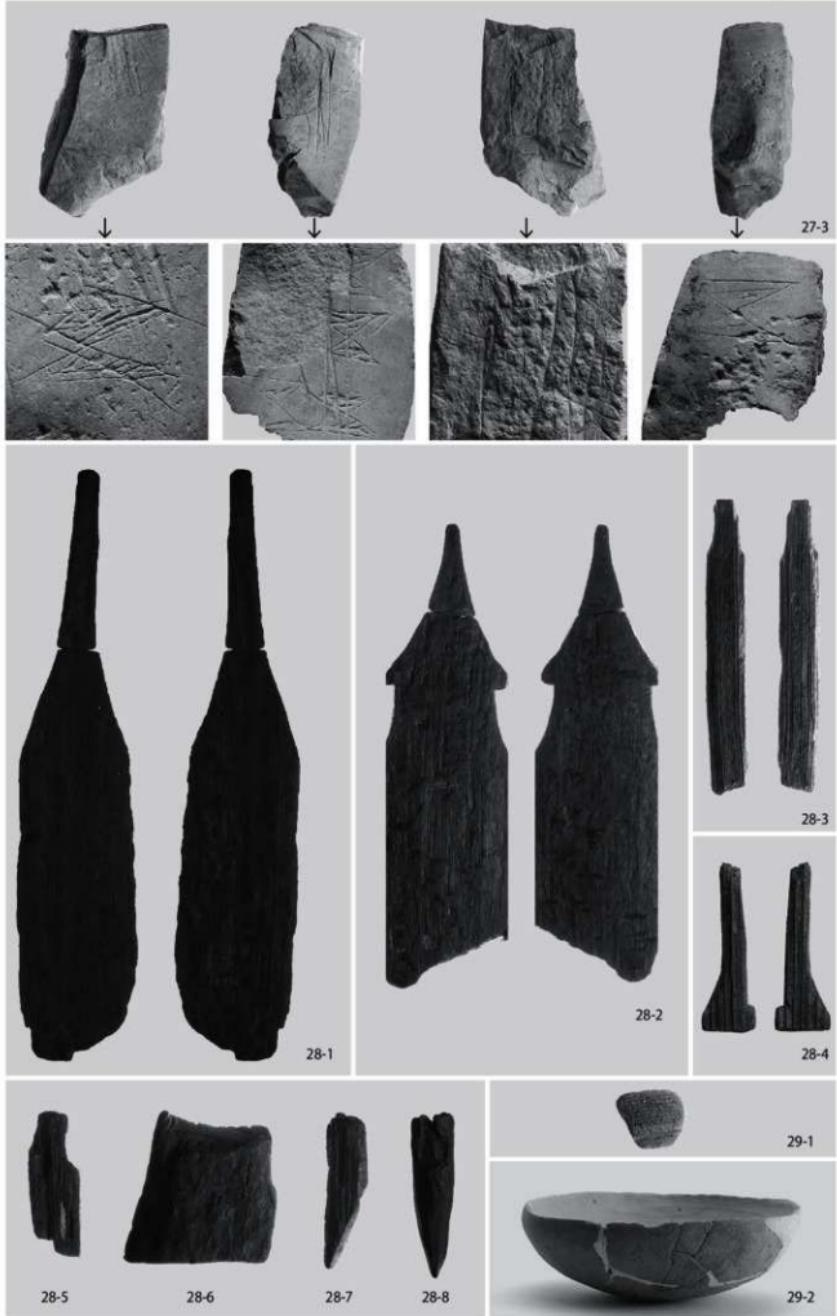
26-3

26-4

27-1

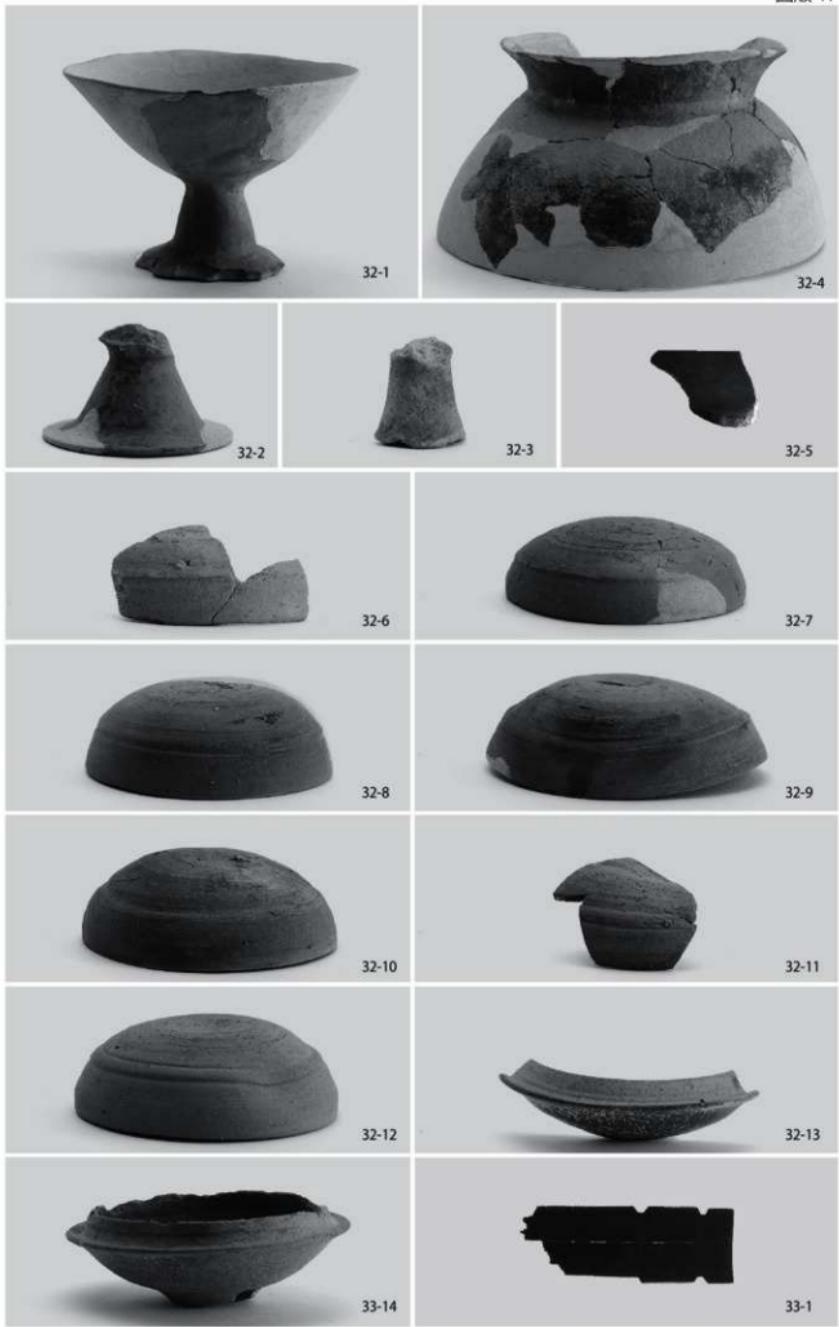
27-2

27-3



図版 16





図版 18



33-2



33-3



33-4



33-5



33-6



33-7



33-8



34-1



34-2



34-3



34-4



34-5



34-6



36-1



図版 20



# 報告書抄録

ふりがな	ひろがきいせき						
書名	広垣遺跡						
副書名	市道古浦西長江線整備事業に伴う発掘調査報告書						
卷次	2						
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第179集						
編著者名	江川幸子						
編集機関	松江市教育委員会 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) ☎ 690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL: 0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 (埋蔵文化財課) ☎ 690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL: 0852-85-9210						
発行年月日	2017年3月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
広垣遺跡	島根県松江市 西長江町 192番地2 193番地2 194番地2 195番地1・2 196番地1	32201	D-586	35° 29' 03" 132° 58' 04"	20151120 ～ 20160318	534.5m <sup>2</sup>	道路工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
広垣遺跡	散布地	古墳時代 中・後期	土坑 杭列	弥生土器 土師器 須恵器 石器 木製品	• 杭列や置き甕など水辺や湿地で営まれた生活の痕跡を検出。 • 土器埋納土坑や河川出土の桃核、刀形は水辺の祭祀を想起させる。		

---

松江市文化財調査報告書 第179集  
市道古浦西長江線道路整備事業に伴う発掘調査報告書 2

## 広 垣 遺 跡

平成29(2017)年3月

発行 糸根県松江市教育委員会  
公益財團法人松江市スポーツ・文化振興財團

印刷 (有)高浜印刷  
糸根県松江市東長江町902-57

---